

388
214

0^m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10¹⁸₅₀^m 1 2 3 4 5

始



388-214

犧

ダンヌンツイオ作

牲

宮嶋新三郎

大正 9. 2. 28 内交

□ 新潮社出版 □

The
Gabriel Mannungis
Gabriel Mannungis

『犠牲』について

私はガブリエル・ダンヌンチョのものをいくらも読んでゐない。『犠牲』も今度翻譯するに就いて始めて読む機會を得たやうな譯である。しかし筆をとつて譯してゐる間に、これほど優れた立派な藝術品を讀まずにおいたことを非常に後悔し、それと同時に今度讀むことが出來、翻譯までする機會に接したのを、大變有難いことに思はないではゐられなかつた。

『犠牲』は私が前に嘗つて讀んだ『死の勝利』よりも『巖の乙女』よりも、深い感激と強い刺戟とを私に與へてくれた。私の心は主人公エルミルと一緒に懷疑し、苦惱し、煩悶し、神經を過敏に興奮させずにはゐられなかつた。主人公の心理の一波一動を生々と而かも力強く感ぜずにはゐられなかつた。あの恐しい渦卷の中に這入つて主人公と共に其の懊惱を分前せずにはゐられなかつた。

『犠牲』の心理描寫が精細で深刻であることは誰も知つてゐる。けれども心理描寫が如何に深刻であり又精細であつても、その心理描寫を蔽ふべく、ダンヌンチョの特色たるあのあ

らゆるものを燃きつくさうとするほどの情熱、南歐人にのみ賦與されたあの白熱赤火の如き本能的衝動と、物質をも悉く理想化せんとする理想主義的傾向とが無いならば、あれほどの生命と熱力とは、『犠牲』に具はらなかつたであらう。情熱と理想とは實に人としてのダンヌンチ、藝術家としてのダンヌンチの生命であり特色である。

『犠牲』には、ダンヌンチの他の作品と同じやうに、筋らしい筋はない。たゞ結婚生活に這入つた一人の男子が、その快樂を擅にした後で、放蕩し出す、其間に妻が或る他の男の誘惑に會つて其の男の子を生む、夫は放蕩にもあきて元の楽しい家庭に歸らうとすると、其處に恐るべき闖入者がある、それをどうにか片附けないうちには、犠牲にしないうちには、どうしても元の楽しい夫婦生活に戻ることは出来ない、其處で其の闖入者である子供を殺す、そのクライマックスに到るまでの主人公の心理を描寫したものが『犠牲』一篇に外ならない。なるほどアーサー・シモンズも云つてゐる通り、此の作などにも『物語』は殆どなくて、唯だあるものは心の状態と、繪畫ばかりである。それでゐて深く讀者を動かさずにはゐない。苦悶懊惱の印象が後までも深く残つてゐる。これは結局作者に驚くべき藝術的才分があるからだと思ふ。つまり、ダンヌンチは同じ心理を描寫するにしても言葉で物語らないで、必ず

繪にして見せる、音にして聞かせる、匂ひにして嗅がせるといふやうな才分を有つてゐる。心を可視化し、可聴化し、可嗅化する所に藝術家的の偉大さがある。『ダンヌンチ』は理想家である、けれどもそれは眼に現實の世界を必要とし、記憶に實際に經驗された感情を必要とする理想家である。』とシモンズの言つたのは卓見である。

『犠牲』についてはまだいろいろ述べたいことがあるが、讀者の自由な権利を敢へて冒すことに忍びないから、もう何もいふまい。たゞ一言、ダンヌンチの作品を読むことは歐洲近代文藝の縮圖に接することに等しいといふことだけをつけ加へて置きたい。といふのは私達はダンヌンチに於いて、近代歐洲のあらゆる作家の特色や要素が化合されてゐるのを見るからである。ダンヌンチに於いて歐洲近代文藝の最も完全な而かも獨自的な花が開いてゐるからである。近代文藝の萌芽が伊太利に發し、而かも伊太利のダンヌンチに於いて其の果を結ぶに至つたといふのも面白い現象である。

ダンヌンチは誰も知る通り、今度の歐洲大戰では戦争詩人として愛國的作家として勇ましい英雄的な活動を見せた。サーベルとペン——これはどうしても兩立しないと思ふものもあらうが、ダンヌンチの前に述べたやうな情熱と理想との特徴をよく考へて見れば決し

てさうばかりは云へないのである。ローマ東京間の飛行といふやうなこともあの南歐的な冒険的精神の發露と見れば、少しもダンヌンチに相應はしからぬ計畫ではない。藝術の生活、生活の藝術化といふことは、ダンヌンチの如き人に於て始めて實現されるのであるまいか。

大正八年十二月

譯者識

凡例

一、此の翻譯はジョーン・ハーディング氏の英譯『犠牲』(The Victim)からの重譯である。原名は『無邪氣者』(L'innocente)だといふ話である。又『闖入者』(The Intruder)といふ別名もあるさうである。

一、忙はしい間に筆をとつたので、右に挙げた英譯書以外には何等参考すべき別書を有しなかつたのは残念であつた。譯文も意に充たない節が多いが、これも讀者に許して貰はなければならぬ、それから英譯では抽象名詞の羅列に終つてゐる心理描寫を出来るだけ碎いて譯したといふ點も一應斷つて置く。

一、尙ほ此の翻譯に際しては友人木村氏及び學友幡谷氏にいろいろ御面倒を煩はした。此處に深く感謝する。

犧

牲

宮島新三郎譯
ダンヌンツイオ作

私は裁判官の前に行つて次のやうに言ふ事が出来ようか。

『私は殺人罪を犯した。あの可憐さうな、幼い者は、若し、われツルリオ・ヘルミルが自ら手を下して殺さなかつたならば、死にはしなかつたであらう。私は自家で犯罪の計畫を建てた。そして落着き拂つて少しも間違はずに、又如何にも空々しく、而かも自分が何をしておるかはよく意識し乍ら、それを仕遂げた。其の後此の祕密を胸に懐き乍ら、今日に到る迄——全一年間、自分の家に生活を續けて來た。今日は其の犯罪の一週年期である。私は汝の手中にある。私の言に耳を假して、私を裁けよ——』と。私はこれが出来ようか？私には出来ない。又したくもない。人間の裁きなどは指一本だつて私に觸れる事は出来ない。地上の如何なる法廷も、私に裁判を宣する事は出来ない筈だ。而かも私の中には、自分を責め——懺悔しようとする願望が強い。私は自分から、誰かに向つて此の事を打開けなければならぬ。

誰に？

では、話さう。

四月であつた。私達——ジュリアナと私と、それからナタリヤ、マリヤの子供二人と——は、ラ・バディオラと云ふ、私の母の廣い、古色を帯びた田舎家で、彼女と一緒に復活祭を送らうと思つて、一三日前に、此の田舎へ來た。私達は結婚して七年になつてゐた。

私に、宥恕と、平和と、愛との祭だと、本當に思込ませた此の前の復活祭を、僧院の様に清淨で、閑寂で、ライラックの花の香に浸つてゐる此の同じ家で送つてから、既に三年経つてゐた。あの頃は、次女のナタリヤがやつとよち／＼歩み初めて、莢トウモロコシから花が抜け出す様に、襪襪ソックス兒を脱しかけてゐた。ジュリアナは微笑むのに何處となく物悲しげな所はあつたが、私には十分なやさしい許しを與へて呉れてゐた。それは、私が初めて酷い不誠實な事をした後で、後悔して、從順オビエに、彼女の所へ歸つて來て未だ間がなかつたからであつた。私の母は何も知らないから、手づから、私達の寢床の上に橄欖の枝を結び附けたり、壁に懸つてゐる小さい銀の聖水盤に水を充たしたりして呉れた。

だがその時と今と此の三年の間に、何と云ふ多くの事件が起つた事であらう。私とジュリアナとの間の不和は、何うにも取り繕ひ様のないものになつた。私は罪に罪を重ねた。私は悅樂を渴望したり、情慾の衝動のまゝになつたり、腐敗した心で物好きな放蕩を求めたりし

て、後悔もせず、遠慮もせず、様々の残酷な方法で、妻に對して罪を犯した。私は彼女の親友を二人迄戀人にした。又テレザと云ふ女とはフィレンツェで表向きに數週間暮らし、その夫の僞伯爵のラフォとは決闘までした。其の時、評判のよくない對手に、或る不體裁な事が起つたので、彼は滿身に嘲笑を浴びたのだ。斯う云ふ出來事は一つとしてジュリアナの耳に入つてゐないものは無かつたが、彼女は此れ見よがしに、又殆んど黙つて、其の苦しみを受けてゐた。此の出來事に就いては夫婦の間にはほんの僅かな、それも極めて簡単な話しか交はされなかつた。只だ正直で押し通せば、寛容な心を持つてゐる優しい、氣高い此の女は、私の罪をも軽く見て呉れると思つたから、私は決して嘘を言はなかつた。

彼女は、知識的には私の方が優れてゐる事を認めてゐる、それから又、多數の人類が公認してゐる道徳的問題に關して、私は屢々彼女に尤もらしい議論を提出して置いたから、彼女は屹度私の放逸をも幾分は許して呉れると、信じてゐた。彼女が私を普通の人と同じ様に批評しないと云ふ事が、私の良心の負擔を軽くした。

『此の女も解つてゐるな。』と私は獨りで考へた。『凡俗の奴等とは違つて、變つた人生觀を持つてゐるのだから、俺丈けは、他の人が俺に賦課しようと思つてゐる法律から除外されて、大多數の輿論を無視し、我一個の性質を、飽くまでも曲げないで生活する事が出來ると云

ふ事を彼女は認めて呉れてゐる。』

何故ならば私は、昔に選ばれた者であるばかりか、類ひ稀れな魂の所有者であると確信し、又私の感情や、感覺の稀れなる美質が、私の凡ゆる行動に貴族風と異彩とを添へるものだと想像して居たからだ。感受性の鋭敏に誇りを持ち、興味を持つてゐた私は、自分の慾望の一表現をも嘗つて否定しよう等と考へた事が無かつた。又何等かの自制力を加へる事が必要だと云ふ事も決して感じなかつた。だが底を洗つて見れば私は責任を負はないで、而かも自分の現状から齎らされる恩恵は皆享受しようと思ふのだから、私の敏感性も實は滅相な色違ひの利己主義に外ならなかつた。

實際私は、ジュリアナの承諾を得て、何から何まで私本來の由自を回復しようと思ひ、偽善や、下劣なごまかしや、虚偽へは決して近寄るまいとした。他の者が偽るのと同じ程度に私は自分の意圖の存する所を彼女に打ち開けた。私は凡ゆる機會に於て、私とジュリアナとの間に、親密と、純な友情との湧いて來るのを願つた。彼女が私の妹、私の最もいい友達であるようにと思つた。

たつた一人の妹であるコスタンザは、九才の時に死んで、それ以來私の心には満たされないう空洞が出來てゐた。私は常に、懐しい妹の事を思出しては、彼女が、やさしい愛の寶、あ

の無盡と思はれる寶を、私に與へて呉れなかつたのを残念に思つた。凡ゆる人間の感情の中で、此の世の凡ゆる愛の中で、妹の愛だけは、最も高尚で、最も慰藉を與へてくれるもの。様に何時も私は考へてゐた。そして此の失はれた慰藉の泉を考へると、死は取返しのかないものだといふことの爲めに、何となく神祕になつてゐる悲嘆に暮れないではゐられなかつた。あゝ、私は何處に他の妹を捜したらいいのか？

此の熱烈な渴望は自づとジュリアナに向いて行つた。彼女は他の女と共に私の愛に與る事を潔しとしないで、どんな愛撫にも近づかうとはしなかつた。私も亦、長い間、彼女の側に居ながら、髪一筋程の感情の動搖をも感じなかつた。私の頬に彼女の氣息がかゝつても、首にある二つの小さい、美しい黒子を見ても、私は少しも氣にならなかつた。彼女が、私の燃える様な熱いキスを受けて蒼ざめたり、氣を失つたりする他の女と同じ女性だなどと云ふことが寧ろ不思議な位であつた。

だから私は兄としての愛を彼女に與へた。而して彼女も靜かにそれを受けて居た。彼女が悲しむなら、私は猶更、復活の望みも絶えて、私達の愛は全く葬られて了つたのだとか、私達の唇は恐らく再び——永久に再び相合ふ事はあるまい等と考へて悲しかつた。而して私の勝手を利己心から、今は挽回出來ないらしい此の悲嘆の爲めに、彼女は心の中では私に向つ

て謝意を表して居る筈であり、又失はれた愛を回想するのと同じく、悲嘆に依つて償はれ、慰められるに違ひない等と、蟲の好い事を思つても居た。私達は愛と情熱とは死の際まで繼續するものだとか考へた事もあつた。さうだ、私達はその夢を信じて居た。而して、永久に！とか、必ず！とかの、華やかな、幻影の様な言葉を、どんなに屢々用ゐた事であらう。最後に私達は肉の親和力、飽くを知らない慾望の、大きな絆きつなに二人の人間を結び合せる其の神祕な親和力を、堅く信じて居た。私達は、種族の創造主が、人間の肉體を借りて、彼の唯一の目的——新生の創造——を遂げた後でさへも尙ほ、此の鋭敏なる肉感に決して消滅しないから、それを信じたのであつた。

だが其の夢は逃げ、炎は消え失せた。私の魂は——私は誓ふ——どん底から此の癡跡に向つて嗚咽をしたではないか。而かも——如何にして自然の必然な現象に對して双向つたか。如何にして止むを得ない事を避けたか。

斯うして、愛は周囲の止み難い運命のために（決して私達の落度ではない）死んで居るのに新しい感情、前のに比較して決して劣らぬ位深遠で、又一層高尚で珍らしい感情で、二人が結び付けられて未だ生活が出来ると云ふのは、大變幸運な事であつた。古い幻影に相次いで新しい幻影が現はれ、二人の魂の間には汚れなき愛情、やさしい情緒、身を切るやうな悲しみ

の交換があつて、私達は實際祝福されてゐた。

だが事實、此のプラトニックな修辭は抑々何を語つてゐたのか。一言にして盡せば、犠牲者は、笑顔をして供物とならなければならぬと云ふことだ。

明かに、此の新生活——最早夫婦ではなくて友達である——は、妹が絶対に献身的であると云ふ一つの假定に基いて居た。私は十分に自由を回復して、私の神経が求める過敏な肉感を追求めし、外の女に溺れもして、家を外に遊び暮らすことが出来た。歸宅して見ると、私の妹が待つて居る。室には數々の心盡しの跡が見える——彼女の手で整頓された机の上には薔薇が匂つてゐる。私の周囲はよく片附いて、グレース（譯者註——愛嬌、貞淑、美、喜悅等を司るギリシヤの三人の女神、アグレイア、ユーフロヂン、）の一人の住居の様に、優雅で、微塵の汚れもなく輝いて居る。確かに私にとつては此の上もない好ましい状態であつた。一體外には何處で、此の女の様な尊い眞珠を見附ける事が出来るであらう。彼女は私のために彼女の青春と美とを犠牲にして不平も言はなければ、又彼女の清い、やさしい額に、殆んど宗教的熱心の一接吻、感謝の接吻を與へられるだけで満足して居た。

私も感謝しては時折、多くの優しい、懇ろな注意を向けてやる位迄、濫い氣持になつた。私は自分が兄としては此の上ない男だと知つて居た。私が他所へ行つてゐる時には、私は

ジュリアナに妙に打沈んだやうな、長い手紙を書いては、其の折々の對手になつて居る情婦に宛てて書いた手紙と一緒に、ポストへ投げ込んだ。而して私の女は、私が死んだ妹のコスタンザの思出に耽るのを嫉妬しないのと同じ様に、ジュリアナにやる手紙に對しても嫉妬することは出来なかつた。

けれども、私は、自分だけの経験の力に浸つては居たけれど、時折心の中に起つて来る或る問題に、全く眼を塞いで居る事は出来なかつた。ジュリアナの身になつて見ると、先例の無い自己犠牲の形を續けて行くには、人一倍の愛で、私を愛さなければならぬ。そしてそれ程私を愛してゐながら、尙ほ妹と云ふ以上に進まないとするれば、彼女は心の中に、恐しい絶望を確かに抱かなければなるまい。些かの悔悟をも感じないで、斯くも純一な、けなげな、愛嬌はあるが何處か悲しげな人の子を、他の徒爾な、濁つた色戀の爲めに犠牲にすると云ふ、其の男は人間でなくて、獸ではなかつたらうか。

私は憶えて居るが(その頃の私の心の墮落は、今でも全く私を驚かす)、良心を宥める爲めに作り出したいろ／＼の理窟の中で、わけても好きなのは次の一つである。道徳的の偉大と云ふのは、激しい悲哀に打克つた結果を指すのであるから、若しも女がさう云ふ英雄的な高所に達しようと思ふなら、宜しく私の興へる苦惱に堪へるべきである——と。

だが私とても、彼女が心身を苦しめてゐるのに、氣附かないでは居られない日が來た。私は、彼女の持前の蒼白さが際立つて來た事や、時には其の中に鉛色の暗い影が這うて居るのに氣がついた。彼女の顔面が、苦痛を抑へて痙攣して居るのを見て私は幾度か驚いた。彼女は幾度も私の目の前で、頭から足迄ガタ／＼慄へて、突然瘡にでも襲はれた様に齒をガチガチ鳴らせた。或る晩は、離れた室に、鋭い苦痛の叫が聞えた。急いで行つて見ると、彼女は衣裳筥に凭れて、丁度毒でも仰いで苦悶して居る様に、全身が痙攣して居た。彼女は私の方へ手を伸ばして、縋つたら放さぬと云つたやうにしつかりと私の手を握つた。

『ツルリオ。ツルリオ。あゝ恐しい……まあ、何と云ふ恐しいことだらう！』

彼女は凝と私を見た。顔をば私の顔の間近かに寄せ、眼を皿のやうにして私の視線を受けて居たが、迫り来る暮色の中では、殊更に大きく思はれた。私は其の大きい眼の中に、名狀し難い苦痛が波の様に過ぎるのを見た。そして其のちつと据つた、堪へ難い眼眸は、突然私に、激しい恐怖を眼醒ました。

夕暮であつた。室は暗かつた。窓はすつかり開かれて、微風にカアテンは膨らんだり、ハタハタ鳴つたりしてゐた。蠟燭は鏡の正面にある卓の上で燃えてゐた。私は何故か知らない、けれどもカアテンの音や、蒼白い鏡に映る蠟燭の焰や——凡てが私の心に不吉な意味を

與へて、何とも云へない恐しさを抱かせた。毒藥と云ふ考へが私の頭を掠めた。同時に彼女は又叫び出した。而して急に苦しみ出し、我を忘れて物狂ほしく、私の胸に抱き附いた。

『あゝ。ツルリオ。ツルリオ。助けて！ 助けて！』
恐怖に全身が凍つて、私は暫くの時一語を口に出す事も、筋肉を微動させる事も出来なかつた。

『何うした。何うした。ジュリアナ。え、何うしたのだえ？』

私の聲が急き込んで居るのに驚いて、彼女は少し頭を擡げて、私を眺めた。私の顔は恐らく彼女のよりも、もつと蒼さめて、引きつつてゐたに違ひない。何故なら彼女は頓狂な、急き込んだ調子で、

『何でも無いのよ、何でも無いのよ。ツルリオ。吃驚しないで頂戴。大した事ではありません。——あの——ただね、私の元からある病氣なのよ。そら、あの差込みなのよ。——直ぐになほりますわ。吃驚しないで頂戴。』

だが私は例の恐しい疑惑に捉へられてゐたから、彼女の言葉を疑つた。周囲のものは何も彼もが或る悲劇的な事件を惹き起すやうに見えた。而して私の心内の聲は囁いた。『それはお前がしたのだ。お前の爲めに彼女は死にたがつて居るのだ。お前が——お前が彼女を此處破

目に陥らせたのだ。』私は彼女の手を捉つた。それは氷の様に冷たかつた。額には油汗が流れてゐた。

『いや、いや。お前は私を欺いてゐる。』と私は言つた。『お前は私を欺いてゐる。後生だからジュリアナ——ね、お前——言つておくれ、お前のした事を。後生だからお前のした事を言つてお呉れ。——飲んだのか？』

私は恐怖に打たれた眼で、室から、卓から、床から——それらしい様な所は残らず何處も搜した。

彼女はやつと其の意味が分つた。もう一度私の胸に凭りかゝつて、恐しさうに私の肩に唇を押しあてて（私は決して彼女の落着かない様な言葉の調子を忘れないであらう）——彼女は云つた。

『いゝえ。いゝえ。ツルリオ。いゝえ。』

あゝ！ 急に目まぐるしく動き出した私達の内的生活に似たものが此の世に又とあらうか。私達二人は黙つたまゝで室の中に向合つてゐた。思ひも寄らぬ、廣い感情と思想の世界は、恐しく明徹な一點を中心にして廻りつゝ、私の頭腦の中を過ぎつた。『だが若しあれが本當だつたらどうだ。』と例の聲が叫んだ。『若しあの事が本當だつたら何うだ。』

ジュリアナは私の胸に凭り掛つて絶えず慄へながら、顔を隠した儘で居た。彼女は肉體で苦しんで居たが、私が若しやと思つた例の行爲が出来ないことはないと言ふことと、私が理由もなく怖がつてゐると言ふこととの外には何も思つてゐないことを私は知つた。

或る疑問が私の唇に上つた——『お前は嘗つて其の誘惑を受けた事はないか。』又『お前はさうした誘惑に従はうとして居るのではないか?』といふ別の疑問も起つた。私はそれを面と向つて彼女に尋ねはしなかつた。だが彼女は屹度それを聞いたに違ひない。私達は暫くの間、死と云ふ考と、死の惹き起す幻想とに支配されてゐた。私達は二人共現實感をすっかり忘れて仕舞つて、一種の悲劇的興奮の状態に入つた。そしてそれを産んだ誤つた想念には頓着しなかつた。突然彼女は泣き始めた。彼女の涙は私の涙を誘ひ、到頭熱い／＼涙は一つに溶合つた。あゝ然し、私達の運命を改める事は出来なかつた。

私は後で知つたのだが、彼女は數ヶ月の間、婦人の體質を根本から覆して、凡ゆる官能作用を亂して仕舞ふ、怖しいが、譯の分らない病氣、つまり複雑な精神上の懊惱に苦しめられてゐたのである。私の方から進んで會つて見た醫者は、私達夫婦の間では愛情を見せ合ふことは、どんなに僅かでも避けなくてはならない、而して此の先き子供でも産んだら、それで彼女の命は亡くなるかも知れないと言ふ事をはつきり私に了解させた。

斯う云はれて見ると、私は一種のショックを感じないではゐられなかつた。が、二つのことで私の心に安易な氣持を與へて呉れた。——一つはジュリアナの健康の勝れないのは私の行爲ではないと云ふことであつた。それから今一つは家庭生活から見ても是非夫婦が別居しなければならぬ單純な口實を母に提供することが出来たと云ふことであつた。私の母は私の弟のフエデリコと一年の大方を過してゐる田舎から、丁度ローマへ出て來た所であつた。

母は心から、若い嫁に惹き附けられてゐた。母から見ると、ジュリアナは本當に理想的な妻であつた。——息子の爲めの此の上ない伴侶だと夢想してゐた女であつた。縹緞にしる、人好きのいゝ事にしろ、育ちの上品なことにしろ、彼女に並ぶものを、母は知らなかつた。母は、私が外の女を欲しがつたり、別な女の腕に抱かれたがつたり、他の女の胸に頭を埋めたりする等と云ふ事を夢にも思つて居なかつたであらう。二十一年の間と云ふものを、只だ一人の男に愛され續けて、其の情の變る事もなければ、信用を裏切られる事もなく——其の男の死ぬ迄——倦怠、嫌惡、虚偽等といふ結婚の上衣の下に隠れてゐる色々な悲惨も、不幸も、彼女は知らないのであつた。私が、此の優しい、不平も言はない者の上に加へた侮辱に氣が付きさへもしなかつた。寛裕なジュリアナの隠蔽に欺かれて、彼女は私達の幸福を信じきつてゐた。若し母が知つたら!

其の時分私はまだテレザ・ラフォに迷つてゐた。彼女はいつても私の心に、アポロがメンボに與へた言葉——あの醉ふやうな詩を思出させて呉れた。(おゝ、美しき若者よ。汝は蛇を抱き、蛇は汝を抱く)と云ふ詩を。

私には都合の好い事が起つた。テレザは或る親戚の者が死んだので、據所なくローマを去つて、暫く他所に滞留しなければならなかつた。私は馴れないながら妻の傍で勤めて介抱してやつて居れば、金髪美人が居なくなつて、私の生活に大きな空虚が出来ても、其の忠實振がそれを満たして呉れる筈であつた。と云ふのはあの夜の昂奮が未だ消えきらないで、而かも新しい、譯の分らない或る物が、其の時以來、私とジュリアナとの間に起つてゐたからであつた。

彼女の肉體的苦痛は急速に増して行つたのに、どうしてもしなければならぬ手術を受ける様に彼女に承諾させるには、母と私とはどんなに骨を折つたか知れない。其の手術をした後は病床に絶體的安靜を保つて、すつかり平癒しきる迄に一ヶ月乃至六週間はかゝる見込であつた。此の哀憐さうな女の神経はもう極度に疲勞して、氣短になつて居た。手術の長い、苦しい準備が、彼女をひどく疲勞させて、一再ならず、凡てを止めて了はうと云つたり、又彼女を擾し、馬鹿にし、嫌はせた苦痛に反抗したりした。

『本當の事を仰有つて下さい。』と、口の周圍に苦しさうな色を浮べて、或る日彼女は叫んだ。『貴方はそれをお考へになると、私をお恐れになりはしませんか知ら？ それは何と云ふ醜い、賤しい事でせう。』彼女は自分を嫌ふやうな身振りをして、陰氣に押黙つて了つた。

或る日、彼女の室に這入つて行くと、消毒劑の臭氣が私を不快がらせたのを、彼女は早くも見て取つた。而して寢衣の様に色褪めながら叫んだ。

『彼方へいらつしやいよ。ツルリオ。彼方へ！ お願ひです。そしてね、私が又よくなる迄いらしつてはいけません。若し此處においでになりますなら、貴方は私が憎くなります。——私は此の通りに憎らしい、嫌やな女です。私を見ないで下さい。』そして彼女は涙に暮れた。それから數時間して、彼女の稍々氣が落着いた時、私は、彼女が熟睡したものと思つて、黙つて坐つて居ると、夢で話して居る様な變な調子で、突然呟いた。

『あゝ、若し私が本當にそれしたら！ あゝ、いゝ事を教はつた——』

『何を言つて居る。ジュリアナ。』

『彼女が答へなかつた。』

『何をお前は考へてゐただえ。ジュリアナ。』

彼女は僅かに唇を動かしただけで、微笑まうとしたけれど、それさへ出来なかつた。

だが私には會得出來た。悔恨と、愛情と、憐憫とが、私の上に波打つて來た。現はすことの出來ない、曖昧な、今では何の役にも立たない情が、胸一杯になつたのを知らせる爲め、その時は彼女に私の心の中を讀む何等かの術を興へてやりたかつた。『許して呉れ。許して呉れ。お前が私を許して、今迄の残酷だつた事を忘れて貰ひたいのだが、それには私はどうしたらよいのか教へて呉れ。私はお前に歸つて行く。今からは私はお前のものになる——永久に。本當のことを打開ければ、お前以外に誰をも愛しはしなかつたのだ。私は只だお前だけを愛した。私の魂は、悲しんだり、悔いたりして、いつでもお前の所へ還つて行く。私は誓つて言ふ。お前を離れては本當の幸福を味はつた事がない。本當に我を忘れて仕舞ふと云ふやうな事は一瞬間もない。決して、決してない。此の世の中でお前一人が善良で、親切だ。私が今迄勝手に色々想像して見た女の中で、お前は一番心が高尚で、人好きがする。私がお前を誤らせ、苦しめ、死を楽しい救済だとさへ考へさせたのを思ふと……どうぞ私を許して呉れ。だが私としては自分を許す事が出來ない。お前からなら許せる。だが私には許せない。私は、自分をいつも價値のないものと見よう。私の生涯を捧げても、お前の心を繕ふ事は出來ない。今からはお前が改めて私の戀人だ。友達だ。妹だ。改めて私の監視者で、又指導者だ。私は何も彼も言つて仕舞ふ。お前に洗ひさらひ心を打ち開ける。私がどんなに優

しい心でお前の病氣を癒し、又お前を慰めるか、今に分るだらう。あゝ、今にお前はそれを知る。思出してくれ。思出してくれ。お前はあの時も病氣であつた、お前を癒してやる者は私以外にはなかつた。私は夜も晝も、お前の病床を離れなかつた。お前は其の時に言つたぢやないか。「ジュリアナは貴方の此の心遣ひは忘れません。決して。」お前の眼に涙が流れると、私は震へ乍ら、それを接吻で拭ひ取つてやつた。その日を思出してくれ。お前がよくなつて起きられる様になつたら、私達はヴィルラリルラに行かう。お前は未だ弱くて、身體が悪いが、直きよくなるだらう。私の心は昔の様になる。而してお前を微笑させたり、笑はせたりしてやる。お前は、私の心を清める鈴の様な笑を直ぐ取り戻すよ。又お前は直ぐに優しい、娘らしい舉動になるよ。而して私がいつでも好きな様に、髪を長く組むだらう。私達は未だ若い。お前にその氣さへあれば、失はれた幸福を復する事が出來る。私達は生きよう生きよう。』

これは皆んな、私が彼女に向つて、心の中で言つた事である。が口へは出さなかつた。それは私が深く動かされて、眼が濡れてはゐたが、私は、氣持は變り易いもので、私のこの約束も所詮徒爾になる事をよく知つてゐたからである。それに又、ジュリアナは欺かれないで、それに對する答も、前に幾度もした様に、唇の所へ勢のない不信さうな微笑を現はす位が關の山であることをよく承知してゐた。その微笑は、『なる程、貴方は親切です。私を苦し

い目に逢はす様な事はなさいません。けれども貴方は自分を制御なさる事が出来ません。貴方は、貴方に迫る強い衝動を退ける力をお持ち合せになつておけません。貴方は何故、私の眼を眞實に向つて閉ぢさせようとなさるのですか。」と云ふ意味を含んでゐた。

私はだからその日は黙つてゐた。それから幾日となく、私は同じ様な興奮と、混乱した思附きと、譯の分らない夢とに出會はしたが、それを口に出す事は敢へてしなかつた。『若しお前が彼女に歸るならば、お前は現在享樂してゐる事物と、お前の心を腐らしてゐる女とを捨てなければならぬ。お前はそれをするだけの力を持つてゐるか？』此の私自身の疑問に向つて私は答へた。『誰がそれに返答する事が出来よう？』と。毎日々々、私は此の力が湧いて來るのを待つた。此の決心を私に與へて、それを不可抗の事にする何事かの起るのを待つた。(それが何であるかは私も知らなかつた。)私は今後の新生活、正しい愛の遅々とした芽ぐみ、半ば忘れてゐた感情の新しい匂ひを、自分で夢見始めた。『ヴィルラリルラに行かう。其の家には私達の一番甘い記憶が薫つて居る。——私達は二人切りになつて、マリアとナタリアとはバディオラの彼女達の祖母の手許に残さう。天氣は穏やかで、温かだらう。病人は私の手に倚り掛つて、よく知り悉して居る道を緩かに歩くだらう。私達の思出は歩々に眼醒めて行くであらう。彼女の蒼白い顔には美しい血潮が差すであらう。私達はお互に、幾分含羞^{はにか}んで振返

るだらう。——時折は物思ひに沈んだり、お互の視線を避けたりするだらう。何の爲めに？

其の間に場所から受ける暗示が強いから、私が敢へて新婚當時の甘い夢の様な出來事を、彼女に思出させる時が來るであらう。お前は覺えて居るか。此の事を？ あの事を？ 少し宛私達の情緒は濃やかになつて、とんと堪へられなくなり、遂には同時的な衝動に驅られて、お互に抱擁し合つて、唇は相合うて、氣も遠くなる。彼女は本當に氣を失ふだらう。而して私は、限らない愛が暗示してくれる様な愛稱で彼女を呼んで、私の腕に抱いてやらう。彼女は直ぐに眼を見開いて、長い間着けて居た假面をかなぐり捨てるだらう。而して其の瞬間に彼女は凝乎と私を見据ゑる事だらう。其の時彼女は打つて變つたやうになるだらう。長い年月の後！ 長い年月の後！——』

然しあゝ其の朝醫者がコロホルムを服用させた時、彼女はまるで死ぬかと思はれた。自分でも彼女は死の無意識状態に近附いてゐるのを感じて、二度も三度も私の方へ手を出して助力を求めようとした。私はそれを見るに、堪へなかつたので、室を出た。

私は、想像の砥石で私の苦痛を一層鋭くして、死ぬ思ひをしながら二時間といふ長い間待つた。其の間外科醫のナイフで亂暴に肉を切開せられるばかりでなく、婦人の持つてゐる最も奥祕の優しい感情の中心、內的靈場をも切開されてゐる此の可哀さうな女に對して、私の

絶望的な憐憫は、命をも絞る位に動いて来た。

私がジュリアナの室に歸つて行つた時彼女は未だ麻痺劑の影響で死人の様に、無意識で、無言の状態にゐた。私の母は顔色を失つて、興奮してゐた。だが手術は成功した様であつた。醫者は非常に満足してゐた。ヨードホルムの臭氣が室中に漲つた。室の隅では英國生れの看護婦が氷袋を充めて居た。助手は繻帶を巻いてゐた。其の中に段々四邊には元通りの秩序立つた清潔に戻つて行つた。

病人は長い間一種の失神状態にゐた。熱は殆ど無い様であつた。でも夜になると彼女は、苦痛の恐しい痙攣で悩まされた。阿片もそれを和げる効が無かつた。私は彼女の残酷な苦痛を見て居ると、恐怖と不安とに襲はれて、今にも彼女が死にはしないかと思ひ乍ら、何を言ひ、何をすべきかを知らなかつた。私は只だ彼女の苦痛を共に分ちたいと思ふ許りであつた。翌日、彼女は少しよくなつた。それから日一日と少し宛恢復して行つた。本當に遅々としてではあつたが、彼女は力を恢復した。

私は疲れもしないで注意を傾けた。私は彼女に前の病氣のことを思出させようとして、多少は表面上の詐りもした。が、私の感情はあの頃とはまるつきり變つてゐた。私はやはり彼女の兄であつた。彼女の爲め、好きな本を屢々聲高く讀んで聞かせてやつても、私の心は

何時も其の場に居ない情婦から来た手紙の文句の上に引掛つてゐた。眼前に居ない者が、心からは離れなかつた。けれどもさういふ手紙に返事をやる氣のしない事も度々あつた。これは強烈な熱情にも来る事のある、特殊な一つの休息である。而して私はこれを、今に戀が冷めて行く徴しるしだと考へてゐた。而して自分では又言つた。「誰が知らう？」と。

或る日母が、私の面前で、ジュリアナに言つた。

『お前がよくなつて起上る事も、動く事も出来るやうになつたら、私達は一緒にバディオラに歸らうね。ねえ。ツルリオ。』

ジュリアナは私を眺めた。

『ええ、ええ。お母様。』と、私は無考へに、寸分の躊躇もしないで答へた。『而して私とジュリアナとはヴィルラリララに行きませう。』

ジュリアナは又チラと私を眺めて、それから微笑した。——それは或る大きな、豫想外の事を約束せられた病児の様な、何でも信じる子供らしい微笑であつた。彼女の睫毛は伏さつて、何か遠い、遠いものを睨めて居る様であつた。半分閉ぢた眼許には、美しい微笑が漂ひ續けてゐた。何と云ふ美しい彼女であらう。其の瞬間、私は如何に彼女を崇敬した事であらう。私は此の世に、彼女の清い、單純な情緒に比較すべきものは何もないと思つた。

限のない和樂の氣が彼女から湧き出て、私の全身を貫き、溢れる迄に私の心に充ちるかと思はれた。彼女は寢床の上に二三の枕で支へられて坐つてゐた。房々と解いてある栗色の髪に縁取られた彼女の顔は、此上もない、殆んど靈性の様な美しさを持つてゐた。手は無頓着に差出して居たが、敷布と同じ様に白くて、只だ青い靜脈が其區別を附けるだけであつた。

片方の手を私は握つて——其の時私の母は室を出てゐた——そつと言つた。

『私達は歸らう。——ヴィルラリルラへ。』

彼女は答へた。

『えゝ。』

私達は、此の感情を長く續けたかつたので、又幻影を汚したくなかつたので、それ以上は言はなかつた。二人は、此の小聲で交はした數語の中に、隠れてゐる強い意味を、了解し合つてゐた。一種の本能が、それ以上明瞭はつきりと言ふな、それ以上の事實に進むなと警告して呉れた。若し私達がそれ以上の事を言へば、二人は現在魂に斯くも美しい夢を見せて呉れて居る幻影とは比べにならない醜い現實と顔を合せなければならなかつたのである。

永い午後を殆んど二人で過ごした、時々思ひ出したやうに書物を読んだが、同じ頁の所に止まつてゐた。私達の眼は同一の行を追うた。數卷の詩集を持つて居たが、其の中の詩に向

つて、それが實際に持つて居る以上の強い意味を附けたりした。私は、自分が表現する事の出来ない感情を云ひ現はしてゐる様な行に、爪でアンダアラインを引いた。

私は願ふ、柔かき、燃ゆる美しき眼の、君に導かれ

君に命ぜられて、わが手の慄ふらん、君が手を取るを。

ひたぶるに進み行かん、苔ある小徑も

巖や、石塊の遮る道をも。

げにわれは進まん。一筋に、靜かに世をば。

彼女はこれを読んでから暫くの間枕の上に仰向けになつて、眼を閉ぢながら、唇に殆んど見えない位の微かな笑を浮べた。

なれ、親しみよ、なれ微笑みよ

なれこそはよき教へなれ

誠ありて勇ましきよき教へなれ。

然し私は、彼女が息をするに随つて、胸の上の打紐が微かに動くのを見た。それは敷布や枕の間から立ちのぼる雪菖蒲の根の微かな薫の様に、私の心を擾して、變な氣持にした。私は、彼女が突然情熱に驅られて、私の首に腕を捲き、彼女の頬を私の頬に押し付け、而して彼女の口の一端が私の頬に觸ればいゝにと願うたり、待つたりした。

彼女は頁の上に繊細な人差指を載せて、爪で欄外に印を付け、次の行に私の眼を導いた。

なれが聲しるかりき(かつては慈しみ合ひしか)

されど今は曇れり

嘆きに沈む嬌やもひの如くに。

なが知れる聲は言ふ

親愛こそわが生命なれと

その聲は又語る、心足れる

單純さの、また金婚祭の

また勝利なき平和の

穩やかなる幸福の光榮さ

聽けよ、その單純なる婚賀の歌に

永久のその聲を聽けよ。

魂を喜ばしめるに勝りて

人の魂によき事はあらず

私は彼女の手首を把つて、頭を屈めながら彼女の掌てのひらに唇を押しつけた。

『お前は——忘れてくれる?』と私は呟いた。

彼女は私の口を手で掩うて、警語を發した。

『しッ!』

其瞬間、私の母はタリス夫人が見舞に來た事を告げに入つて來た。私はジュリアナが迷惑想

な顔をしたのに氣附いた。私も亦此の間の悪い時に來た見舞客に對して、一種の怒を感じた。

『あゝ神様!』とジュリアナな溜息をついた。

『ジュリアナは寝てゐると言つて下さい。』と、私は母に懇願する様な調子で暗示した。

然し母は其の見舞の客が次の間に待つてゐると私に知らせた。だからどうしても應待しななければならぬのであつた。

問題の此婦人は、誠に厭な、舊弊な饒舌家であつた。彼女は時々私に、物好きらしい、搜る様な一瞥を投げた。母が話の行き懸りで、私が日夜病人の傍に侍して、病になり初めの時から變らずに看護してゐると言ふと、タリス夫人は、明らさまにも皮肉な調子で言つた。

『本當に申し分のない良人で居らつしやいますこと!』

私は當惑して、起上つた位であつた。而して或る一寸とした口實を作つて、室を外した。

私が家を出ようとする時、階段の所で、マリヤとナタリヤが、家庭教師に伴れられて上つて來るのに出會つた。彼等は何時もの様に私が飛び附いて、接吻を浴びせた。それから年上のマリヤは、郵便函から取出して來た數通の手紙を私に手渡した。その中に、今、此處に居ない者の手蹟が交つてゐるのを、私は直ぐ目に留めた。私は待ち切れない様にして子供から脱れて、町へ出た。其處では氣にする事はないので、立止つてその手紙を読み初めた。

それは簡單だが、情熱が籠つてゐた。テレザが私を動かす慣用手段として用ゐた鋭い二三の語も見えた。彼女の告げる所に依ると、此の月の二十日から二十五日の間にフィレンツェに來る。而して其處で『昔の様に』私と會はうと云ふのだ。彼女は、お目にかかつた上でいろいろ珍聞をお耳に入れると約束してゐる。

此瞬間に、最近の感情から生じてゐた凡ての夢想や、計畫は、一陣の風に揉まれる梢の花の様に、私から散つて仕舞つた。而して散つた花が再び梢に歸らぬのは、聽て私の魂に於ても同様であつた。私にとつては、それが初めから無かつたも同じであつた。私は自分を落着けようと力めたが、些かも効果がない。私は目的もなく町々を徘徊した。私は菓子屋へ入つた。それから本屋へ入つた。而して菓子やら、本やらを機械的に買つた。宵闇は迫りかかつて來た。灯が點いた。敷石道には人通りが繁くなつて、二三の貴婦人は馬車の上から、私の會釋に答へた。或る友達は、薔薇の花束を持つてゐる戀人を伴れて、私の傍を通り過ぎた。彼等は樂しげに語つたり、笑つたりし乍ら道を急いだ。都會生活の毒々しい空氣が私を包んで來た。而して肉感に對する渴望、肉慾、淫蕩なる好奇心が、數倍の力で眼醒めて來た。テレザは手紙の中の例の文字で、今一度私を誘惑した。私は自分の慾求を最早抑壓する事が出来なくなつた。だが、最初の感情の一騒ぎが幾分靜まつて家の梯子段を上つて居た時には、私は今起つた

事、今私がした事を、十分嚴肅に考へる事が出来た。たつた一時間前に、未だ病氣で衰弱してゐる可憐な無邪氣な者に對し、暗黒の裡ではあつたが、非常に莊嚴に、愛の契約を新たにし、名譽を誓ひ約束をした事を、私は明瞭と思浮べた。私は汚辱の念を伴はずに歸る事は出来なかつた。あの虚偽の感情に依つて自分が誑らかされた事を、私はどんなに後悔したらう。何故私は馬鹿になつて、涙つぽい優柔を、私に忍び寄せたのであらう。私は細心に其日の一言一行の何處かに言ひぬける道はあるまいかと丁度詐欺商人が、既に結んだ契約の或る條項を破棄する爲め、その方法を考へてゐるやうな、冷淡な狡猾さを以て、驗べて見た。あんな詩を讀んだ後で、あんな調子で、『お前は忘れて呉れるね。』と言つたのは、確かな斷定を置いた様なものである。するとジュリアナは『しつ！』と言つて、それに封印を付けて仕舞つた。

『だが、』と私は考へた。『今度彼女は俺の悔恨したことを實際に信じたらうか？ 俺がどんな好意を寄せても、彼女は習慣的に幾分疑つてゐはすまいか？』而して私は又もや、彼女の唇に幾度となく上つた、あの信じさうもない微笑を思出した。『若し彼女の心のどん底で、それを信じて居ないなら、若し彼女の幻影が直ぐに消えるものなら、私の約束の破棄も決して大した事ではない。それはさう激くは、彼女を傷附けたり、汚したりはしないであらう。此のエピソードも目立つ様な結果はなくて済むだらう。私は従前通りに自由の生活を續けて行か

う。ヴィラリルラは再び夢の王國となつて消えるであらう。』然し私は又、ヴィラリルラの名が彼女の唇に浮べさせた——新しい、豫期しない、信じた様な、別の微笑を思ひ起した。私は何うしたらいいのか？ どんな道を辿つて行かうか。何うして自分を制して行かうか、テレザラフオの手紙は私のポケットの中で炎を立てゝゐた。

私がジュリアナの室に歸つて見ると、彼女が私を待ちこがれてゐたことが、一目で分つた。彼女は上機嫌であつた。眼は輝いて、蒼白さも薄れてゐた。

『ツルリオ。何處へ行つてらしたの。』とにこにこして尋ねた。

『タリス夫人に追出されたのさ。』斯う私は答へた。

彼女は又笑つた。——瑞々しい、娘らしい笑ひが、彼女を若返らせた。私は書物と菓子の箱とを彼女に與へた。

『私の？』と、彼女は嬉しさうに聲を立てた。而して頑定ない子供の様に、急いで箱を開けようとしたが、其の手の動きが、私の心に遠い昔の事を思出させた。『私の？』

彼女はボンボンを取出して、口に持つて行かうとして、躊躇つて遂に取落した。而して箱を押しやつて、言つた。『今に、今に頂きますよ。』

『ツルリオ。お前知つておいでか。』と母が言つた。『此女は何も未だ喰べないのだよ。どうし

でもお前を待つてゐると言つてね。』

『それからね。私、まだお話しませぬけれど。』と、ジュリアナは顔を薔薇色に染めて、口を開いた。『貴方がお出掛けになつてからお医者様が見えたのを、未だお話しませんでしたね。お医者様は私が段々よくなつて行くと仰有るのよ。木曜日に起きようと思ひますのよ——いいでせう、貴方。十日もしたら、精々二週間もしたら、私、旅行が出来ますわ。』

それから暫くして、彼女はそつと呟いた。

『ヴェルラリルラー！』

してみると、彼女は、何も外の事を考へたり、外の事を夢見たりしてゐたのではなかつた。彼女は信じてゐたのだ。——全く信じ切つてゐたのだ。私は自分の昂奮を隠すのに、どんなに骨を折つたか知れなかつた。

私は自分から忙しさうにして彼女の食事の用意をしてやつたり、膝の上に小盆を載せてやつたりした。

彼女は私の一舉一動を、慈しむ様な眼眸で睥めるので、私は實際當惑して仕舞つた。『あゝ、若し此女が見抜く事をしたら……』

唐突に私の母が、感歎した調子を隠さうともせずと言つた。

『今夜は、本當に綺麗に見えるよ。ジュリアナ！』

それは事實であつた。非常な活氣が顔中を晴れやかにさせて、眼も光つた。二つ三つは若返つて見えた。私の母の言葉を聞くと彼女は頬を染めた。此の紅い色は其の夜は一晩中彼女の頬に残つてゐた。

『私ね、木曜日には起きようと思ひますの。』と彼女は繰返して云つた。『木曜日、もうたつた三日間ですわね。私、どうして歩いたらいいのか忘れたかも知れませぬわ。』

彼女は、病氣の全癒と、田舎へ行く事とに必ず話題を戻して行つた。母に向つて別荘の有様や、庭の有様を根掘り、葉掘り訊いてゐた。

『私が此の前行つた時に、池の邊に柳を植ゑて置きました。ツルリオ。貴方は覚えて居らしたつて？ あの柳がまだ彼處にありますか知ら？』

『あるよ、あるよ。』と、母も嬉しさうに答へた。『それはよく育つて、今では立派な木になりました。フエデリコに訊ねて御覽。』

『あら、本當ですの？ それからね。お母様——』

此の些細な事が、その折の彼女には、非常に大切な事の様には思はれてゐるらしかつた。彼女は楽しさうによく喋つた。彼女が、所詮夢になつて仕舞ふ空想に、こんなに迄興に入つて

ゐるのを、私は驚かないでは居られなかつた。

『何うして、今度に限つて、こんな迄信じたのだらう。何うして何時になく、深く信じて居るのだらう。』私が巧んで彼女を欺いて居る事を考へると、避け難い事ではあるが力の無い怒で胸が一杯になつた。

『だが何故避け難いのか。俺は其の束縛を断ち切つた事もあるではないか？ 俺は約束を果すべきである——いや、果さねばならぬ。母があゝの約束の證人である。どんな事があらうとも私はそれを守らう。』良心の震ひ撼く様な、非常な努力で、私は不決斷な心を擲つた。而して、私の靈魂の全力を擧げて、ジュリアナへ還つて行つた。

彼女の美しさが、新たに私の心に映つた。こんなに興奮して、樂しげで、若々しい姿を見ると、私は昔のジュリアナを思ひ出した。あの頃私は屢々、静かな家庭生活から飛立つ様にしては、彼女を胸に掻き抱いて、戀人の狂熱的な情を寄せて、接吻したものであつた。

『いゝえ、お母様。もう澤山ですよ。』と、彼女は、母がもつと酒を注がうとするのを遮ぎつた。『つひ、うっかりして、飲み過ぎましたわ。あゝ、あの白葡萄酒、貴方覺えて居らして？ ツルリオ。』

彼女は私の眼を見入つて笑つては、あの頃の戀の思出に耽つた。その思出には、彼女が何

にも増して喜んだ白金色の酒の香ばしい匂が漂うてゐたのであつた。

『うん。僕も覺えてゐる。』

彼女は睫毛をしばたたいて、眼を閉ぢてから言つた。『此の室は大變温いねえ。私耳が熱つてゐますわ。』

彼女は熱さを驗べて見ようとして、両手を顔の兩側にあてた。病床の側に點つてゐるランプは、彼女の顔の柔かな曲線美を、はつきりと照らし出した。今は赤くなつてゐる小さい耳の上に波打つてゐる栗色の頭髮が、金色に輝いた。

直ぐ後で、彼女の膝の上の盆を取除いてやると、母と看護婦は暫く次の間に下つてゐた。彼女は囁いた。

『ツルリオ！』而して人目を憚るやうな身振りで私を彼女の方へ招き寄せて、頬に接吻した。

此の接吻で、彼女は又永久に、私の心身を確實に占有することが出来ようか？ あれ程慎しみ深い妻が、斯うした行ひをするのだから、私と共に新生涯に入る爲めに、過去の凡ての記憶を一掃して仕舞つた積りでゐるに相違ない。今までに、彼女がこれ程までに、あはれな敬愛と、信任とを以て、私に對した事があらうか、忽ちの間に、妹は妻と變つて仕舞つた。私の接吻を祕密に胸の奥に疊んでゐる妻になつた。婦人の心に生々とした粘り強い記憶とな

つてゐる肉體的な感じを抱いてゐる妻となつた。其の夜私一人になつてから、凡ての事を思ひ返して見たら、過ぎ去つて行つた日々、遠い昔の夜の、様々なとぎれ／＼の幻想が浮んで來た。神秘的な薫を籠めた、温い、薔薇色の六月の夕は、孤獨なる者、悔恨する者、徒爾なる事を望む者にとつては、どんなに物惱ましかつたか知れない？ 私は室にはひつた。彼女は開いた本を膝の上のせて、窓際に坐つてゐた。——物憂く、死んだやうに蒼ざめて、半ば失神した人の様であつた。『ジュリアナ。』彼女は飛び上つた。『何うした？』『何でも無いのよ。』と彼女は答へた。何かを抑へ忍んでゐる様な動搖が、彼女の見開いた眼に現はれた。悲しい諦めをしたあの頃から、彼女は幾度か、其の瘦せ細る肉を撫して苦しんだ事であらう。私の考へは、彼女が近頃になつて何かに事寄せて見せる沸り立つ様な愛情の様々な幻影の上を彷徨つた。而してかういふ考は、私の心に、あの約束を果さうと決心させた。

だが翌朝、眼醒めた時には、過ぎ去つたことをすつかり思ひ出さうとしたが、其の思出は徒らに混混してゐるだけであつた。テレザから來た手紙を見た瞬間に於て私は再び陋劣と不安に捉へられて仕舞つた。此の手紙には彼女は、二十一日にフィレンツェで遇はうと約束し、時間と場處まで正確に書き加へてゐる。二十一日は土曜日であつた。十九日の金曜日には、ジュリアナが初めて起きる筈であつた。何とかして會ふ事は出來ないものかと暫く首を

捻つた。さうしてゐる中に曩の私の決心も搖ぎ始めた。さうだ。テレザと手を切ることは必要でもあり此の際避け難い事でもあつた。が、何うしてそれを持出さう。どんな口實の下に？ 手紙で簡単に私の決心をテレザに打開けて仕舞はうか。私の最後に送つた手紙は未だ激しい慾望に充ちた情熱が燃えてゐたのだから、斯う云ふ突然の變化には何と理由を附けたらいいだらう。あの哀れな友にこんな残酷な、唐突な打撃を加へてもいゝであらうか。彼女は深く私を愛し、私もまた彼女を愛してゐた。私たちの激しい、特別な情熱は世間へも知れてゐて、羨しがられたり、敵意を抱かれたりさへしてゐた。幾人の人が私と彼女を離さうと謀つたことであらう！ 其の名を擧げれば一隊をなす程澤山ある。私は大急ぎで、私が最も恐れてゐた、私の後釜に据わりさうに思はれた競争者の名を數へ上げて見た。

『ローマ中を捜しても、彼女より可愛い、魅力のある、而して欲しい女が又とあらうか。』と私は自問して見た。而して私の方から彼女を捨てよう等と云ふ考は、飛んでもない、許すべからざる事の様思はれた。『いや、いや。私はそんな考は毛頭持つてゐないのだ。そんな眞似が出来るものか。するものか。』私の最初の心の騒ぎは鎮つたけれども、無用の争論を又獨りで始めて、心の底では、彼女の呼出しを却ける事は到底出來ない時が來るのを、感附いてゐた。

とは云へ、私は病人の室を去つて、苦しい感情を抱きながらも、テレザに向つて、『私は行かない。』と書いてやる丈けの妙な勇氣を持つてゐた。私は或る口實を考へ出した。そして、今でもよく覚えて居るが、その口實は餘り眞面目に響かない様なのをと、半ば意識して選擇した。『お前は、彼女がそんな口實位は氣にしないで、是非來る様にと勸めて來るのを望んでゐるのだな。』と、私の心中で或る聲が言つた。私は此の諷刺あてこすりを否んで仕舞ふ事は出来なかつた。激しい心配と憤怒とに襲はれて、心の休まる暇が無かつた。私はジュリアナと母との前では何氣ない風を装ふ様に努めた。而して欺かれて居る哀れな病人と一緒に居る事は出来るだけ避けた。而かも刻々に、一味の疑惑の影が、彼女の優しく輝いてゐる眼に宿る様な氣がした。彼女の純潔な額に或る曇が出来た様に私は思つた。

水曜日には私は緊急な、威嚇的な電報を受取つた。(尤も私は半ばそれを待つてゐたのかも知れない。『コイ。コネバモウアハヌ。ヘン。』私は直ぐ、返電を打つた。『ユク。』と。

此の事が有ると直ぐ、生涯の大事を決する場合に隨伴して來る一種無意識の昂奮に促がされて、私ははつきりと心が落着いて來た。境遇と云ふものが、事件の成行を定めるものやうに思はれた。私に責任は無いと云ふ感じ、凡ての事件が必然の経過であると云ふ感じが、深く私の心に焼きついた。『假令、自分が行うてゐる事が敗徳であるのを意識し、自分を責め

るとしても、此れ以外に仕方が無いのである。俺は、明かに自分で把握する事の出来ない偉力に引摺られてゐる。俺は殘酷なる運命、皮肉で而も打克つ事の出来ない運命の、犠牲なのだ。』

何だが、ジュリアナの室の闕に立つた時には、何か恐しい鉛の様に重いものが、私の心を壓して來る様に思はれた。私はカアテンの後で、眩暈を感じてふらくとした。『彼女はたつた一目私を見ただけで、咄嗟の間に凡てを見抜くであらう。』と考へて、私は恐しくなつたのだ。で、引返さうとしてゐると、彼女が、

『ツルリオ。貴方ですの？』と云つた。其の聲は何時になく、私の耳に美しく聞えた。

私は室へ入つた。彼女は私を見た。

『ツルリオ。』と彼女は吃驚した様な聲で叫んだ。『何うなすつたの？ 御病氣？』

『少し眩暈がする——だが直ぐなほるよ。』と答へて、『未だ氣が附かないな。』と、安堵した。

不思議な事もあるもので、彼女は實際、少しの疑も抱いてゐなかつた。私は彼女に殘酷な一撃を與へてやらうか？ それとも正直に打開けようか、或は尤もらしい嘘を言はうか？ でなければ何も言はないで、こつそり出發して、後に白狀の手紙を残して置かうか。何うしたら一番いゝだらう。何うすれば私にとつては面倒が一番少くて、彼女にとつては殘酷な

驚きが一番少いやうになるだらう。

恥かしい話ではあるが、こんな破目になつてゐても、持前の自分勝手が、彼女の事を考へるよりも、私にとつて一番苦痛の少い方法を案出させるやうにして仕舞つた。だから若し母の事を考へなかつたら、私は屹度こつそり出發して手紙を残して置いたであらう。まあ、何にしても母には打明けなければなるまい。所が此の際又、例の諷刺する様な聲を否が應でも聞かなければならなかつた。『兎に角だつて？ 寛大な心よ！ 又々昔通りの壺に嵌つて行くのにはそれが一番便利な方法だ。まあ、其の一言葉を言つて見ろ。犠牲はもう一度彼女を無理にも微笑ませるだらう。だが其の打撃は彼女にとつて致命的だ。お前の方から倒れかかつて打開けて見ろ。残餘の事は案じる迄もない。』

私達は屢々、極度の眞摯な自尊心の中に、却つて眞の慰藉を見出す事がある。

『まあ、貴方は何をそんなに考へ込んでゐらつしやるの。』と、ジュリアナは尋ねた。而して私が心配するのを止めようとでもする様に、私の擧めてゐる眉の間に指を置いて賺めた。

私は彼女の手を把つて、それを握り緊めた儘答をしなかつた。此れだけの沈黙が、優に私の心の態度を一變させて呉れた。些しも疑つて居ない此の女の、やさしい聲や、嬌めいた身振が、私を溶けさせて仕舞つた、心の中には、涙ぐましい、自らを憐れむ様な氣持が起つて來

た。私は人から憐れんで貰ひたかつた。同時に私の中の或る者が言つた——暫くの間は外に何も見せないで此の悄氣た氣持を利用せよ。一寸とした細工で、お前は容易く涙含む事が出来る。お前は又多くの女が、自分の戀人である男の涙に依つて如何に感動させられるかも知つてゐる。ジュリアナは胸を痛める。お前は重苦しい心の苦悶に悩まされてゐる様な風をする。それから次の日、お前が彼女に有りの儘を話すなら、彼女は昨日の涙の事を思起して其の眼には、お前が痛々しく映るであらう。彼女は考へる——あゝ、では昨日此の人が咽び入つて泣いた原因は、これだつたのであらう。氣の毒な人だ！ 而してお前は卑劣なエゴイストだと言つて、責められはすまい。お前は全力を擧げて或る暗い魔力を使ふ者と戦つてゐる様に見える。お前はある神祕な、何うする事も出来ない悪性なものの犠牲になつてゐるのだ。お前はその胸に痛み、悩む心を抱いてゐるのだ。

『何を心配してらつしやいますの？』と、ジュリアナは、低い、慰める様な調子で訊ねた。

私は頭を垂れた。私の心は本當に動かされた。前の功利的な考から涙を流さうと用意したけれど、俄かに感情が掻き亂されて、それが流れずに止まつて仕舞つた。私が自分で泣く事が出来なかつたら、涙が流れて來なかつたら、何うだ？ 此の子供らしい、滑稽な妨害に出遇つて、私は、何でも、私の意志で左右する事の出来ない、氣まぐれな、些細な、境遇に依

つてのみ動かされるのだと感じた。すると例の聲は私の中で叫び続けてゐる。——情けない奴だな、今程絶好な機会が又とあるものではない。彼女は何も分りはしないのだ。——暗い影から啜り泣くなら、どんなにそれが有効であらう！

『ツルリオ。返事をして下さいませぬのね。』と、暫くしてジュリアナは言つた、私がよく見る事の出来る様に、私の額に置いてゐた手を、靜かに取つた。『貴方が私にお話しになつて差支へのある事は、何もありませんわ——ね。』

確かに、私の耳にした限りでは、どんな人の言葉だつて、此れ程深い親切を見せてくれたものは無かつた。母でさへこれ程の言葉は嘗て私に話さなかつた。

私の眼は濡んで來た、睫毛に熱い涙の集るのを覺えた。今こそ、今こそ壊れて泣く時だ！けれど私は涙だけしか出す事が出来なかつた。而して（恥かしい事だが、事實だ。且つ又、最も感情が高潮して現はれてゐる時、斯う云ふみじめな細工をして、それを汚す事も間々ある事だ。）ジュリアナがそれに氣附く様に顔を擧げた。彼女が、次第に深くなつて行く夕闇の中で、輝く涙に目を止めなくては困るから、數分間は恐ろしい煩悶の様子をして過した。彼女の注意をそれに向ける爲め、歎息を抑へるかの様に、息をつまらせた。彼女は私をもつとはつきり見る爲め、彼女の顔を私の方へ差し寄せた。而して私が未だ黙つて居るものだから、

繰返して言つた。

『貴方、御返事をして下さいませぬの？』

それから彼女は私の顔を見た。

而して確めるために、私の顔を両手に抱いて、殆んど亂暴な位に彼女の方へ惹き寄せた。

『まあ、涙が！』と彼女は叫んだ。其の聲は慄へてゐた。

私は彼女の手を振りほどいた。而して苦悶を抑へる事の出来ない人のやうに、飛び上つて逃れようとした。

『放してくれ。ジュリアナ。放してくれ。』而して病室から走り出た。

一人になると、私は自分を嫌ふ心で一杯になつた。

それは病人が床上げをする喜ばしい日の前夜であつた。二三時間経つてから、晚餐を取るのを何時ものやうに助けてやる爲め、再び彼女の傍へ行くと、母が彼女と一緒にゐた。

『ねえ。ツルリオ。』と、私が入つて行くと、母は云つた。『明日は床上げだね。』

ジュリアナと私とはお互にそつと目交せした。それから私達は明日の事や、彼女が床上げをする時間や、それに就いての種々な事を、興味を誇張して、話し合つた。でも私は他の事に氣を取られ勝ちであつた。私は、母がなるべく出て行かないようにと願つた。

幸ひに、彼女は室を出て行つたが、直ぐ又歸つて來た。ジュリアナは其の機會を捉へて急いで囁いた。『本當に只今はどうなすつたの？ 私に話して頂戴。』

『何でもない。何でも。』

『でもそれでは、明日の私の歡びが減りますわ。』

『いや、いや。話す。話す。それに就いて心配して呉れるな。どうぞ。』

此の時母は、二人の子供を連れて戻つて來た。然しジュリアナがこれ等の言葉を言つた調子が、私に、事實は何にしても彼女は些の疑も持つて居ない事を私に信じさせた。私が懊惱してゐたのは、過去の言ふに忍びない、あの償ひ難い不行跡のためだと考へたのであらうか。私が彼女に蒙らせた罪惡に對する後悔と、彼女に許して貰ふ價值もない事に對する憂慮とによつて、胸を痛めてゐるのだと考へたのであらうか？

次の朝は家中が緊張し切つてゐた。ジュリアナの願に依り、彼女が私を呼ぶ迄其の室に入つて行くのを待つことになつてゐた。

『さあ、お入り下さい。ツルリオ。』

私は入つて彼女の立つてゐるのを見たが、弱々とした風情で、病氣する前よりもすらりと丈が高くなつたやうに思はれた。廣い、ふはくとした衣裳は、眞つ直ぐに足の所迄垂れてゐ

た、彼女は微笑んでゐた。幾らか神経が昂つてゐるやうでもあつた。と云ふのはちつと立つてゐるのが困難であつたから。で彼女は身體の釣合を取らうとでもするやうに、兩腕を左右に伸ばしながら、代る／＼私の顔と母の顔とを見較べた。

母は、彼女が此の上もなく氣に入つたやうな表情をしながら、彼女を支へてやるやうに手を差出した。私もそれを眞似た。

『いや、いや。』と彼女は叫んだ。『打つちやつておいて下さい。倒れはしませんわ。自分である安樂椅子の邊りまで行きたいと思ひます。』

彼女は片足上げて、如何にも要心深さうに前へ進み出た。其の顔は子供のやうな喜悅で輝いてゐた。

『ジュリアナ。氣をおつけよ。』

彼女は一足二足と進んだ。而して私と母との間へ來た時、唐突に狼狽して、たぢたぢとしたが、私の腕の中へ倒れ込んで來て、私の胸に全身の重みをかけた。息は急迫してゐた。が彼女は只だ笑つて、恐怖の爲め息切れがしただけであつた。私がしつかりと抱いてやると、手には身體のしなやかさが感じられ、胸には大きい鼓動と溫味とが感じられた。髪の毛が仄かに散らばうて、首根にある、美しい、小さい黒子が、再びはつきりと見えた。

『ああ、怖かった。』と彼女は笑ひながら喘いでゐた。『倒れて仕舞ふかと思ひましたわ。』

彼女は首を向けて母の方を見た。けれども私に掴まつて居るのを少しも弛めなかつた。私は彼女の顔が痙攣してゐるのを見た。又私は此の病人が全力を出して私に取り縋つてゐるのを知つた。病氣でひどく瘦れ、神経も弱り、力もなくよろ／＼してゐる、恐らく未だ癒り切らないのだらう。私は、昨夜の、彼女が私に思ひがけない接吻を與へた時の顔を思ひ出した。私が斷然棄てて仕舞はうとしたあの愛さうとする骨折、慈しまうとする骨折、改心しようとする骨折が又しても私には美しいもののやうに見えて來た。

『安樂椅子迄助けて行つて下さいませよ。』と彼女は云つた。

私は腕を彼女の腰に廻して、ゆつくりと歩かせた。私は彼女を氣持よく腰掛けさせようと思つて、背に蒲團を、それも頭を休める爲めに最も美しい、氣持のいいのを態々選んであてがつた。それから下に跪いて、彼女のしなやかな足の下にも蒲團を置いてやつた。何日かの晩方もした様に、彼女は慈しむ様な眼で、私の凡ゆる行動を見守つてゐた。私は目的があるので態とする事を長引かせた。私は彼女の傍に小卓を置き、それに新らしい花を容れた花瓶と、書物と、象牙の紙剪刀とを載せた。私は此等の行爲に於いて一種虚飾の罪を犯してゐた。例の嘲るやうな聲が又喋り出した。『うまい。其の調子だ！ 母の眼の前でやる事は、何で

もお前にとつて千金の價が附いて來る。これ程愛情を籠めた慰撫を見た後では、いくら母だつて、何か悪い事を謀んで居よう等と思ふものか！ 少々は大袈裟にやつても損はない。彼女の眼眸は決して鈍くない。やれ、やれ。凡てお前の利益になるやうになつてゐる。決して恐れるな。』

『まあ、本當に氣持のいい事。斯うして頂くと。』とジュリアナは、生き返つたやうな溜息を吐いて、眼を閉ぢた。『有難う、ツルリオ。』

一三分の後母は出て行つたので、私達だけが居残つた。彼女は深く感動して又云つた。『有難う。』

彼女は手を差延べて、私にとつて貰へるやうにした。袖が廣いので、さうすると、腕の所が殆んど肘迄開いて見えた。愛と、寛容と、平和と、夢と、安らかな忘却と——つまり美しい物と善い物との限り——を具へてゐる此の白い忠實な手は、全く献身的になつたかのやうに私に向つて暫く慄へてゐた。

死の瞬間、私が苦惱する事を止めた最後の瞬間に於て、私の見るものは屹度此の身振りだらうと、私は堅く信ずる。其の時には過去の生涯の凡ゆる幻影が消え去つて、此の幻影のみが残るであらう。

今、其の時の事を思出して見ても、私がどんな心の状態にあつたのか、はつきりと思ひ出す事は出来ない。だから私は信じてゐる。あの時、及びあの時起つてゐた事と、起らうとしてゐた事との異常なる價值が、非常に嚴肅であつた事とは十分に認めてゐた——と。私の心の幻影は、私には極めて明瞭してゐた。いや、明瞭はつきり見えた。二つの全く異つた平行線が、私の心の中に延びてゐたのだ。一つは、斯うした打撃を加へられる女を憐れむと共に、此の女が私に與へてくれる賜物を一切放擲して仕舞はなければならぬ名残り惜しさであつた。もう一つは私の現在の情婦に、濁り切つた熱情を抱いてゐながら、私の我儘勝手が、私を懲罰するのにも都合のいいやうな條件を、些少も熱心に考へさせない事であつた。此の平行する感情が私の心的作用に信ずる事の出来ない程の強度と速度とを加へた。

決斷の時は來た。若し私が明日出發するのなら、これ以上の姑息手段を取つてゐる事は出來ない。此の出發を餘り變に、又突然に思はせないためには、私は今朝の間食の時に、母に向つて豫め此の事を言つておき、尤もらしい口實を作つておかなければならぬ。が、致命的な災厄を妨止するためには何より必要なのはジュリアナに先づそれを話す事だ。『然し、ジュリアナが、遂に打倒れる様な事があつたら何うしよう。若し彼女が苦痛と憤怒との餘りに、今迄の事を洗ひ滌ひ母に打開けたら何うしよう。彼女から、祕密を守ると云ふ、又、自分が犠牲

になると云ふ約束を、どうして得たらよからう。最後の瞬間迄、私は心中にかう云ふ疑問を繰り返してゐた。『妻は最初の一言で了解するだらうか。若し了解しなかつたら——何氣なく何の爲めに行くのだ等と訊ねたら、何うしよう。何とかうまい答はないものか知ら？ だが彼女は了解するだらう。恐れる事はない。彼女の友達の誰かから——例へばタリス夫人から——テレザラフオがローマを立つた事を聞いて居ない等と云ふ事はあり得ない。』

然し私は抵抗力を漸次に失ひかけてゐた。刻々、胸の中に高まつて行く此の争闘に、私は最早堪へる事が出来なくなつた。神経が俄かに緊張し切つたので、私は打開けて仕舞はうと決心した。幸ひ彼女が何か話をしてゐたので、私は、彼女が話の緒口を私に與へて呉れ、ばよいと希望した。

彼女は、何時に無く口輕に、主に、未來さきの事を話した。疾くから私は氣附いてゐたが、彼女の名狀し難い昂奮が、此の時私には一層明かに分つた。私は彼女の椅子の背後に立つてゐた。それまでは彼女の背後に廻つて、カアテンを卸したり、小さい本箱の本を揃へたり、絨氈じゅうたんに落ちてゐる萎れた薔薇の花束の葉を拾ひ上げたりして室を歩き廻りながら、努めて彼女と顔を合せるのを避けてゐたのである。私は立つて彼女の髪かみの揺れるのや、長い睫毛まつげや、胸の輕く動くのや、椅子の上に横へてゐる美しい手てを見下した。その手は、何時かの時、靜

脈の青いので、僅かに敷布と見分けの附いた時のやうに白かつた。

あの日！ あの時からやつと一週間経つたばかりであつた。それなのに何うしてそれが遠い昔の事のやうに思はれるのだらう。

私は彼女の後に立つた。私の神経は、何かを警戒でもしてゐるやうに極度迄張りつめた。つまり或る本能が彼女に向つて、頭の上に劍が吊られてゐるのを警告するに違ひないと云ふやうなことを私は考へた。勿論私には、彼女の中に一種の朧氣な當惑の色がある様に思はれた。も一度堪へ難い苦しい一撃が、私の心臓を打つた。

たうとう、彼女の口を開く時が來た。

『明日ね。私が最少しよくなつたら、露臺タレスに連れて降りて、晴々とした空気を吸はして頂戴な。』

私は云つた。

『明日は此處に居ないのだよ。』

私の聲が變な調子だつたので彼女は吃驚した。私は躊躇せず話を進めた。

『他處よそへ行くのだよ。』

私は苦しい思ひをして舌を解ほどして、犠牲に止めを刺すべき最後の二撃を、繰り返さねば。

らぬ人のやうな戦慄すべき恐怖を抱いて、更に付け加へた。

『フィレンツェに行かうと思ふ。』

『あゝー』

彼女は直ぐに悟つた。むぐむぐと急がはしく動いて、蒲團の方へ向き換へて私を見た。

『ジュリアナ。』と、何か容易く出る言葉が見附からないので、私は口籠つた。そして彼女が氣を失ひはしまいかと恐れて、顔をさしのぞけた。

然し彼女は眼を閉ぢて、身を縮め、突然惡寒に襲はれた様に、慄へた。そのまゝ、眼と口とは緊密しつぱと閉ぢて、二三分間は身動きもしなかつた。彼女の首の動脈に見える脈搏と、手が微かに痙攣けいれんをするので、生きてゐることだけは分つた。

それは罪ではなかつたか？ 私が犯した凡ゆる罪の最初のものであつた。而も恐らくそれは容易ならぬ罪であつたらう。

私は恐しい心的状態で家を出た。私は一週間以上も留守にした。私が歸つて來た時、いや歸つた當座の數日は、自分ながら皮肉で鐵面皮なのに驚いた。私は、凡ての道徳觀を破り、如何なる卑劣も、如何なる殘酷も行はしめる惡魔のために征服せられて仕舞つた。又ジュリアナは、激しい力を出して自分を制するやうになり、何でも自分ばかりを頼りにするやうに

なつた。彼女は堅い石の甲冑に身を包んでゐる様に、沈黙の中に閉ぢ籠つた。

彼女は子供を連れて、母と一緒にラ・パディオラに歸つて行つた。弟も一緒に行つた。——私だけはローマに残つた。

其の日から私の生涯に取つては一番暗い、一番惨めな時期が始まつた。其の頃の事を思ふと今でさへ、嫌悪と屈辱の感に堪へない。私は自分の性質の底にある激滓を、一方ならず掻き廻す感情の擒となつて、女が、力のない、それで情熱的で、絶える間もなく動いてゐる魂に、課する、凡ゆる厭はしい苦痛に、私は悩まされた。疑惑の閃きに燃え立つて、殘虐な肉感的の妬情が、身の内に焼け附いて來た。そして善いものの泉を涸らして、心の深みに、惡の本體を熱心に培つた。

テレザ・ラフォが其の時ほど戀しく思はれる事は嘗つて無かつたが、それは私の一番下賤な墮落と結び附いての事である。彼女は私の自尊心を巧みに利用しては、情熱の刃を鋭く鋭く砥がせた。名状し難い苦惱、下劣な歡喜、野卑な屈從、兇惡な約束が、顔を赤めもしないで、取交はされた。毒よりも苦い涙、私を物狂ほしくさせる狂熱が、眞逆さに私を墮落の深淵に連れ込んで、そこで數日の間、私を茫然と癡痺させて仕舞つた。嫉妬で大袈裟にされた凡ての不幸と、凡ての肉情の汚行との中を、私は潜つたのだ。私は家庭に向つては赤

の他人になつた。ジュリアナの事を思ふと、私は苛立つやうな苛責を受けた。丸一週間と云ふもの、彼女に向つて私は只だの一言も口を開かない事があつた。自分の苦しみにかまけて仕舞つて、彼女に遇ひもしなければ、彼女の噂も聞かなかつた。時折、彼女を見ると蒼ざめた色や、表情や、私に取つては、今迄知られずゐた或る新しい何物かど、彼女の顔に現はれてゐるのやで、心が縮んで仕舞つた。感覺が亂れて仕舞つて、物の本當の姿を識別する事が出来なかつた。私は彼女が何うして暮らしてゐるかも知らなかつた。それを彼女に訊ねたいとも思はなかつた。又彼女の爲めに、何等の不安、何等の氣遣ひ、何等の憂慮をも感じなかつた。譯の分らない苛酷な心が、私を彼女から遠ざけた。時折、彼女に對して、仄かな、理由のない、一種の妬みを感じる事もあつた。或る日、私ははからずも彼女の笑を聞いた。其の響だけで、私の心は苛立つて、殆んど私に憤りを感じさせた。

別の日に又、遠くの室で歌つてゐる彼女の聲を聞いて、私の心臓は急に鼓動した。如何にせん、ユリディーチェなくば。

と彼女は歌つた。彼女が家の中を歩き廻りながらこんなにして歌つたのは、いや私がそれを聞いたのは、近頃ついぞ無いことであつた。何故彼女は歌つたのだらう？ 浮きくした氣持になつてゐるのか知らず？ 彼女の魂が如何なる感情から、此の異常の塗湧があつたので

あらうか？ 私は何とも言へない程心が掻き亂れて、前後の思慮もなく、彼女の名を呼んで進み寄つた。

五四

彼女は、室へ私の入つたのを見ると、吃驚して黙つたまゝ暫く立つてゐた——聊かの驚きと、明かな疑ひとを示しながら。

『お前は歌を歌つてゐたね。』と、何か言はなければならぬので、私は間の悪い思をして言つた。而して自分ながら、普通でない所行をするのに驚いた。

彼女は微笑んだ——私に向つて何と答へたらいいか、どんな態度を取つたらいいかを知らないで、少しく蔑すむ様な微笑んだ。私は彼女の眼の中に痛々しい好奇心が讀める様な氣がした——私がそれに氣の附いたのは、今が初めてでは無かつた——その慈悲深さうな好奇心は、狂者になる疑ひのある人に見られるものである。それと同時に私は、向うに掛けてある鏡に映つてゐる私の映像を認めた。顔は肉が落ち、眼は深く窪み、唇は突き出て、外貌は、茲數ヶ月間を私が熱病に罹つた様にして情熱を浪費したのを、遺憾なく現はしてゐた。

『出掛けるのに着物を着換へてゐたのか。』と、他にいゝ質問もなし、それかと言つて黙つて居る譯にも行かず、初めと同じ間の悪い思をして訊ねた。

『えゝ。』

それは十一月の朝であつた。彼女はレースを引いた卓子の横に立つてゐた。卓子の上には近頃の美人が是非備へておかなければならぬ數々の化粧道具が撒き散らしてあつた。彼女は黒い羊毛質の衣裳を着け、手には銀の背を附けた青金色の鼈甲の櫛を持つてゐた。衣裳は常に單純で、彼女の優雅な背恰好にしつくりと當て簪つてゐた。白菊の大きい花束が卓子の上に立ててあつて、殆んど彼女の肩の高さ迄届いてゐた。小春日の和穩やかな日影は窓を通して射し、空中にはそこともわかない仄かな薫が漂うてゐた。

『お前は何香水をつけたのだい？』

『クラブ・アップル。』

『私もそれが好きだ。』

彼女は卓子の罫を取つてそれを私に手渡した。私は長い間それを嗅いだ。而して間の悪さを埋めるために、何か話材を見附け出さうとした。私は自分の混亂を投げ捨てて仕舞ふ事も出来なければ、又自恃心を取戻す事も出来なかつた。二人の間の親和は永久に失はれたもの様に思はれた。私には彼女が全く別の女の様に思はれた。而してその間中、オルフィウスの歌が耳に爽やかに響いて、妙に私の心を掻き亂した。

如何せん、ユリヂーチェなくば。

如何せん、ユリヂーチェなくば。

五五

黄金色の光の中に、芳ばしい薫の中に、女性の優雅を具へてゐる凡ての物の中に、古代の歌謡の精神が、ある隠れた生命の搏動を眼醒めさせて、名状し難い神祕の影を一掃する様に見えた。

『今、お前の歌つてゐたのは、實にいい歌だね。』と、私は此の不安から生じて来る衝動に従つて云つた。

『ええ。さうですわね。』と彼女は云つた。

私は危く訊ねようとした。『だが何故お前はそれを歌ふの？』と。けれども私は訊ねなかつた。而して心の中を捜して、こんな事に好奇心を持つ理由を求めた。

沈黙が暫く続いた。彼女は、櫛の齒の上を拇指の爪で撫でて、微かだが、耳につく音を打てた。(その音は極めて明瞭と私の記憶に残つてゐる。)

『出て行くのならお行きよ。私のために止めなくてもいい。』と私は注意した。

『もう帽子とジャケットを着ればいいのです。今幾時でせう。』

『十一時に十五分前だ。』

『もう、そんなに遅いんですの。』

彼女は帽子とヴェールとを取上げて、鏡の前に立つた。私はそれを見成つてゐた。別の疑

問が又唇に上つた。『何處へ行くの？』これは普通な事に違ひないのだけれど、私は何故か口に出さないで仕舞つた。

私はしげ／＼と彼女を見續けた。而して彼女の偽りのない所を見抜いた。若くて、美しい女で、性質もよく、趣味も高い。身體の恰好も申分なく、強い、精神的な光も添うてゐる。最も深く男を魅惑する情婦にもなれる女で、心身共に理想的な好伴侶となる、敬愛に堪へる女である。

『而して、實際そんな事があつたら何うだ。』と私は自分で尋ねた。『彼女が誰かから附け狙はれないと云ふ事は到底あり得ない。俺が彼女に情なくしてゐると云ふ事は餘りに明白な事實であつて、彼女の虐待を受けてゐる事も知れ渡つてゐる。彼女は色男を拵へたのか知ら？いや、今出来かかつてゐるのか知ら？ 彼女もたうとう、此の上自分の青春を犠牲にするのは無益であり、不當であると云ふ結論に到達したのであらうか？ 到頭限りのない禁慾生活に疲れて來たのであらう？ 恐らく彼女は私よりも優れた男と知合になつたのだらう。——優しい、深く人を惹き附ける戀人で、彼女を新奇な魅惑に踏入れさせて、不信實な人の事は忘れて仕舞へと教へて居るのであらう。私が屢々、憐憫も悔恨もなく傷付けて來た彼女の心をすつかり自由にしてやつたらどうなるだらう。』私は突然恐怖に襲はれて、心を無残に壓へら

れたので、到頭こんな考を出さずにはゐられなくなつた。『此の事に就いて彼女に疑問を質してやらう。面と向き合つて「お前は未だ純潔か？」と言つてやらう。さうすれば真相は直ちに判明する。彼女は嘘をつくことの出来ない女だ。』なに、嘘をつかない？ あゝ、あゝ、女が？ お前は女をどんな物だと考へてゐるのか。女は何でも出来る。烈婦の様な振舞をする裏には、優に半ダース位な色男を隠してゐることも珍しくない。自己犠牲？ 克己？ みな外面的なものに過ぎない。言葉に過ぎない。誰が嘗つて女の眞實を知り得たか？ 出来るものなら、お前の妻の貞節を誓つて見ろ。今日のとほ言はない。病氣以前に溯つてもいい。衷心から誓つて見ろ——出来るものなら！ 而して菊を含む聲（あゝ、テレザ・ラフォ、お前の毒はよく利いた。）不信實な聲が、私を憤激させた。

『ツルリオ。』と、ジュリアナは少し含羞^{はにか}んで、云つた。『お願いですから私の面紗をピンで止めて頂戴。』

彼女の手は、彼女の頭の上で曲つた。而して指は面紗を止めようとしても、空しく動くだけであつた。其の態度は非常に優雅であつた。彼女の白い指を見ると私は考へた。『私達がお互に手を把り交はしてから、どんなに久しくなる事であらう。あゝ、彼女が私に與へた温かい握手は、丁度、私が彼女にどんな事をして、私を恨みもしなければ、それを氣にもか

けないと云うてゐる様であつた。今、多分、此の手はもう清くはあるまい。』私は彼女の面紗を止めてやりながら、事によると彼女が不貞な事をしたのではあるまいかと思つて、不意に嫌惡の情を起した。

彼女は立上つた。私はジャケット^ちを着せてやつた。二三度私達の眼は、雷光の様にヒタと打衝かつた。而も再びその中に一種の物に怖ぢた様な好奇心が閃めいたのを私は見た。疑ひもなく彼女は自分で訊ねて居る様であつた。『何故彼は歸つて來たのであらう。何の爲めに此處を放れないのであらう。あの變な當惑した様子は何うしたと云ふのだらう。私にどうして欲しいと云ふのだらう、變つたことでも起つたのかしら？』

『いゝでせう。暫くね。』と云つて、彼女は室を出た。而して私は彼女が家庭教師のエディス嬢の名を呼んでゐるのを聞いた。

一人になつた時、私はゆくりなくも、手紙や書物が、書字机の上に積んであるのを眼に止めた。私は其處へ行つた。私の眼は、何物かに誘はれる様にして、紙の上を彷徨^{さまよ}つた。何に？ 證據物品に？ 然し私は此の下劣な、無價値な誘惑を振り落した。私の注意は古代地の表装の本に惹き附けられた。頁の間には小さい銀の匕首が挿んであつた。これは確かに彼女が現在讀んでゐる本に違ひないと見えて未だ頁が半分しか切つてなかつた。それはフィリップ・ア

ルポリオの近作小説『秘密』であつた。巻頭の空頁には、作者の手蹟で献呈の語が記してあつた。『吾が象牙の塔なるジュリアナ・エルミルへ、謹んで——。エフ・アルポリオより。一八一——年聖徒の日。』

して見るとジュリアナは此の小説家を知つてゐるのだ。ジュリアナは彼に向つてどんな態度を取つてゐるのであらう。私は此の作家の、美しい、人を惹き附ける顔を思ひ起した。彼には私も一二度、公の席で會つた事がある。彼がジュリアナの氣を惹いたとすれば、尤もな話だ。私の耳に入つた色々な噂から判じると、彼は女に好かれると云ふ事である。彼の小説は複雑な心理描寫があり、時としては餘りに解剖に過ぎる事もあれば、眞實でない場合もあるが、兎に角感情を亂し、想像を燃え立たせて更に非常に優雅な文字を以て、凡俗に對して最上の侮蔑を與へてゐる。『苦悶』『正教主義』『アンゼリカ・ドニ』『ジオルジオ・アクオラ』『秘密』等、皆白熱した人生の映像を表現してゐる。それは丁度燃え立つてゐる火爐の中に數限りなく烈しく燃え輝いてゐる人物が動いてゐるやうである。其の作中の人物は各々、彼の特種の幻像の爲めに、生活の實在と絶望的な苦悶の格闘をしてゐる。

此の異常なる天才は、其の著述の示す所では、彼自身の醇化された精神的精髓を代表してゐるのでは無いか——又此の男は私に對しても亦大きな眩惑を感じしめたではなかつたか。

私は彼の『ジオルヂ・アリオラ』を「同胞的」な本だと言つたではないか。彼の作中人物の中に、不思議にも私の内在生活に類似したものを發見した。彼我の間の此の不思議な類似は、恐らくは彼が企てゝゐる誘惑の爲めに、道を開拓したではなからうか。ジュリアナは、嘗つて私を愛した其の同じ愛情を彼の中に認めたら、彼に向つて身を任せたのかも知れない。

彼女は又室に這入つて來た。私の手に其の本があるのを見ると直ぐ、聊か狼狽へて微笑んだ。而してポツと赧くなつて云つた。

『其處に何がありました?』

『お前はフリーッポ・アルポリオを知つてゐるのかい?』と、私は出来るだけ平氣な、何も疑つてゐない様な調子で尋ねた。

『えゝ。』と彼女は正直に答へた。『モンテリシの邸で紹介されたのですわ。二三度此處へも來たのですけれど、生憎と貴方にはお目にかゝる機會がなくなつて。』

『では、何故、お前は今迄、僕に其の事を話さなかつたのだい。』と舌の端まで出掛かつたが私は敢へて言はなかつた。長い間私は、自分勝手から私達の間に親しい友情を結ばうとする企てを一切妨げて來たのだから、此事に就いても、若しくは又其の外の事に就いてでも、彼女が話も出さう筈は決してなかつたのだ。

『あの方のお書きになつたものでは、此れが一番入組んで居ませんのね。』と、彼女は何氣なさうに云つて、緩ゆるくりと手袋をはめた。『貴方はお読みになりました？』

『うむ、読む事は讀んだ。』

『お好きですか？』

ジュリアナの前では、只だ自分の優越を示さうとする單なる本能的な欲望から、何の考へもなく、私は答へた――

『いや。僕は極くつまらないもんだと思つた。』

沈黙が続いた。それから――『行つて参ります。』と彼女が云つた。

彼女は戸の方へ進み寄つた。私は彼女が残して行つた捉へる事の出来ない程微かな香水の香を辿りながら、彼女について廊下迄出た。彼女はただ下僕の所で、私の方へ振返つて、

『では、いづれ又……』と言つただけであつた。而して軽い歩調あしぶりで、町の中へ出て行つた。

彼女は、軽い、弾みはじのある歩調あしぶりで、日の當つた側の鋪石道を歩いてゐた――眞直ぐに、而して右へも、左へも首を向けなかつた。小春日和は、キラ／＼と、水晶の様に明澄な空を光り輝やかせて、穏やかな温か味が、最早あらう筈のない董の香を蘇らせながら、秋の空気を柔げてゐた。限りの無い惨めさが私の上へ落ちかゝつて、私を重苦しく且つだん／＼堪へ難

くした。ジュリアナに對する年來の堅い信仰を、僅か一撃の下に、粉微塵にした仕舞つた此の疑惑に對して、現在私が嘗めてゐる様な苦惱は嘗つて経験しなかつた。過ぎ去つた夢を追ふ時でも、私の魂が斯く迄絶望的に聲高く號泣した事は先づ無かつた。然しそれは最早回復の望みがない程な破目に陥つて仕舞つたのだらうか。私は自分ながらさう信ずる事を許さなかつたし、又欲しても居なかつた。あの誤まつてゐた數年間の生活を通じて、私は私の利己主義の最も酷薄な誅求に呼應するばかりで無く、私の峻嚴な道德の最高理想を代表してゐる幻影に、付き纏はれてゐた。

『道德的壯嚴は、激しい悲痛を征服した結果であつて、若し彼女がこれに相しく女丈夫的最高標準に到達しようと思ふならば、私が彼女に與へる苦難を、凡て耐へ忍んで行く事が必要である。』私が屢々良心を慰めてゐた此の理論は、私の魂に深く根を下して、そして私の善良な部分が一種の空想的崇拜を捧げる一理想を建設してゐた。私の様に放恣で、扭ぢけて、意志が弱くてゐながら、而かも尙ほ私の生命の圈内に、嚴正な、頑強な、腐敗しない精神が宿つてゐると思ふと、私は嬉しかつた。而して私自身を、其の精神の永久的寵愛物だと考へるのは私の誇であつた。私の墮落、私の悲惨、私の詭弱の凡てを通じて、其の幻影だけが唯一の支柱であつた。私は、凡ゆる智者の夢――絶えず誠實なる女に對し、絶えず不誠實であると云

ふ——は實現せられるものと、考へてゐた。

『お前は何をそんなに求めてゐるのか？ 全く陶醉しきるやうな歡樂か？ それならそれを捜しに行け。而して飽きる程飲め。お前の家庭では、聖壇の面紗ヴェールを被つた神像の様に、辛抱強い女が、永久に沈黙しながら、そして永久にお前の慰安を氣にかけながらお前を待つてゐるであらう。お前が只の一滴も油を注がないみちがひ神火が、而かも絶えず燃えてゐるのだ。どんな時だつて構はない。又どんな事をした後だつて構はない。お前が歸つて行けば、其處にはいそ／＼としてお前を迎へる妻がゐるであらう。彼女はお前の歸りを信じて、何時かはそれが事實になるだらうと思つて、長い間待つてゐる。然し彼女は決して、其の夜通しの物憂さをお前に啣つやうなことはあるまい。お前は安んじて、彼女の膝の上にお前の頭を載せ、お前の額の上を彼女の繊細な白い指で撫でさせて、凡ゆるお前の苦痛を掃ひ去る事が出来る。』これが凡ゆる智者の夢ではあるまいか。

私の心には始終、斯う云ふ意味で歸宅といふ豫感があつた。さうだ、結局徹頭徹尾男一人を別人にして仕舞うやうな大洪水の後では何時もさうであつた。私の深い絶望も、此の避難所を持つてゐると云ふ確かな信念があるので、何時も柔らげられてゐた。私の最も暗黒な時期へも、私に對する愛の爲めに、又私が與へた苛酷な取扱ひのために、例の道德的態度に到

達して、私の理想の一つを申し分なく満足させて呉れる女から、或る光明が射してゐた。

單に疑惑に過ぎない事が一瞬にして優に斯ういふ一切の物を破壊する事が出来ようか？

私が室に這入つた瞬間から、ジュリアナの家を出た時迄、私と彼女との間に起つた場面を私は繰返し考へた。

私の内的興奮は、大部分、私の神経の特殊な、でも一時的な状態だと考へては見たけれど、『彼女が全く別な女に見えた。』と云ふ私の考の中に含まれてゐる變な印象を拂ひのける事が出来なかつた。彼女の中には勿論何か變つたものがあつた。だがそれは何だ？ フィリップ・アルポリオの献呈の辭が、その事を確める解釋となるだらうか？ 寧ろ象牙の塔と云へば、攻め落し難いと云ふ事の確證になりはしないか。諂ふ様でも此の形容詞は、ジュリアナ・エルの名の周圍に、純潔と云ふ日暈が輝いてゐる事を暗示するか、若しくは城寨が難攻不落と分つて、一度攻撃を斷念したので、無茶苦茶に攻めかけた事を暗示するものでなくてはならない。それ故に象牙の塔は未だ、其の神聖が汚されないのに違ひない。

斯う考へて、疑惑の毒蛇が噛んだ痕を癒やさうと努めたが、微かな不安がまだ私の心を騒がした。私は、或る皮肉な反對の暗示が突然現はれる事を、半ばは恐れ、半ばは待つた。『お前は、ジュリアナの皮膚が優れて白い事を、誰よりもよく知つてゐる。あの神聖な献呈は、

不淨の判断をさせないための假面かも知れない。が、あの「謹んで」と云ふのは？」

煮え立つ怒は急迫して来て、私の無益な、子供らしい自問自答を中止させて仕舞つた。肩を聳やかして窓を離れ、室の中を二三度歩き廻つて、或る本を機械的に開きはしたが、ただの一行も讀まずに又閉ぢた。私の混乱は少しも減ずる様に思はれなかつた。「勝手になりやがれ。」と、眼に見えぬ敵に對する様に凝立して、私は云つた。「簡単に言へば斯う云ふ事になる——彼女は既に墮落して、俺にとつては永久に失はれてゐても、又は、將に墮落しかかつてゐるにしても、俺の現在の状態では、彼女を救ひに行く事は斷じて出来ない。だから又、彼女が純潔の武器で安全に身を固めてゐても、矢張り同じ事なのだ。何れの場合に於ても、俺は何一つする事は出来ない。現在どんな事情であつても、止むを得ないのだ。又將來どんな事情にならうと、矢張り止むを得ないのだ。此の危機も過ぎるだらう。俺達はただ待つて見て居る外はない。ジュリアナの卓子の上の白菊は清艶だ！俺はそれに似た大きな花束を買ひに出掛けよう。今日のテレザとの約束時間は一時だ。それ迄には未だ殆んど三時間ある。此の前遇つた時、彼女は今度来る折には、煖爐に火を燃やしておいて欲しいと言つたぢやないか？それが此の冬初めて焚く火なのだ——こんなに好い日でも。今週はあの女も上機嫌だ——あゝこれが長續きしたらなあ！然しユーゼニオ・エガノ（テレザの別の戀人）に遇ふ

機會さへあつたら、早速、決闘を挑んでやらう。」

私の思想は新しい路を取つて進み、時に思ひ掛けない側路へ外れて行く事もあつた。私は『秘密』の中の或る熱烈な文句を思出した。そして、ひどく變つてゐる苦痛の刺戟ではあつたが、私は、一つの濁つた嫉妬で、二人の女を混同し、而してフィリップ・ポリアルポリオに向つても、ユーゼニオ・エガノに對すると同様の嫌惡を向けた。

此の危機は過ぎ去つた。然し私の魂の中には、私の妹に對する一種の漠然とした侮蔑——怨恨も交つてゐないではないが——が残つた。私は、層々、家を空けた。而して愈々苛酷になり、愈々冷淡になり、愈々氣難かしくなつた。テレザ・ラフォに對する私の惨めな情熱は、更に一層烈しくなつて、私の凡ゆる才能はそれに奪はれ、一時間の休養する暇も無かつた。私は全く、物に憑かれた人となり、狂魔の餌食となり、名狀し難い、恐しい氣に依つて蝕くはまれて仕舞つた。其の冬の記憶は全く曖昧な、變な仲介の爲めに遮斷されて、今では私の心にも朧氣で、少しも纏まりがない。

其の當時、私は自宅でフィリップ・ポリアルポリオに遇つた事は一度もなかつた。只時折外で見かける事があるだけであつた。然し或る夕、ゆくりなくも彼と擊劍の道場で出遇つて、その道場主から紹介された。而して二言三言取り交はした。瓦斯の光と、天井に轟く反響と、刃の打

ち合ふ音と火花と、恰好のいいのや悪いのや、様々な剣客の姿勢と、急速な足を踏む音と、多くの身體から出る熱つた鹽つぼい臭氣と、掛け聲と、激しい叫喚と、爆發する様な笑と、等の凡てが、彼と私と向き合つて立ち、指南役が各自の名を言ふ間に、私達の周圍を取捲いてゐる光景が、私の記憶の中には、奇妙に生々とした繪畫になつて残つてゐた。私は今でもアルポリオが面を脱いで、汗のたら／＼流れてゐる熱した顔を見せた時の身振りを、まさ／＼と見る事が出来る。彼は片手に面、片手に劍を持つて挨拶した。正式な稽古をする習慣が附いてゐないかの様に、彼は疲れて息を切らしてゐた。私は本能的に、此の男は決闘場で怖がるには及ばない男だと考へた。私は横柄な風をして、わざと、話が彼の文學上の名聲に及ぶことや私の嘆美をほのめかすことをなるべく避けた。私は單に、普通の知らない人に對する様に彼に對した。

『うむ。』と道場の先生は微笑して私に云つた。

『例のは明日ですね。』

『えゝ。十時です。』

『決闘ですか！』と、アルポリオは隠す事の出来ない好奇心で云つた。

『さうです。』

彼は一寸躊躇して、それから附け加へた。

『失禮ですが、對手は？』

『ユーゼニオ・エガノです。』

彼は明かに、もつと知りたがつてゐる様子であつたが、私の反撥する様な、氣の向かない態度が、彼の心を挫いたのか、それ以上は尋ねなかつた。

『先生。どうか五分間丈のお手合せを……。』と云つて、私は着換場に行つた。アルポリオは又劍を取上げたので、私は其の手並を見るために戸口で一寸立止まつた。一見しただけで彼は極めて凡庸の劍士である事が分つた。

直ぐ私は先生と、皆の居る前で、劍を打ち合せ出した。變な神経的興奮が私を支配して力が二倍にもなつた。私は、フィリップ・アルポリオが、熱心に私を見成つてゐる様な氣がした。

私達は又着換場で逢つた。屋根の低い部屋は、煙草の煙と煙草を喫みながらゆる／＼と身體を擦つたり、がやく／＼と騒がしく下品な冗談を言つたりしてゐる半裸體の人々の群から放射する嘔氣つく様な人の臭ひとで一ぱいになつてゐた。どよめく様な笑聲と、鐵管の水の音が交つて聞えた。何だか弾かれる様な、ひどく嫌な氣持はしたが、私は二度か三度、アルポリオの、弱々しい、男らしくない體格に目を止めた。

其の後は彼と接觸する様な機会がなかつた。私は氣にも止めなかつたし、又ジュリアナの行爲に何一つ疑はしい様な點を見附ける事も出来なかつた。急速に狭められて行く私の社交範圍以外に、何も私の氣を引かなかつたし、又眼に入らなかつた。外界の印象は、熱し切つた土に落ちる雨滴の様に、私を通り過ぎて行つた。それらは弾かれるか、でなければ霧になつて消えるだけであつた。

事件はひとりでに急轉直下した。二月の末近く、テレザ・ラフォは、不貞を働いた最後の破廉恥な證據を示した。私と彼女との間には最後の破裂が起つた。私は一人でヴェニスへ出發した。

私はさつと一ヶ月許り、惨めな状態にあつた。そして此處の沼洲の霧と静けさとはひたむきに此の状態を深めて行くばかりであつた。私は、周囲の事物をぼつと浮立たせてゐる霧の中で、孤獨な私自身の存在以外には何物も意識しなかつた。長い間私は、頭の小さな動脈の鋭い搏動を感じる外、凡ての感覺を知らなかつた。長い間私は、はつきり見えない何物かが絶えず單調に過ぎて行く爲めに、心身に及ぼす怪しい蠱惑に魅せられて仕舞つた。雨が降り出した。霧の一團々々が、嚴かな、妖魔の様な動き方をして、水の面をかすめた。私は折々、柩にでも這入つてゐる様に、ゴンドラに乗つて、死を空想して見る事もあつた。そしてゴン

ドラの水夫に何處へ漕いで行きますやうときかれると、私は只空しく手眞似で答へるだけであつた。だが心の中では、『何處へでも、何處へでも、此の世界の外へ！』と云ふ言葉のつきつめた眞摯さを了解してゐたのである。

三月の末にはローマへ歸つて來た。長い無意識状態の後の様に、凡ゆる物が私にとつては全く新らしい光を帯びて映つた。臆病な當惑や、理由のない恐怖やが、時々不意に私に襲ひかゝつた。私は子供の様な弱さを感じた。私は今迄になく熱心にしげくと邊りを見廻し、事物の本當の意義を新しく掴み直し、相互の本來の關係を究め、新しく起つた變化や消え去つたものやを確かめようとした。そして私は漸次に従來の生活に復して、心の平衡を取り直した。希望が又胸に甦つて來た。私は再び未來と云ふのを見遣る氣になつた。

私は、ジュリアナの健康と力とが激しく減じて、嘗つて私の知つたことのないほどひどく元氣を落してゐるのを見た。私達は滅多に話を交はす事はなく、お互に顔を見合せるのさへ努めて避けてゐた。二人の心の負擔を軽くしようなどとは決して思はなかつた。私達は二人共、子供と遊ぶ事に避難所を見附けてゐた。幸福で無邪氣な彼等は、その爽やかな美しい聲で、私達の沈黙を埋めて呉れた。

『お母様！』と或る日マリヤが尋ねた。『今年も復活祭にはパディオラへ行くの？』

『あゝ。』と素早く私は、彼女の母に代つて答へた。『行くのだよ。』

すると彼女は嬉しまぎれに、妹を引張り廻しながら、室中を飛び廻つた。

『別に異存はあるまいね?』と、私は頭を低くして、おづ／＼尋ねた。

彼女は首肯いた。

『お前は又よくない様だね。』と私は言葉を續けた。『僕も、亦非常に気分が悪い。田舎へ行つて處が變つたら——春が——』

彼女は椅子の中に深く落込んで、凭木もたれに両手をだらりと擴げたまゝであつた。其の様子はあの朝、あの一件を打開けた後で、彼女が初めて病床を離れた時の様子を私の心に想ひ起させた。

私達は行く事に定めた。而して諸般の用意に取懸つた。魂の奥では希望の光が閃いた。でも私はそれをぢつと見詰める事が出来なかつた。

(11)

そして凡ては思ふやうになつた。私が門の鈴の響と、フニデリコを乗せて遠くカサル・カ

ルドーレに進んで行く馬車の車輪の響とを聞いた時に感じた事は、到底言葉では云ひ現はせない。カリストが現はれると、私はもう待ちきれなくなつて、彼の手から鍵を受取つた。

『もう行つていゝよ。』と私は云つた。『後で呼ぶから。』私は自分で門を締めた。後に残つた老爺は稍々あつけに取られてゐた。そして何よりもこんな風に無愛想に逐つ拂はれるのを喜ばぬらしかつた。

『たうとうやつて來たね。』とジュリアナと私と、二人になると、私は云つた。幸福が全身に漲つて、そのせいか聲までが慄へた。

おゝ、私は幸福であつた。幸福であつた——とても口には云へない程幸福であつた。私は謂はゞ望みもしなければ待受けてもゐなかつた或る大きな祝福の覺に襲はれたやうなものであつた。私の心の中はすつかり變つて仕舞つた。私の何處かにまだ残つてゐた若々しさや善良さがもく／＼と頭をもたげて眼を醒まして來た。私は外界からすつかり縁を切つて、忽ちの間に此の庭園を劃つてゐる四壁の中だけに生活を限ることが出来るやうになつた。亂暴な言葉が唇をもれては消えた。私の理性は次々に浮ぶ色々な考に弄ばれて、すつかり騒亂されてゐるやうであつた。

如何してジュリアナが、私の考へてゐることを見抜かないでゐるなどと云ふことがあらう

か。如何して、それを了解しないで居られようか。確かに私の幸福の眩しい光が、彼女の心の奥底までも貫いたに違ひない。

私達はお互に顔を見合せた。今でも、私はその時彼女の顔に浮んだ、半ば物おちしてゐるやうな表情や、彼女の唇のあたりに漂つた妙な微笑をあり／＼と見ることが出来る。

『家を開けるのは後にして庭を歩きますせうよ。』と彼女は低い、意味ありげな聲で云つた。その調子には、前にも一度氣附いたことがあるのだが、恰も唇まで出て來た言葉を無理に抑へて、外の言葉に更へようと絶えず努めてゐるやうな、氣を配つてゐる、妙な躊躇があつた。『此の前の花の盛りを見た時から、随分時が経つてゐますわね。丁度三年前ですわ——憶えてゐらしつて。四月で——やはり復活祭の週でしたわ。』

彼女はどう見ても努めて平氣を装はうとしてゐたが、うまく行かなかつた。さつと襲ひかかつて來た情愛の波を喰止めようと努めたが、それも無駄であつた。私女は此處へ來る早々自分で云ひ出した言葉からして、楽しい過去を呼び起さうとしてゐるのであつた。彼女は二足三足歩いては又立ち停まつた。私達は眼を見合はせた。抑壓されたのに反抗するやうな、ある微かな興奮が、見開いた彼女の眼にちらと浮んだやうであつた。

『ジュリアナ。』と私は口を切つた。もう私は黙つてゐることが出来なかつた。心の奥からは

欠

欠

『僕はどんなに今日の日を待ち憧れたか知れない。ジュリアナ。あゝ。お前にはそれがどれ程だつたか到底も知れやしない。』と私は到頭口を切つたが、烈しい感情がこみ上げて来て聲が變つて、聞き分けられないほどだつた。『一昨日、お前が此處へ来ようと言つてから、僕の待遠しさは、實に今までに一度も経験した事がなかつたよ。お前は二人が、オツゲリの別荘の小路で始めて密會して、始めて接吻を交はした事を憶えてゐるね。僕はお前が可愛くつて氣が狂はんばかりだつた。——覚えてゐる？ だが其の晩お前を待つてゐる間に感じた僕の遣る瀬なさも、今の思に比べれば全く何でもない。お前は僕を信じないね。——お前が僕を信じないで、疑ふ、なるほどそれにはお前の方にくらでも理窟がある。だが僕は何もかも打明けたい。僕が如何に苦しんだり、恐れたり、又望んだりしてゐることを、すつかり聽いて貰ひたい。あゝ、無論——僕の苦しみは、僕がお前に興へた苦しみに較べれば言ふにも足るまい。それは知つてゐる——それは知つてゐる。この僕の悩みをお前の悩みに較べることは出来ない、お前の流した涙に較べられはしない。僕には何としても罪を贖ふことは出来ないのだ。許して貰ふ價值はない。だがどうか話してお呉れ。お前の許しを得るには何うしたらいいのか話してお呉れ。僕の云ふことは嘘だと思ふだらうね。だけれど聽いてお呉れ。僕に何も彼も話させてお呉れ。僕は今迄にお前の外には、本當に愛した者としては一人もなかつた。僕が

心から愛したのは唯お前一人だ。さうだ。これは女の許しを求める爲めに言ふ男のきまり文句だ——それは知つてゐる。お前が僕を信じない理由はいくらもある。だが、若しお前が何時も僕の捧げてゐた愛を思ひ出して呉れるなら、一緒になつた三年間の、あの熱い／＼愛を思ひ出して呉れるなら——思ひ返して呉れるなら、思出して呉れるなら、屹度お前は僕を信するに相違ない。僕は墮落のどん底に沈んだ時でも、お前を忘れたことは決してなかつた。僕の魂はいつもお前の方へ行つてゐた。いつもお前を求めてゐた。いつもお前を失つたことを後悔してゐた。いつも——いいかい——いつもだよ。お前にはそれが分らなかつたかえ。——お前は僕にとつては只だの妹に過ぎなかつた時があつた。さういふ時僕は殆んど死ぬほど悲しかつたがお前は時々でもそれに気がつかなかつたかえ。僕は誓ふ——お前から離れては僕は決して眞の幸福と云ふものを味はつたことがない。眞に平和な時間を過したことがない。決してだ、決してだ——僕は誓ふ。僕の唯一人の搖ぎのない、深い、祕密の崇拜者はお前だ。僕の取り得といふ取り得はいつもお前に捧げられてゐた。そして僕の心には何時も一つの希望が燃えてゐた。それは罪の鎖と斷ち切つて、初めのやうな唯一眞實な、變りのない愛に歸るといふことだ。……かうした僕の希望は無駄だらうか。云つてくれ。ジュリアナ。』

彼女はもうあたりを見廻しもせず、頭を俛れ、ひどく蒼ざめた顔色をして、靜かに歩いてゐた。口のあたりには、時折、苦しさうな、微かな痙攣が起つた。彼女は黙つてゐるので、私の心には不安な影が動いて來た。何だか一種譯の分らない壓迫感が日光や、花や、燕の啼聲や、到る所にこやかに微笑んでゐる、たけなはな春から湧いて、だん／＼私を抑へつけるやうに思はれた。

『返事をしないね。』と、私は、力なく垂れてゐる彼女の手を取つて、告げた。『僕を信じないんだね。僕を全く信用しないんだね。お前は、僕に再び欺されるんぢやないかと云ふことを氣にしてゐるんだね。お前はあの時の事があるので、僕のものになつてくれないのかえ。さう云へばさうだ。全く、僕は今迄にあんなに酷い行爲を犯したことはなかつたよ。僕の良心は確かにあれと一種の罪惡を考へてゐる。よしやお前が許して呉れたつて、僕は僕を許すことは出来ない。だがお前は、僕が病氣をしてゐたこと、さうだ、氣が狂つてゐたことに氣がつかなかつたかえ。僕は全く呪はれてゐたのだよ。あの日から、こつち僕は只の一時だつて心の休まる暇は無かつた。一度だつて晴々した時は無かつた。思出して呉れない？ 僕は氣が狂つてゐたんだ、馬鹿になつてゐたんだ、お前がそれに氣附いてゐなかつた筈はないんだがね。さう／＼お前は人が狂人に接するやうな様子で、僕を見てゐたぢやないか。僕は何度もお前の眼の中に、好奇心や恐怖の入れ交つた、苦しさうな憐憫の色が現はれたのを見たよ。』

お前は、僕がどんな状態に落ちこんだかを覚えてゐるだらう。それはそれでいい。だが今は、僕も病気が癒つた。無事に助かつた。——お前のお蔭でだよ。到頭光が闇を照らして來た。僕はお前だけを愛したし、今も尚ほ愛してゐる。——ね、分つたかえ。』

私は、仕舞ひの言葉を、心にひつたり焼きつけて貰ひたいと思つて、しつかりした聲でゆつくり述べた。私は握つてゐた彼の女の手を更に堅く握りしめた。彼女は息を喘ませながら暫時立止まつてゐた。倒れさうになつてよろめいた。後で——直ぐ後で、さうだ二三日する中に、何故こんな風にハツハと喘ぎながら激しく苦しんだのかといふことが、私にはよく解つた。たが其の時はたゞ斯う考へただけであつた。『僕の恐しい、あの欺瞞の行爲を思出させて、結局僕が苦痛を甦らせたのだ——まだなほりきらない口のあいてる傷に觸つたのだ。ああ、どうしたら信じてくれるのかしら？ 若し僕に彼女の不信任を征服することが出來さへしたら、どんなに幸福だらう。何故彼女は僕の聲に籠つてゐる眞實の響に耳を借さうとしないのだらう。』

私達は幾筋かの小路の出遇つてゐる場所近くへ來た。其處には腰掛があつた。『暫く休みませう。』斯う彼女は呟いた。

私達は腰を卸した。私は彼女が直ぐその場所を思ひ出したか何うかは知らない。少くとも

私自身は最初氣が附かなかつた。私はまるで長い間目隠しをされてゐたやうに、眼がまはつた。二人は顔を見合はせては、又他所を向いた。對手の眼にも矢張り同じ思ひが讀まれるのであつた。數々の懐しい思出は、此の古い石の腰掛にも残つてゐた。私の心には過去に對する悔恨などは少しもなかつた。たゞく電光のやうにちらりと未來の美しい、心を魅するやうな幻影を見せて呉れた激しい生の渴望で胸は一杯になるばかりであつた。『ああ、私がどんな新しい愛情の證を見ることが出來るか、それを彼女は知らないのだ。私の此の魂の奥底には彼女を迎へる樂園があるのに！』そして理想的な美しい愛は私の胸に烈しく燃え上つて來た。その爲め私は呼吸も碌々つけないほどだつた。

『何が悲しいの——此の廣い世の中に、お前ほど愛された女はありはしない。僕がお前に與へたほどの愛情の證を受けた女が何處にゐる。お前が今も言つたやうに——僕達は此處を去つてはならなかつたのだ。此處さへ離れなかつたら屹度幸福でゐられたんだよ。お前は殉教者の様な苦惱を受けないでも濟んだんだよ、屹度。あんなに涙に濡れないでもよかつたんだよ。かうまで生きる力を失くさなくつてもよかつたんだよ。だが其の代りには、僕の愛の力がどんなに強いかといふことは知らないで過ごすことになつたんだよ。』

彼女は頭を胸まで垂れて、眼を半ば閉ぢてゐた。身動き一つしないで聽いてゐた。その睫

毛は頬の上に影を投げて、それがチラと見られるよりも深く私の心を動かした。

『僕は——僕はどの位の戀が出来るのか知らなかつた。初めてお前と別れた時は、二人の間の關係は一切永久に断れて仕舞つたのではないかと思つた。僕は別に戀を求めた。別に快樂を求めた。僕は一抱擁だきでありつただけの生命を抱き取らうと思つたのだ。お前だけでは僕には足らなかつたのだ。そして數年間恐しい苦勞にもまれて來た。今思ひ返しても本當に恐しい苦勞だつた。まゝ船役囚徒が毎日歩一歩死に向ひながら、乗つて日を送つたあの船に對して感ずる恐怖とでも云はうかね。僕は數年の間闇から闇に潜り抜けなければならなかつた。そして今やつと此の光明が僕の魂に射して來た、此の大眞理が僕の眼の前に展けて來た。僕は一人の女だけ——お前だけを愛してゐたのだ。廣い世界でお前一人だけが深切で、優しいのだ。お前は僕が今までに夢想した中で一番愛らしい優しい女なのだ。お前は實にかけがへのない女なのだ。そしてお前と云ふ女は何時も僕の家うちに居つたのに、俺はわざ／＼遠くにお前を探してゐたのだ。聽いてゐる？ 僕の云ふことが分るかえ？ お前は何時も僕の傍を離れないでゐたのに、俺はお前を遠くに探してゐた。あゝ云つておくれ、此れ丈だけの事を打開けてもお前の涙を償ふには足りないのかえ。斯ういふ證しるしがあるんだから、お前はもつと／＼涙を流したつていゝだらう。』

『いゝえ。もつとどつさり。』と彼女は私に聞き取れない位小聲で答へた。

それは白ばんでゐる唇を洩れる氣息いき位ばいにしか思はれなかつた。何時の間にか涙が睫毛の間から湧き出して、頬を傳つて、やがて動悸の烈しい胸に落ちた。

『可愛い、可愛いジュリアナ。』と、私は、われを忘れて慄へながら叫んだ。そして彼女の前にくづ折れた。

私は彼女を兩腕に抱いて、膝の上に頭を載せた。すると全身が恐しく堅くなるやうな感じがした。胸の底から湧くやうな烈しい情熱を無理にもたつた一つの身振とか、動作とか抱擁などで現さうとすれば屹度何時もさうなるに決つてゐる。彼女の涙は私の頬に零れた。若し温かい涙の外に働く力が、どうかして私の情緒に働く内の作用と通じたとしたら、屹度その涙は私の皮膚に拭ひ去ることの出来ない痕跡を止めた。相違なかつた。

『あゝ、その涙を飲ましてお呉れ！』と私は懇願した。而して自分から起上つて、唇を睫毛に押し附けた。唇は涙で濕つた。私は慄へる指で、やさしく彼女に觸れてゐた。私は怪しい夢のやうな感じ——まるで堅い此の私の筋肉が空中に融けて、兩腕に抱いてゐる此の愛らしい者を、取捲いて、すつかり包んで仕舞へさうな感じ——に襲はれた。

『お前はこれまでにこんなことを夢見たことがあるかえ。』と私は云つた。——私の唇に傳は

る鹽辛い涙の味は、私の心の髓にまでしみ込んだ。(後になつて、その涙が堪らない程苦いのに氣附かなかつたことを、自分ながら驚いた。『お前はこんなにまで可愛がれるなどといふことを今までに夢見たことがあるかえ。これほどの幸福を今までに想像したことがあるかえ。斯う云つてゐるのは——ほら御覽——僕なんだよ、僕が云つてゐるんだよ。若し僕には何もかもが不思議に見える』と云ふことにお前が氣づいてさへ呉れたら！ 何も彼もあらひさらひお前に話すことが出来たら！ 僕は前からお前を知つてゐる、又前から愛してゐた。だが今は改めてお前に出會つたやうな氣がする。而かもそれはたつた今、お前が「え、もつとどつさり。」と云つたあの時に、初めてお前に出遇つたやうな氣がする。お前は確かさう云つた、ね。たつた三語——一息——だ。けれども其の言葉は僕にも新生活を齎し、お前にも新生活を展開してくれる。二人は幸福だ——時のつづく限り幸福だ。』

私は微かな、途切れ〜の弱い調子で、これだけのことを彼女に傳へた。其の聲は聲帯の働きで出るのではなくて、魂に備つてゐる微妙な機械の作用で起るのではないかとも思はれた。

彼女は今までは聲を立てずに泣いてゐたが、今になつて急に激しい歎歎し出した。それはきりのない悦びを感じて出す歎歎ではなくて、慰める術のない絶望に沈んだ餘りに出る歎歎

であつた。彼女は激しく歎歎した。人の感情が烈しく昂つたり、又或は發作を起したりするの見てゐると、見てゐる方で氣が遠くなるものだが、私が丁度さうだつた。尤も長いことではなかつたが。私は思はず彼女から少しく引下つた。すると不意を、二人の間には深淵が口を開いたやうに思はれた。私は直ぐに二人の身體の接觸は云ふに及ばず、魂の結合も、稀薄な空氣になつて消えたことに氣がついた。私達は又々お互に離ればなれになつた。二人はもうとましい仲になつて仕舞つた。二人の態度にはかうした冷淡な所があつて、それが私達の距離を一層廣くした。彼女は俛首れて、ハンカチを口にあてて、歎歎上げた。歎歎上げる度に、纖弱い身體が更に纖弱くなりはしないかと思はれるまでに、彼女は頭から足まで揺れた。私はまだ彼女の前に跪いてゐたが、もう觸りはしなかつた。私は間拔けた顔をして、それでも妙にはつきりと彼女を睨めてゐた。私は自分の心に出來してゐることを知らうと思つたのであるが、五官は悉く周圍に起つてゐることに機敏に働いた。彼女の泣くのも、燕の轉るのも聞えた。時刻に對して場所に對して極めてはつきりした意識に持つてゐた。そして花と云ふ花、その芳香、そよとも動かない大空の中に漲り溢れてゐる日光、行樂の春の包み隠しのない哄笑で、今更のやうに私は胸騒ぎを感じて空恐しくなつて來た。そして次第におぢけがさし、遂には、譯の分らぬ本能的な戰慄さへ感じ、理性などは何の役にも立たな

くなつた。そして黒雲の中から電光の閃くやうにして、私の心の暗い恐怖からは或る考が迷り出て、私に光明を點じて呉れた。『彼女は汚れてゐる。』

あゝ。何故其の時雷光が落ちて来て、私を引裂いて仕舞はなかつたのだらう。何故私の心は、其の時、其の場で引きちぎられて、彼女の足許に、死骸の私を横へさせては呉れなかつたのだらう。さうだ、瞬く間に、私を幸福の頂點へ連れて行つて、忽ち又絶望の深淵に投げ落した彼女の前に！

『返事をしてお呉れ。』と私は叫んだ——彼女の方へ進み寄つて、手首を掴んで無理に顔のハシカチを取り除くことにした。私の聲は、耳鳴りのせゐもあらうが、自分でも聞取る事の出來ない位、鈍くて曖昧であつた。『返事をしてお呉れ。どうしてそんなに泣くのだけ。』

彼女は泣くのを止めて、私の方を見た。兩眼は泣きはれてもゐたが、皿のやうにぱつちり開けて、私がすぐに死ぬとでも思つてゐるのか、酷く氣にしてゐるやうな表情を浮べてゐた。實際、私の顔には顔色らしいものが少しも残つてゐなかつた。

『もう遅すぎる？ 吃度もう遅ぎるのかえ。』と私は、此の曖昧な間に恐しい考を托して、附け加へた。

『いえ、いえ。……ツルリオ。そんなことはないの。——貴方は私が……あの？ いえ、い

え……私は身體が弱いんですわ、ね。私は前のやうな私ではありません。自分で自分が自由に出来ませんの。病氣です、ね。私は病氣です。私は——貴方の仰有る事を聞いてるともう堪らなくなつて了つたんですの。ね、お解りになつたでせう。不意に泣きたくなつたんです。神経のせゐです——泣いて見たいと云ふ様な悪い發作ですの。嬉しいので泣くのだから、苦しいので泣くのだから少しも分りませんわ。あゝ、神様。でもそれも直つて了ひました。起きて頂戴、ツルリオ。起きて私の傍に坐つて頂戴。』

泣いたので聲はいくらか嘎れてゐた。まだ時々泣きじやくりをした。彼女は、前から私の知つてゐる表情——私の苦しんでゐるのを見ると同時に現はす表情を浮べて、私を眺めた。彼女は私の苦しむのを見るに堪へない時があつた。此のことになると酷く敏感で、私が苦しさを眞似をしても彼女は私に何とか云つて呉れるほどだつた。一寸した私の苦痛を除くにも、彼女は自ら進んで其のことに當つた。だから私はよく戯れに假病を作つて、彼女を騙つたり、子供の様に甘えたり、愛撫して貰つたり、（これはわけても嬉しかった。）有難く思つてゐる温雅な美質を見せて貰つたりしたものだ。而して丁度これと同じ優しい心配さうな色が今も彼女の眼に現はれた。

『立つて、腰掛けて頂戴——此處へ、私の傍へ。それとも貴方は庭を歩く方がよくつて。私

十の十

達はまだ碌々何も見ませんでしたわね、魚池へ行きませうか。私は其處で眼を洗ひたいと思ひますの。何故貴方はそんなに私を御覽になりますの。何を考へてゐらつしやるの。私達は幸福ぢやありませんの。ねえ、私は大變よく、本當に大變よくなつたやうな氣が致しますよの。私行つて、眼や、顔や洗はなければなりませんわ。今は何時でせう。十二時？ フェデリコは七時に迎ひに来るんでせう。まだゆつくり出來ますわね。参りませうか。』

彼女は切れぐに、幾分瘳瘳的に云つた。努めて自分の氣を沈め、神經を鎮め、そして私の心から曇を取除き、自分は安心してゐる、幸福であるといふことを私に思ひ込ませるやうにした。彼女はまだうるんで、充血してゐる眼に、怖づくとした物悲しげな微笑を湛へたが、それはどんなに私の心を柔げてくれたか知れなかつた聲にも、態度にも、全體の容姿にも、昔ながらの物悲しい、優しさがあつた。それは私を和らげて、恍惚させないではゐなかつた。彼女からは私の肉體をも精神をも魅して、にえきらない、混亂した状態に惹き入れた溶けるやうな誘惑が湧いた。その誘惑を何と云つていゝかとても分らない。彼女は暗黙の間に斯う云つてゐるやうに見えた。『私はこれ以上可愛らしく、おとなしくなることは出來ませんわ。貴方の愛するまゝに、私を、貴方のお腕に私を抱いて下さいまし。でも極くそつとですよ。亂暴に抱いて、私を苦しめては不可ません。あゝ、私は貴方の愛撫に飢ゑてゐます。で

すがその愛撫を受けたらそのまゝ直ぐにも死ぬさうですわ。』先づこんな具合に、書き出せば、或る程度まではあの微笑が私に與へた結果を説明することが出来る。それから彼女は起き上つた。私は大急ぎで、彼女の顔を両手で抱いて、私の唇を彼女の唇に押附けた。

私達二人を心の底から打ち戰かしたのは、まぎれもなく、長い、長い、戀人の接吻であつた。彼女は疲れ切つて再び元の座に腰を卸した。『あゝ、いえ、いえ。ツルリオ——お願ひです。もう私はどうにも仕様がありません。少し元氣を恢復させて頂戴。』彼女は両手を伸して私に後へ退がつてくれと懇願した。『でない、私此處から立上ることも出來ませんの。御覽なさい。私半分死んでゐますわ。』

然し急激な變化が私を襲つて來た。それは丁度奔濤たる春の潮が、凡ゆるものを運んで海岸に打寄せながら、引き際には後にただ白い砂だけを殘して行く時のやうであつた。今まで存在してゐたものは急激に一掃されて仕舞つて、束の間に何もかもが、境遇の影響をぢかに受け、再燃し出した情熱の刺戟を受けて、新しくなつた。私は只だ次のことだけを意識してゐた。私の愛してゐる女——私のもの、到頭私のものになつた女が、其處に、私の前に、私の接吻でぐつたり疲れて慄へながらゐる、そして私達の周圍を取りかこんでゐる祕密な思出に富む靜かな庭園は今が花盛りである、近く、花の咲いてゐる木々の彼方には、寂然とした

別荘が、守護の燕つばめに守られながら、私達を待つてゐる、といふことだけが意識にのぼつてゐた。

『僕がお前を運ぶ位の事が出来ないとしても考へてゐるのかえ。』と私は、彼女の手を擡げ、其の指を指とを組み合せながら云つた。『だつてお前はいつも羽毛の様に軽いぢやないか。今は前よりももつと軽くなつてゐるかも知れない。一つ運んで見ようか？』

彼女の眼には不安の影が閃いた。一瞬間、彼女は、急に何かを思出して決心する人の様に物思ひに沈んだやうであつた。それから頭を振つて、背後うしろに凭れながら、その腕を私の方へ延ばした。

『えゝゝ。』と彼女は笑つて云つた。『引起して頂戴。』

私が云ふまゝにしてやると、彼女は私の胸に倒れかゝつて、今度は彼女の方から先に、烈しい接吻をした。彼女はまるで長い間堪へて來た渴きの恐ろしいさしこみを、一口の水で癒やさうとするかのやうであつた。

『あゝ。私死にさうですわ。』と、彼女はやつと唇を私から離して叫んだ。青白い勢のない顔は、濕みを持つた口と妙にいがんだ、少し脹らんだ、開いた熱に燃えてゐる唇とがあるばかりに、死人の相にもまだ脈があるといふ微かな印象を與へて呉れた。

『貴方は只今幸福ですの？』と、彼女は顔を上げて夢見るやうに囁いた。長い睫毛が微かに揺れた。陰氣な微笑が、閉ぢた眼瞼まぶたの下から出ようとして藻騒もさわいてゞもゐたのであらう。

私は彼女を抱きしめた。

『さあ、参りませう。貴方のお好きな所へ連れてつて頂戴。だけれど少しは私に手をかして下さらないと駄目ですわ。ツルリオ。足に力が無いんですもの。』

『家へ入らうかね。ジュリアナ。』

『何處でもお好きな所へ。』

私は彼女の腰にしつかりと私の手を搔かい添そへしてやつて、彼女を歩かせた。彼女はまるで夢遊病者のやうに動いた。暫くは黙つて歩いたが、時折一緒に顔を向け合つては見交はした。彼女はすつかり變つた新らしい者のやうに見えた。何でもないうやうなことまでがよく私の注意を引いた。私は考へない譯に行かなかつた。例へば彼女の皮膚にある見えるか見えない位の黒子ほくろ、下唇の傍の小さい唇、睫毛の曲線、顫顫の静脈、眼の周りの隈、此の上なく美しい耳などが――。首にある鳶色の美しい小痣は、咽喉にレースが巻いてあるので半分は隠れてゐたが、どうかして頭を動かす拍子に折々現はれた。こんなさゝいなことまでが堪らなく私を嬉しがらせた。私は嬉しさのあまり夢中になつたが、それでも私の五官は不思議とよく働

いた。燕の囀るのも、傍の池水の潑ねる音も聞えた。私は生命や時間が刻々に過ぎて行くのを感じた。而して今日はこれで三度目だが、私は日光や、花卉や、其の芳香や、勇ましい春の哄笑にすつかり壓倒されて仕舞つた。

『御覽なさいましよ。あの私の柳の木。』と、池の傍まで行くと、ジュリアナは云つた。そして私に凭れかかるのをよして、急いで歩いた。『まあ、あんなに大きくなりましたわ。ほんの小つちやい芽でしたのね。』彼女は暫く何か考へてでもゐるのか黙つてゐたが、又何氣ない低い聲で、附け加へた。『私はその後一遍此の柳を見ましたわ。私があの時ヴィルラリラに來たのを、貴方は多分御存知ないでせう。』

彼女はほつと溜息をした。然し直ぐ其の後で、恰も自分の言葉で私達の間で醸し出した陰影を消さうとでもするやうに、又彼女の口にある其の苦い味を取去らうとでもするやうに、彼女は屈んで、噴泉の管の一つに口をつけて、水を少し飲み、聽て私の方へ顔を向けて接吻した。唇を腫も濡れて、實に生々して居つた。離れても、お互ひの眼は同じ悦樂の物語を繰り返してゐた。ジュリアナの顔に現はれた感情は如何にも見なれぬもので、その時には私にも合點が行かなかつた。だが後になつて始めて分つた。此の可憐な女は死を思ひ愛を思つて酔つてゐたので、五官の樂しみに耽つてゐた時は死んでもいゝと思つてゐたのだ。私はいつ

でも彼女が私の前に立つてゐるやうにはつきり、その時の彼女を見ることが出来る。嬌かな柳の影に受けたあの神祕な顔は、何時でも私の眼に見えてゐるだらう。水に反射する日の光は透明な木の葉の網目にまで喰入つて、暗い間を慄へたり躍つたりした。噴泉の騒々しい響は、深い、單調な一つの音になつて反響した。周圍の凡ゆる物は私の神経をいよく昂奮させるばかりであつた。

私達は黙つて家の方へ歩いて行つた。五官は酷く鋭くなり、心臓は激しく鼓動した。我乍ら『無我夢中になつてゐるのぢやあるまいか。結婚したあの夜だつて此麼感じはしなかつた。』と考へた位であつた。彼女も昂奮して、堪らなさうだつた。そのせむか彼女は立停つた。

『あゝ。神様。神様。』と彼女は喘いだ。『もうたまりません。』

彼女は半分は咽喉がつまつて、息もせず、私の片方の手を取つて、自分の胸に堅く押しつけた。『こんなに鼓動してるのが分つて？』

彼女の心臓の激しい鼓動は、衣裳の上からも感ぜられた。彼女は伏せた眼瞼に涙を溜めてゐた。私は、氣絶するのぢやないかしらと思つて、彼女を抱いたまゝ、絲杉の根許まで行つた。其處で私達は疲れ切つて座に着いた。

私達の前には、夢のやうに別荘が建つてゐた。

彼女は私の肩に頭を凭せた。「あゝ、ツルリオ。ほんとに怖い。ね！これが原因で死ぬんぢやないでせうか。」と、彼女は、誰にも知れない魂の奥底から出て来るやうな聲で、淋しく附け加へた。「貴方は、二人一緒に死なうとはお考へにならなかつて？」

此の言葉をきくと、私は心に妙な慄へを感じた。それはあの柳の下で私達が接吻を取交はした時に、ジュリアナの顔色に妙な影を與へた感情、それと寸分違はない強い異様な感情から出たものであつた。だが又しても私は譯が分らなくなつた。私に分つたことは、私達二人が夢遊病に冒されて、夢のやうな空気を呼吸してゐるのだと云ふことだけであつた。

別荘は夢に現はれてゐるやうに、私達の前に聳えてゐた。田舎風の玄關下にも、軒や梁の上にも、雨笥あまどひの横にも、窓棹や露臺の下にも、さては隙間といふ隙間や隅々にも、燕は巢を掛けてゐた。粘土の巢は新しいの古いの、とりぐで、恰も蜂巢の小房のやうに、殆ど間を開けないで、それからそれへと皆一緒につながつてゐた。家は閉め切つたまゝで誰も住んではゐないのだが、陰氣臭いやうなことはなかつた。一寸も休まない快活な、愛らしい此の生物の生活で活氣づいてゐた。此のまめな燕の群は、スイ／＼飛んだり、囀つたり、いろいろ淑やかなしなをしたり、愛嬌を見せたりして家の廻りを放れなかつた。一群がお互に空中を追ひつ追はれつして、矢の様に瞬く間に散らばつたり、歡呼を擧げたり、木々の梢を掠

めたり、太陽を目がけて飛揚したりしてゐるかと思ふと、別の群は巢の廻りでせつせと働いてゐる。母燕の中には、暫く巢の口に憩うてゐるものもあれば、羽を閃めかして飛んで行くものもある。また尖さきの裂けた尾だけを外に出して、ピリ／＼と動かして、半身だけを巢の中に入り込ませて、黄ろい粘土に、白と黒との羽色をはつきり浮かしてゐるものもある。又中には巢の内側へ下半身を入れて、澤々した胸や、黄褐色の咽喉を見せてゐるものもある。又今まで見えなかつたものが、急に鋭い、慌しい叫びを發して飛び立つて行くこともある。此の閉めきつてある家の周圍に起るかうした一切の快活な、楽しい運動や、私達の昔の住居を取巻いてゐるかうした巢の生活は、實に綺麗な見世物で、感じのいゝ、心のぞく／＼するやうな奇蹟のやうにも思はれた。で私達は暫くは熱愛も昂奮もすつかり忘れて、其の方にばかり氣取らされて坐つてゐた位であつた。

沈黙を先に破つたのは私であつた。

『此處に鍵がある。』と、私は起立つて云つた。『何も待つことはない。』

『いゝえ、ツルリオ。もう少し待つて下さい。』と、彼女はおづ／＼哀願した。

『いや、矢張り行つて戸を開けよう。』と、私は家の方へ歩いて行つて、祭壇へでも登るやうに、三段の階段を上つた。私がまるで聖骨匣せいこつばこを開かうとする行者のやうに慄へながら、鍵を

廻はさうとしてゐると、丁度ジュリアナがすぐ後にゐるやうなけはいがした。私に隨いて來たのであつた。私は吃驚りした。

『あゝ、お前だつたのかえ。』

『えゝ、私よ。』と、彼女は優しく囁いた。私は彼女の息が頬にかゝるやうな氣がした。彼女は私の傍に立つて、兩手を私の首に捲き附けた。繊細かほそい手頸が丁度私の願ねがの下へ來るやうにして。

靜かな動作や、私を吃驚させて子供らしく嬉しがつて笑ふ慄へ聲や、こんな風な抱擁や、凡て輕快な女らしい動作は、私に昔の樂しかつた日の、若い好伴侶であつたジュリアナ、髪を長く垂れて、生々した笑聲を立てゝ、少女らしい風をしてゐたジュリアナを思ひ起させた。幸福の雰圍氣が、私は此の思出の深い闇に立つて、其の當時の幸福な空氣に包まれた。

『開けようか。』と、鍵を持つたまゝ、私は訊いた。

『えゝ。開けて頂戴。』と、彼女は私から放れようともしないで、その唇を殆んど私の耳に附けんばかりにして答へた。

鍵穴に鍵を入れてガチャ／＼と廻してゐると、彼女は愈々間近かに寄つて來て、びつたりと身體をすりつけて、身體の慄へを私に傳へるのであつた。燕は私達の頭の上を鳴きながら

飛び廻つた。でも鍵の軋む音は、周圍が深い／＼沈黙に沈んででもゐたやうに、はつきりと響き渡つた。

『お入りなさい。』と彼女は囁いた。『さあ、お入りなさい。』

眼には見えないが、極く近くの唇から洩れた聲は、人間ではあるけれども、非常に神祕なものゝやうに私の耳から心臓の眞中へ響いて行つた。女らしくつて、而かもこれ程快い聲を、私はこれまで誰からも聞いたことがなかつた。——私は今も尙ほそれを聞いてゐるやうな氣がする。恐らく一生聞いてゐるやうな氣がするに相違ない。

『お入り、お入り。』

私は戸を開けた。二人は一塊になつて闇を跨いだ。

廣間は、入口の戸の上にある丸窓から光線がさすので明るかつた。燕は鋭く鳴いて頭の上を飛んで行つた。驚いて見上げると、アーチの下アの凹所に巢があるのであつた。窓硝子の壞れてゐる所があつて、燕は其處から這入つたり出たりした。

『私は貴方のものよ。貴方の……ね、貴方の……』と、ジュリアナは矢張り囁くやうな聲で云つた。而して首に卷いた手を弛めないで、ぐるりと身を交して私の腕に凭れるやうにした。そして顔を私の方へ持つて來た。

私達は長い間接吻した。

『さあ。』と私の方から到頭云ひ出した。『二階へ行かう。抱いてやらうかね。』感覚は鈍つてゐたが、腕力だけは優に一氣で彼女を階上へ連れて行けるに足る。斯う私は思った。『いゝの。』と彼女は答へた。『私は一人で上れますわ。』だが其の聲を聞いたり、その顔附を見たりして察すると、彼女にそんな真似が出来ようとは思はれなかつた。

私は庭を歩いた時のやうに、彼女を抱いて、支へてやりながら、一段一段上つた。家の中には、譬へば空洞の貝の中で聞く深い遠音のやうな物音が籠つてゐた。外界の響や、氣勢は少しも私達の處へは聞えなかつた。

二階へ行つても、私は正面の戸は開けないで、彼女の手を引きながら、一言も發せず、暗い廊下を右に降りた。彼女は烈しく息をはずませた。聞いてゐるのがつらい位であつた。私も何時か其の興奮に感染せずにはゐなかつた。

『何處へいらつしやるの？』と彼女は息を切らして云つた。

『二人の部屋へ。』と私は答へた。

暗くつて廊下も碌々見えなかつたが、足は自然進んだ。私は把手を見つけた。そして戸を開けた。私達は這入つた。

(三)

これが私の最初の記憶である。あの恐ろしい事件について直つ先に思ひ出されることである。

それは前にも言つた通り四月のことで、私達は數日の間ラ・バディオラで過してゐたのであつた。

『ねえ。』と母は人のよい然し心配さうな口調で云つた。『二人共随分疲れたやうだねえ、あの羅馬、あの羅馬でね！』で今度は此の田舎で妾と一緒に長く休んで元氣をつけるといゝわね——ゆつくりと。』

ジュリアナは微笑しながらそれに答へた。

『えゝ、おつ母さん、いつまでもおつ母さんがいゝと仰言るまでこゝにゐますわ。』

母の前へ出るとジュリアナの唇には始終あの微笑が浮んで來るのであつた。だが、彼女の女の痛ましい悲しさうな眼の色は少しも變らなかつたけれど、あの微笑だけは、いかにも可愛くて、此の上なく懐しくて、私でさへもつゝいかゞと釣り込まれて、心の中にどれだけの

希望が残つてゐるかといふことを吟味して見る勇氣を挫かれて仕舞ふ位であつた。

初めの數日といふものは、母はいとしがつて私達の傍を一寸の間も離れることが出来ないで、どんなにしても心の中の愛情が表はしきれないといふ風であつた。二三度、私は彼女の手が何とも言へない感情に慄へながら、ジュリアナの毛髪をいかにも可愛くてならないといふ風に撫でたのを見た。又一度はこんなことを聞いた――。

『ではあれはやつぱりお前に優しくして呉れるのだね？』

『あの、ツルリオのこと、えゝさうよ。』と別の聲が答へた。

『では本當ぢやなかつたのだねえ――』

『何ですの？』

『世間の噂なんだがねえ――』

『どんな噂をしてゐますの？』

『いゝえ、何でもないので、妾は屹度ツルリオがお前の氣に障るやうなことをしたらうと思つたものだから。』

二人は明け放した窓の側に身を寄せて、ゆらく波打つてゐるカーテンの背後で話してゐた。窓外では楡の樹立が風に揺れて、さら／＼と葉摺れの音を立てゝゐた。私は二人に氣附

かれないやうにそつと傍へ寄つて、急にカーテンを絞つて顔を出した。

『まあツルリオ。』と母は叫んだ。そして二人の女は互に眼と眼を見合はして、どうやら氣まり悪さうであつた。

『お前の噂をしてゐたんだよ。』と母は語を續けた。

『私の？ 何か悪口でせう？』と私は快活に尋ねた。

『いゝえ、讚めてゐたのよ。』とジュリアナが直ぐに答へた。彼女は力を入れてさう云つたので、私は彼女が私に疑を起させまいと努めてゐることを知つた。

四月の日光は窓臺の上に降り灑ぎ、母の眞白い髪を輝かし、ジュリアナの額に房々と垂れかゝつてゐる柔い捲髪まげの間にちら／＼と金色の光を鏤めてゐた。白いカーテンは風にゆらゆらと揺れ、それが窓硝子に反映つてゐた。高臺アレクスに蟲々と伸びてゐる楡の樹立は軟い新緑をつけて、絶えず高く低く葉摺れの音をさせ、樹間にはさら／＼と陽炎かげらふがたゆたつてゐた。家の壁さへもが、まるで反魂香や没薬の吐息いぶきをしてゐるやうに幽しい聲を放つた。

『ライラックの花は随分きつい香だね。』とジュリアナは額へ手を翳して兩眼をまぶしさうに半ば閉ふたぎながら低聲で云つた。『何だか氣が遠くなりさうだね。』

私はジュリアナと母との中間に、少し後へ寄つて立つてゐた。不圖私の心には、前へ寄り

かゝつて兩人の腕を次々にぎゆつと握りしめて見たいやうな慾望が起つて來た。たつたそれだけの親しみを見せさへすれば、私は胸の中に張り裂ける程に満ちてゐる愛情を外へ出して、口では迎も言へないいろ／＼のことをジュリアナに悟らせ、それだけで彼の女を取り返すことが出來たのだらうに。然し私はまだ、まるで子供のやうな羞恥心に遮られてそれが出來なかつた。

『御覽ジュリアナ。』と母は小山の中腹の一箇所を指しながら云つた。『お前のヴィルリルラが見えるでせう、分つて？』

『え、見えますわ。』

彼女は掌を擴げて額に翳し、眩しい日光を除けながら、凝つと遠方を瞞めた。見ると、彼女の下唇が微かに慄へてゐるのに氣が附いた。

『あの絲杉が見えるかえ？』と私は言外に意味のある問をかけて、彼女の胸騒ぎを募らして見ようと思ひながら訊ねた。

そして私は再びあのいかめしい老木、其の根許にしつらへてある薔薇の寢臺、其の梢に囀る燕の合唱を心に思ひ浮べて見た。

『え、見えますわ、妾——やつと今——分りましたわ。』

ヴィルリルラは、遙か彼方の小山の中腹にある僅かばかりの平地の上に眞白く輝いてゐた。連山は私達の眼の前に崇高い、落着いた線をつくつて蜿々と延びてゐた。山上の橄欖の林はふは／＼と軽く浮いてゐて、まるで灰緑色の水氣が凝つて出來てゐるかのやうに思はれた。ただそこ／＼に淡紅色や白の装ひをこらした花の樹が點綴して此の單調を破つてゐるだけであつた。空は、恰かも乳色の液體が流れて混つてゆくかの如く、刻々青白くなつてゆくやうに見えた。

『復活祭が濟んだら是非ヴィルリルラへ行かなきやならんね——丁度花で一杯だらうよ。』と私は云つた。一旦荒々しく打ち壊してしまつた夢を、彼女の心の中にもう一度建て直さうと努めながら。

そして、さう言ひながら、私はつと兩人の側へ進み寄つて、兩手でジュリアナと母とを抱きながら、兩人の髪の毛のほつれが私の顔に觸れんばかりにして、二人の間に挟つて窓の闕に倚りかゝつた。お、春、爽かな空氣、崇高な眺め、大自然の母の御手によつて到る處に行はれてゐる穏やかな變化、神々しいほど蒼い空、これ等の凡てのものが、私の胸に新しい生命をいっぱいに満した、で私は怖れあやしみながら我と我が心に訊いて見た。『一體これは眞個だらうか？ 眞實だらうか？ あんなことをした後で、あんなに罪を犯し、苦しみ、恥づべきこと

をした後で、まだこんなに人生の楽しみが味へるといふやうなことが有り得るだらうか？
 まだ未來の幸福を希望し期待することがどうして出来るだらう、何故私はこんなに幸福なの
 だらう？」と。私は五體がだん／＼軽くなつて、擴がつていつて、狭くらしい肉體の外殻を
 破つて、美妙的な間斷ない旋律につれて溶けて流れてゆくやうな氣がした。彼女のほつれ毛が
 私の頬に觸れた時、私の心の中に眼醒めた感じは、迎も私の言葉では言ひ表すことが出来な
 い。

私達は暫く其處に無言のまゝで立つてゐた。楡の葉摺れの外には何の音も聞えなかつた。

窓の下の壁を一面に被うてゐる黄や紫や白い花が絶え間なく慄へてゐるのを見て私は恍惚
 とした。地面からは人間の呼吸のやうな規則正しい波動をなして温い濃厚な香氣が湧き上つ
 て來た。とジュリアナは急に私の腕をふりほどいて眞蒼になつて飛び上つた。兩眼はぼつと
 して、船暈にでもかゝつたやうに口を引きしぼつてゐた。

『この花の匂ひは恐しい。』と彼女は喘ぐやうに言つた。『妾眩暈がしさうよ、おつ母さんはさ
 うぢやなくつて？』

彼女は彼方を向いて二三歩よろ／＼とよろめきながら、やがて室を出て行つた。母もその
 後について出た。

私は明け放した扉から彼女の後姿を見送つた。この不思議な幻覺にとらはれて半ば夢見心
 地で。

(四)

未來を信ずる私の心は日毎に加はつて來た。過去は私の記憶からどうやら抹殺されて仕舞
 つたやうに思はれた。痺れ疲れた魂はもう苦痛を苦痛とも思はなくなつた。或る時は、すつ
 かり忘我の境に入つて仕舞つて、凡てのものが緩んで、擴がつて、溶けて、液狀の原素に分
 れて、見別けが附かなくなることがあつた。そしてかういふことがあつた後では、何時も新
 しい生命が私の身中へ入り込んで、清新な力が胸に充ち満ちて來るやうに思はれた。

私の現實の生活は凡て無意識な、自發的な、本能的な感覺が集つて出來てゐるも同じであ
 った。外部から刺戟を受ければ直ぐに内部からこれに反應するといふ風であつた。私の全身
 は始終外界の變化、例へば微風だとか、影だとか、光だとかの影響を受け易かつた。

残酷な魂の悩みは、肉體のそれと同じやうに人間を生れ變らせるものだ。そして魂の疾患
 が回復期に向ふ時は、肉體の病氣が癒える時に劣らず愉快でせい／＼するものだ。花を着け

た灌木や、半ば朽ちた古株から萌え出してゐる新芽やを見、つゝましやかな野の花や、春の自然の最もおだやかな變化を眼の前に見ると、私は何時も、全く子供のやうに不思議がりながら、恍惚として立ち佇つて見惚れないではゐられなかつた。

私はよく弟と二人で、朝早く、何も彼もが新鮮で、微笑してゐて、自由である時に、戸外へ出掛けた。弟のフェデリコと一緒にゐると、まるで爽かな田舎の空気を吸つたやうに私は心が清くなつて、緊張つた。弟は二十七で、始んど其の全生涯を田舎で送り、眞面目に労働して暮してゐた。まるで彼は、地上の温いまこと、いふものを悉く一身に集めてゐるかのやうに見えた。彼は人生の法則を體得してゐた。レオ・トルストイが見たら、屹度『吾が子』と呼んで喜んでに相違ない。

私達はよく野を散歩した。けれどゆつくりと話をするやうなことは滅多に無く、ただ彼が土地の豊穰なのを賞したり、新しい耕作法の説明をしたり、改良の加はつた點を指揮したりする位であつた。私達の農僕の小舎は廣くて、風通しがよくて、きちんと片附いてゐた。厩には色澤のいゝ、丈夫な家畜が一ぱい飼つてあり、搾乳場には塵一本ない程手入が行き届いてゐた。弟はよく立ち停つて植木を眺めた。逞ましい手で、細い枝の先に附いてゐる小さい緑の若葉に觸る所には、何とも言へない趣きがあつた。時々私達は果樹園の中を通つた。其

處には桃や梨や、林檎や、梅や、杏の樹が一杯に花をつけてゐた。透通るやうな淡紅色や銀白の花弁を瀟してこぼれる日光は、さながら一種の神々しい、何とも言ひやうのない、優しい露の玉を結んだかのやうに思はれた。此の空中の枝についてゐる花環の空所には、限りなく美しい青空が輝いてゐた。

私が花を賞めてゐると、弟は垂下つてゐる未來の財寶を心の中で考へながら云つた。「まあ、ゆつくりと休息んで、果物の實るのを見てゆくんですね。」

『さうだ。』と私は獨言つた。『私は結局花が散つて、葉が開いて、果實が膨れて實が入つて熟して樹から落ちるのを見ることになるだらう。』弟の口から今言はれたことは、私には非常に重大なことのやうに思はれた。何か知らないけれどまるで私の待ち焦れてゐる幸福が、此の花が咲いてから果實が實るまでの間に現はれて來るかも知れないやうな氣がした。『私が何とも言ひ出さない先に、弟は私が母や弟と一緒に此の田舎にゐることを承知なのだ、弟は全く私が果實の實る頃までゐると信じきつてゐるのだ。だから私も、これから新しい生涯が始まること、私が心の中で考へてゐたことが嘘でなかつたことを信じてもし、譯だ、凡てのものが不思議な位思ひがけなく安々と整つて行くやうだ。そして何といふやさしい深切に満ちてゐることだらう。弟をこんなにまで懐しく思つたことは初めてだ。』と、こんな風に私は漫

然とした聯絡もない馬鹿げたことを獨り心の中で呟いた。これは極くつまらないことを幸福の前兆でもあるやうに大仰に信ずる私の癖である。

けれど、私の一番愉快に思つたのは、過去の事物から遠く離れ、世間によく知れてゐる場所から離れ、或る人々の近づくことの出来ない土地にゐることを知つた時であつた。私は田舎の平和と春の静けさに浸つて、今更のやうに、あゝまで手酷い苦痛を味つた暗黒世界から離れた此の新しい別天地をつくづく眺めた。そんな時にはどうかすると一種の名状し難い恐怖が襲つて来て、つい四邊を見廻はして、現在の生活が安全であることの證據を見附け出さうとして、弟と組みかはしてゐた腕をふりほどいて、彼の變らぬ愛情をその兩眼に讀みとるのであつた。

曖昧な、廻り遠い言葉で私は弟のフェデリコに何もかも打明けた。私は單に彼に愛されたばかりでなく、彼の支配を受けたかつた。私は長子としての私の權利を、私よりもずつと値打のある弟に譲り渡し、彼の忠告に従ひ、彼を指導者と仰ぎ、喜んで彼の命を聽きたかつた。彼の側にゐれば決して道を踏み迷ふ危険はなかつたのだ。何故と云つて、彼は眞直な道と知つてゐて、狐疑することなくそれを踏んで來たからである。そして彼の腕はしつかりしてゐて私を防ぎ護つて呉れるに十分だつた。彼は善良で、健康で、賢明で、一言でいへば模

範的な人物であつた。土の愛に一生を捧げ『意識的善行』の信仰に身を捧げたこの青年の姿を見る時にも増す崇高な感じは、私の知る所では、迎も外には求められなかつた。

『田園の基督。』私は或る日笑ひながら彼を斯う呼んだ。

それはすが／＼しい朝であつた。世界の初めの原始的な曙を思はせるやうな朝であつた。遠くの畑の端で、弟が農夫の群に何か話してゐる姿を私は見つけた。彼はその人々の前に端然と立つて語つてゐた。静かな手眞似で素朴な言葉を補ひながら。積る苦勞で頭の白くなつた人や、年老つた人々は、此の青年の話話を謹んで傾聴してゐた。誰も皆、纏うてゐるぼろぼろの着物の上に彼等の勞役のしるしを留めてゐた。私が彼の方へ進んで行くのを見ると、彼は皆の者から離れて私の方へ近寄つて來た。その時だ、私の唇から思はずこの挨拶の言葉が洩れたのは。――

『おゝ、田園の基督！』

野菜の生命いのちに對しても、彼は限りない注意を拂つた。私の鋭い、萬遍なく行きわたる眼は、どのやうな些細なことも見逃さなかつた。朝の散歩の時には、彼はいつでも二三歩ごとに立ち停つて若葉についてゐる蝸牛や、毛蟲や、蟻を拂ひ落すのであつた。或る日私はいつて気がつかず杖の先で草を打ちながら散歩してゐた。柔い草の葉は杖で打たれる度に千切れ裂け

た。すると彼は見るに見兼ねて、私の手から杖をもぎ取つた。だが非常にやさしく、顔を赧らめて。それは屹度、そのやうなものにまで同情するのを見て、私が病的な女々しいことだと思ふかと想像したからであらう。おゝ、あの男らしい顔にぼつとさしたその紅色！

又或る日私が林檎の花を一枝折つた時に、フェデリコの眼には惱ましさを影がさした。それと知つて私は吃驚した。で私はすぐ止めて云つた。『こんなことは爲ない方がよかつたんだね。——』

彼は聲高に、まぎらかすやうに哄笑した。『いや、いや、ちつとも構ひません、氣に入つたら皆な折つたつて構ひませんよ。』

折れた小枝は一二本の糸のやうな繊維に支へられて母枝からぶら下つてゐた。折れ口からは樹漿が滲み出てまるで手傷を負うた人のやうに痛ましかつた。野生の薔薇のやうにほんのりと赤く、ほんのりと白い、脆弱な花は、もう一生日の光を見ることが出来ないで、胚種を胸に抱いたまゝ淋しく、絶えず微風に揺れてゐた。

『ジュリアナに持つていつてやる。』と私は周章で説明した。あたかも私の残酷な悪戯を軽くしようとするかのやうに。そして残つてゐる繊維を千切つて、私は其の折つた枝を手に取つた。

(五)

私がジュリアナに花を持つて行つてやつたのは、此の時ばかりではなかつた。いつでも外へ出た時は一ぱい花のお土産を抱へて歸つて行つた。或る朝私が兩手に山櫛さんざしをもつて歸つて來ると、玄關で母に遭つた。私はあまり急いだので少し息を切らして昂奮してゐた。

『ジュリアナは何處にゐます？』と私は訊ねた。

『二階の彼女の居間にゐますよ。』と母は笑ひながら答へた。私は廊下を走るやうにして急いで階段を上り、『ジュリアナ、ジュリアナ！ 何處にゐるの？』と叫びながら大膽に彼女の居間へ這入つて行つた。

二人の娘が、嬉しさうに飛んで私を迎ひに來た。花を見ると無性に喜んで、嬉しさが抑へきれないのか躍り廻つた。

『こつちへいらつしやいな。』と彼等は叫んだ。『お母さんはゐらつしやるわ、寢室にゐらつしやるのよ。——いらつしやいてばさあ。』

私はおづ／＼慄へながら闕を跨いでジュリアナの傍へ行つた。ジュリアナはにこ／＼しながら

らも少しうろたへて立つてゐた。

私は彼女の足許へ山櫛を投げ出して云つた。『御覽、こんなに持つて来てあげた。』

『まあ、綺麗ですわねえ。』と彼女は露を帯びた芳ばしい花を身を屈めて見ながら云つた。彼女は、一番好きな蘆薈の葉のやうな淡緑の、ふはく^{ゆつたり}な寛濶した上着をつけてゐた。髪は何の飾もつけずに無造作にゆるく束ねて、濃い金髪を耳や素首のあたりへ豊かに垂らしてゐた。扁桃^{はんとう}の匂と麝香の香とを混ぜたやうな山櫛の匂は彼女のまはりから立ち上つてやがて室一ぱいに浸み亘つて行つた。

『用心しないと刺^さでひつ搔くよ。』と私は云つた。『まあ私の手を御覽。』斯う云ひながら私はまだ血の出てる手を出して見せた、あだかも私の贈物が其の爲に値打が上るかのやうに。

『お、若し彼女がちよつとでもいゝから私の手に觸つて呉れたら！』と私は獨りで思つた。すると私の心にはずつと以前に、私が茨で手に負傷^{けが}をした時に彼女が私の手を接吻して滾々と一滴づつ湧いて来る血潮を吸はうとしたことの記憶が朧げに浮んで來た。『若し彼女が彼女の手で私の手をとつて、それだけのことで何もかも許してくれることになつたら！』

其の頃私は毎日そのやうな時が來はしないかと待ちもうけてゐた。實際私は何故といふ理由は自分にも分らずに、早晚ジュリアナが今一度私に身を委ねて、無言の罪のない、ちよつ

とした動作で『すつかり私を宥して打ちとけて呉れる。』だらうと信じてゐた。

彼女は微笑した。苦しみの影が其の白い顔と沈んだ眼とをかすめて過ぎた。

『こゝへ來てから幾らか気分がいゝかね？』と私は彼女の傍へ近づきながら訊ねた。

『えゝ、大變よくなりましたわ。』と彼女は答へて、ちよつと間を置いてから訊き返した。『貴方は？』

『あゝ僕はすつかり快くなつた、分らないかねこれで？』

『本當によくおなりなすつてね。』

以前には彼女は私に口をきく時はいつも不思議にはにかんで口籠つてゐた。それが私にはむしろやうに可愛かつた。けれど今では私はそれを何といつていゝかわからない。彼女は自然に唇へこみあげて來る言葉を一生懸命に制へて、それとは別な言葉を使はうとしてゐるやうに思はれた。そればかりでなく彼女の聲は以前よりは、いはゞ女々しくなつて、元のやうに凜とした朗らかな響を失つた。まるで口の塞いである樂器のやうな響であつた。けれど彼女の私に對する素振りが何から何まで深切で寛大であるのに、一體何が彼女をもう一步先へ進ませないのだらう？ 二人の間をこのやうに遮つてゐるものは何だらう？

其の頃は、私の心の物語の不可解な一節としていつまでも残るであらうと思ふが、私の天

性の聰明もすつかり私を見限つてしまつたやうに思はれた。あの分析的な能力、私に始終苦痛を與へるもとであつた此の性質も、全く盡きはてたやうに思はれた。當時の數限りない感覺や無數の情緒は、今では全然私には理解することも説明することも出来ない。といふ理由は、それ等の感情の原因をさぐり、その性質を知るために私を導いて呉れるものが何もなくなつてゐるのだから。其の當時の私の心の生活と其の他の時期との間にはまるで聯絡が缺けてゐるのだ。鎖がきれてゐるのだ。

私はかつてこんな物語を聞いたことがある。或る若い王子が、長い間の辛苦艱難の末に、やつとのことで熱心に行方を探してゐた婦人にめぐりあつた。その青年は希望と期待とに身を慄はした。婦人は青年のすぐ側に立つて微笑を湛へた。けれどその微笑してゐる婦人はヴェールをつけてゐたのでそれに觸れることが出来なかつた。それは此の世には又とない材料でつくつたヴェールで、空氣と見別けがつかない程薄いにも拘らず、王子はそれがあるのどう／＼戀人の手を握ることが出来なかつたといふ話である。

此の物語は其の頃の私のジュリアナに對する心持を説明するには多少は役立つかも知れない。私はまだ何か觸れることも知ること出来ないものが二人の仲を隔てゝゐるやうに感じた。けれども尙且つ私は『無言のちよつとした動作』が早晚そのヴェールを剝がして、私を

幸福にしてくれるであらうとかたく信じてゐた。

ジュリアナの寢室は、迎も言葉では言ひ表せない程私の氣にいつた。それは淡色のあまり新しくない壁紙で張りつめてあつて、その上には色の褪めた花模様がついてゐた。そして寢臺をおく爲めに深い凹所アンコウソが設けてあつた。山櫃はあたり一面に香つた。

彼女は顔を眞蒼にして、『この香はきつ過ぎますことね、妾、頭に沁みるやうですわ、貴方何ともなくつて？』と云ひながら、窓の方へ行つてそれを開け、やがてマリリアの側へ歸つて来て、『ちよつとエデイスさんを呼んでいらつしやい。』と付け足した。

家庭教師のエデイスはすぐにやつて來た。

『エデイスさん、詢にすみませんが此の花を音楽室へ持つて行つて水に浸けて置いて下さいな。氣をつけないと刺でさしますよ。』

マリリアとナタリアとはそれを一緒に持つて行くといつてきかずに出て行つた。で私共は二人きりになつた。彼女はまた窓際へ行つて、窓に靠れ、背中を日光に浴びせた。『何か用事があるの、私がゐては邪魔になりはしない？』と私は訊ねた。

『どう致しまして、ごゆつくりと、——どうぞお掛け下さい、朝の御散歩のお話でもきかして下さいな、何處までいらしつて？』

彼女は腰のあたりまである高い窓の闕に腕をのせて、神経的に急きこんで云つた。顔は私の方に向つてゐたが何となく曇つてゐた。特に落ちこんだ眼のあたりがそんな風に思はれた。けれど髪には明るい日光が降り灑ぎ、頭のまはりに朧ろげな暈をつくつて肩のあたりを照してゐた。全身の重量を支へてゐた片足は上着の裾からのぞいて、絹の靴下と、金色の刺繡をした寢臺用の上草履とが少しばかり見えてゐた。彼女の頭の背後には明け放した窓をさながら額縁として、目のさめるやうな青色の風景の一部分が見えた。彼女の全身の身すまひと其の明るい光りとは、私の心に何とも言へない盪惑するやうな魅力を吹きこんだ。

其の時私の心に急に、まるで電光のやうに、初戀當時の彼女の印象が浮んで來た。そして私の胸は彼女の抱擁の記憶と憧憬とで燃えずにはゐなかつた。

私は返事をした時、彼女の顔をつくくくと眞正面に眺めた。長く凝視してゐるに従つて私の心はだん／＼亂れて來た。彼女にはそのことがよく分つてゐたに相違なかつた。彼女自身も何となくそは／＼してゐるのが分つた位だから。私はひどく昂奮しながら考へた。『いつそ思ひきつて傍へ寄つて彼女を抱いて見ようか知ら。』と。けれど見た所何でもないごく平靜な風を装つて強ひてごまかさうとしてゐたが、それもごまかしきれず、私は段々心が亂れて來て、それを抑へることが出來なくなつた。

隣の部屋からは子供達とエディス嬢とのわけのわからぬ話し聲が聞えた。

私は立上つて窓際へ行つてジュリアナの側に立つた。さうして彼女に凭れかゝつて、かねがね心の中で彼女に會つたら斯うも言はうあゝも言はうと、よく練り返した言葉を今にも彼女の耳に注ぎこまうとしたが、若しか中途で遮られたらと思つて唇まで出かゝつたのをひつ込めて仕舞つた。それに餘り都合のいゝ時ではなかつたのだ。恐らく言ひかゝつても凡てのことを言ひつくす餘裕がなかつたであらう。私の心を全部彼女に打ち開け、最近數週間の私の内部生活、私の魂の不思議な快癒、優しい想ひの目覺め、懐しい夢の復活、希望の閃き、胸の奥底を細かに語る餘裕がなかつたであらう。最近に起つたかす／＼の小さい出來事を告げたり、愛する女の耳にはとりわけ楽しく、どんな雄辯よりも利目のある率直な告白をする時間もなかつたかも知れない。私は彼女にある大切なこと、しかも彼女が屢々失望してゐたところを見ると迎も彼女に信じて貰へさうもない事を、どうしても彼女に信じさせねばならなかつた。今度こそは偽でなく、私の全身から湧き起つた力強い慾望で、眞面目に確實に彼女の心にかへつてきたのだといふことを堅く彼女に納得させねばならなかつたのだ。彼女はまた私を疑つてゐた。疑つて居ればこそいつまでも私に打ち解けなかつたのだ。残酷な記憶の影がまだ二人の間に挟まつてゐた。私は其の障壁を打ち壊して、二人の靈をどんな事があつて

も再び離れないやうにしつかり結びつけねばならなかつたのだ。然しそれにはもつと都合のいい時を選ばねばならぬ、そして場所は、ある静かな、記憶によつてよびおこされるだけの、人氣のない所——ヴィラリルラでなければならぬ。

二人は漏斗形じょうごがたの窓口へ倚つて無言のまゝ並んで立つてゐた。山檻さんざしの香は消えてしまつて隣室からは子供の聲ががやくと聞えてゐた。

ジュリアナは俯向いてゐた。きつと彼女も此の楽しい、然し苦しい沈黙に抑へつけられるのを堪へがたく感じてゐたのであらう。軟い微風が彼女の額に垂れかゝつてゐるゆるやかな捲髪まきげをなぶり、その房々した黒味を帯びたほつれ毛が、純白な額に栗色勝ちの金色を閃めかせるのを見ると、私は戀しさ懐かしさに氣が遠くなりさうであつた。

とうとう私は此の誘惑に打勝つことが出来ないで、臆病と大膽との争ひに苦しみなながら、手を伸してほつれ毛をわきへやつた。私の指は慄へながら彼女の髪に觸り、耳に觸れ、頸うなじに觸れた。しかしそれはそつとであつた、極くそつとであつた——ほんの此の上ない軽い抱擁であつた。

『何をなさるのです？』とジュリアナは荒々しく立ち直つて、ひどく驚いて當惑して私を凝乎と見詰めながら云つた。彼女は私よりもつとひどく昂奮したのであつた。

彼女は急に窓際から飛び退いた。そして私が後からついて來るのを聞いて、室を逃げ出さうとするらしかつた。

『あゝ、何故——何故そんな風にするのだ。』と私は彼女を止めて叫んだ。けれど私はすぐに附け足した。『尤もだ、私はまだあんなことをする資格はないのだ。許してお呉れ！』

其の時教會の二つの鐘が鳴り出した。二人の小娘は室へ這入つて嬉しさうな聲を出しながら母親の方へ走つて行つた。そして代る／＼母親の頸へ抱きついて顔一面に接吻した。それが済むと私の方へやつて來た。私も彼等を抱き上げて接吻した。

鐘は晴れやかに響き渡つた。其の響きは四邊一面に浸つて行くやうに思はれた。其の日は丁度土曜日ホリサンデー、復活祭の前日にあたつてゐた。

(六)

其の土曜日の午後、私は妙な沈んだ氣分に襲はれた。

郵便がたつた今着いたばかりなので私と弟とは玉突き室で新聞に目を通してゐた。

不圖フィリップ・アルポリオといふ名前が眼についた。と私は急に一種の烈しい恐怖に打た

れた。恰かも沈澱物が静かにおいてあるときには水の底に沈んでゐるのに、一寸揺ぶると上の方まで容器一ぱいに擴がつて来るやうに。

霧の深い午後で、青白い、水のやうな日光が佗しく照つてゐる日であつたやうに憶えてゐる。高臺に向いて開け放した窓の外では、ジュリアナと母とが互に手を取り交して、話しながらぶら／＼散歩してゐた。ジュリアナは手に一冊の本を持つて、懈さうに歩を運んでゐた。

まるで夢の中で見る取り留めのない出来事のやうに、私の頭には、過去のことばかりに浮んで来た。あの十一月の朝ジュリアナが鏡の前に立つてゐる所だの、丈の高い白菊の花のかたまりだの、彼女がオルフェースの曲を歌つてゐるのを聞いた時の感じだの、『秘密』の扉に書いてあつた文字だの、ジュリアナの着物の色だの、私が窓で獨言をいつたことだの、アルポリオの顔に汗が流れてゐたことだの、道場の衣裳部屋だのが。突然深淵に臨んだ崖際に靠れてゐることに氣のついた人が感ずるやうな胸慄ひのする恐ろしさに襲はれながら、私は考へた。『どうしても私は自分を救ふことが出来ないのだらうか？』

妙に壓迫されるやうな苛々した氣分になつて、ただ獨りでぢつと考へ、怖しさに面と向つて見たいやうな氣がしたので、私は弟にはいゝ加減な口實を云つて自分の室へ這入つた。

私の苦しみにはいらだたしい惱みが大變加はつてゐた。私は、病氣がさつぱりと快癒する

時の嬉しさ、立派な健康體に復する時の喜ばしさを十分に享樂しながら、急に元の病氣の古瘡を感じ、肉の中に癒すことの出来ない病毒が残つてゐるやうに思つて、よく自分の身體を診斷して、無理にも自分を大病人と思ひ込んで仕舞ふ人のやうであつた。

けれど不思議にも凡てを忘れて仕舞ふことがあつた。その時は過去のこととも残らず忘れて仕舞つた。私の内部意識の層を根こそぎ取り去つてしまふやうに思はれる此の不思議な作用を受けると、ジュリアナに對する疑ひ——あの忌はしい疑ひ——も全く消えて仕舞つた。私の心は、幻影で心の痛みを癒して安靜を保ち、信仰と希望の力で病を癒す必要をひどく感じてゐた。母が聖らかな手でジュリアナの髪を撫でてゐるのを見ると、ジュリアナの頭のまはりには後光がさすやうに思はれた。氣分のすぐれない時によく現はれる此のやうな感情の幻影を描いて、この二人の女が楽しさうに語りながら同じ空氣を呼吸してゐるのを見ると、二人と同じく純潔な白い光に照されてゐた。

ところが今、ほんの一寸した出来事で、即ち新聞でちらと名前を見たゞけのことで、私の心の中には暗い想ひがむらく／＼と眼醒めて来た。私は總身に痙攣と戰慄とを感じ、深淵に臨んだ斷崖へ曳きずつて行かれるやうな氣がした。私はそれでも幸福の夢に妨げられ、後へ引つ張られて、その深淵をしつかりと覗いて見ることが出来なかつた。電光のやうに種々の考

へが私の頭に閃いた。『彼女はもはや純潔ではないのかも知れない——フィリップ・アルポリホ
 か誰かがあの——それは誰か分らないが——若し彼女が汚れた身體であることを確めた上
 で尙ほお前は彼女を許すことが出来るか？ 汚れたとは誰が云ふのだ、許すとは何だ？ お
 前には彼女を裁く権利はない、お前は發言する権利がないのだ。彼女はこれまで幾度も黙つ
 て辛抱して来たではないか。今度はお前の番だ。けれど私の一生懸命求めてゐる幸福を私は
 どうしよう？ それはお前だけの幸福なのか、それともお前達二人の幸福なのか？ それは
 勿論二人のだ、何故かといへば、彼女の顔に少しでも悲しさうな影がさすと、私は何を見て
 もきつと、面白くななくなつて来るではないか。それではお前はお前さへ満足すれば彼女も満
 足すると思ふのか？——お前がお前の過去の放埒な生活に満足して居れば、彼女は彼女の過
 去の貞節な禁慾生活に満足してゐたと思ふのか？ お前の夢想してゐる幸福は過去のこと
 をすつかり捨て、仕舞ふことではないか。それなら、彼女が實際不貞であつたと假定しても、
 お前の弱い心を許すと同じやうに何故彼女の弱い心をも見逃してやらないのだ。彼女に過去
 のことを忘れて貰ひたいなら、何故お前も彼女の過去を忘れて仕舞はないのだ？ 若しお前
 が過去の過失から全然切りはなされた新しい男にならうと思ふなら、何故彼女をもそれと同
 じ條件の下に全く一新した別の女と見做さないのだ？ けれどそれでは私の理想は——私

の理想はどうなるだらう？ 私にとつてはジュリアナを絶対に優れた、清淨無垢な、萬人に
 崇拜される値のある女であると認めなければ逆も幸福であることは出来ない。それに彼女
 にしても、彼女自身の幸福の大部分は、道德的優越を心の中で感ずることであるに相違ない。
 私は私自身の過去からも彼女の過去からも何物をも取り去ることが出来ない、何となれば、
 私の以前の罪惡がなく、又彼女に確固不拔の、ほとんど人間業とも思はれぬやうな立派な行
 ひもなかつたなら、私の心は、彼女のこの崇高な徳に跪くこともなく、従つて此の特殊な幸
 福はあり得ないからだ。然しお前の其の夢想は純然たる得手勝手といふものだ、逆も及びも
 つかない我儘な理想だ——それが分つてゐるか？ お前はお前がそんなに優遇されるに相
 當してると思ふのか？ お前の誤つた長い間の生活がお前を悲しませ罪亡ぼしをさせるか
 はりに、そんな高價な報酬をお前に與へると蟲のいゝことを考へてゐるのか——』

私は身體を揺つてこんな風な自問自答は打ちきらうとした。『つまり、昔の疑ひだ、それも
 せいぐのところでごく不確かな疑ひが、今一寸したはずみで蘇つて來たに過ぎないではな
 いか？ 私は影を實物ほんもののやうに思つてゐたのだ。一兩日たてば——復活祭がすんだら——二
 人でヴェルラリルラへ行かう、彼處へ行けば何もかも分るのだ——疑ふことの出来ない眞理
 が感ぜられるだらう。けれど彼女の眼の中の、あの深い、常に變らね憂鬱——あれは何だか

をかしい？——それにあの遠くの方ばかりを眺めてゐる眼附と云ひ、絶えず何か考へ込んでゐるやうな額の暗い影と云ひ、彼女の素振りに確かに現はれてゐる何物かに壓倒されてゐるやうな疲労の色と云ひ、お前が側へ寄る時にどうしても抑へきれないそれは／＼した當惑の様子と云ひ、みんな疑はしくはないか？』かういふ曖昧な表立つたことは或は案外易くいゝ意味にとればとれないとも限らなかつた。けれども私は苦痛に堪へられなくなつて、つと起ち上つて外の眺めに心を轉じ、そこに私の心の状態に直ぐに應じてくれる反響か。ある光明か、でなければ何等かの鎮痛劑となるやうなものを見出さうと思つて、本能的に窓の方へ進んで行つた。

空には羊毛のやうな雲の層が積み重なつてゐて、それが風の爲めに揺れて廣い柔かな襞になつていつた。これ等の幕のやうな雲の幾つかはだん／＼離れて地上に垂れかゝり、梢をかすめて、裂けて、千切れ／＼になつて大地にさうてうは／＼と動きながら、何時の間にか溶けて仕舞つた。小山の勾配をなした線は遙か後方に微かに延び、或はとぎれ、或はつゞいて、恰かも夢で見る實物でない幻の景色のやうに見えた。鉛色の影は野を一面に閉ざし、その中を小川が白くうねつて流れてゐた。紆餘曲折した流れが、ゆるやかに消えてゆく雲の下の影の罅裂にきら／＼と光つてゐるのに私は妙に氣を惹かれて、ぢつと眺めてゐた。そしてそれ

を何かの象徴であるかのやうにうつとりと眺め入つた。この朦朧とした夢のやうな光景に何か神祕な意味がこもつてゐるのではないかと思はれた。

少しづつ私の胸の苦しみは薄らいで行つた。荒ら立つた波は鎮まつて行つた。『何故私に及びもつかない幸福をそんなに夢中になつて求めるのだ？ 何故未來の一切の計畫を夢の上に樹てようとするのだ？ 何故實際在りもしない權利にそんなに盲目的に執着するのだ？ 恐らく誰でも一生の旅路の中には、行く手の道が二つに分れてゐて、どちらへ進んで行つたらいゝかを選ばねばならぬ點に一度か二度は逢着するものだ。お前も一度は其のやうな點に立つたことがあるではないか。あの眞白い、眞心のこもつた、愛と寛容と平和と夢と忘我、あらゆる善美を湛へた手が、どうにでも御自由にと云つたやうに、お前の前に差し伸されたことを思ひ出して見るがいゝ。』

無限の悔悟に胸を閉ざされて、覺えず涙が浮んで來た。私は肱を窓の闕にもたせ、兩手に頭を埋めて、鉛色にぼかされた野をうねつてゐる河の流を凝視めた。そして暫く、何とも言へない不幸が私の上にかぶさつてゐるのやうに感じながら、何等かの懲罰がさしづめ加へられでもしさうな脅威に壓しつけられて、其處に立ち停まつてゐた。

突然ピアノの音が階下から聞えて、壓しつけられるやうな感じは急に軽くなつた。が今度

は譯もなく胸騒ぎがして来て、私の夢も、憧憬も、希望も、一切の悔恨も恐怖も、認知し難い程、そして息詰る程速く其の中へ捲込まれて仕舞つた。

其の曲には聞き覚えがあつた。それは『言葉なき歌』でジュリアナがとりわけ愛唱し、エディス嬢がよく弾いた曲だ——それには底に隠れた意味、深刻な意味のある節がある。そこで魂が生命の方に向つて、節は色々に變るけれど、いつも同じ間を繰返すのである。『何故に貴方は私を裏切つた？』と。

半ば本能的の衝動を受けて私は急いで階下へ降り、廊下を通り抜けて、ピアノの聞えて来る室へ行つた。扉は半ば開いてゐた。私は音のしないやうにそつと這つていつてカーテンの間の隙間から覗いて見た。ジュリアナは其處にゐたらうか？初めは私の目が光線の變化に慣れてゐなかつたので何も分らなかつた。けれど直ぐに私は山櫨さんじの香に氣がついた。——あのたちじやかうと扁桃との混つたやうな鋭い香が。私は再び見直した。室は鎧戸を瀘して洩れて来る青と緑の光でぼんやり照されてゐた。エディス嬢がたゞ獨りで、私が這入つて來たのに氣もつかずに、一生懸命にピアノに向つて曲をつづけてゐた。樂器のよく磨いた表面が薄暗がりさんざしに光つて山櫨の枝が凄さい程白く光を投げてゐた。この平和な隠れ場所さんざしで、その朝私の心に起つた柔らかな感情やジュリアナの笑顔やを憶ひ出させる花から發する香氣の中に、

音曲の響は、私の心に前にも増して深い深い慰藉を與へられるやうに思はれた。

ジュリアナは何處にゐるのだらう？ まだ二階へ上りはしないだらう？ 戸外そとにまだゐる

のだらうか？ 私は靜かに身をひいて階下へ降りて行き、誰にも見つからずに玄關を横ぎつた。私は彼女に遇ひたくて堪らなかつた。彼女を一目見さへすれば私の胸が落着いて心から彼女を信ずることが出来るだらうと思つた。外へ出て高臺へ上つて行くと、そこにジュリアナが楡の樹蔭にフェデリコと並んで腰を掛けてゐた。

二人は私を見て笑つた。そしてフェデリコは私が彼の側へ行くのを待つて云つた。『今丁度兄さんの噂をしてゐた所ですよ、姉さんは貴方が間もなくこのラバディオラが厭になるだらうと云つておゐでだが、さうなつたら兄さんと約束した計畫も駄目になつて了ひますね？』『いゝえ、ジュリアナは何も知らないのだよ。』と私は努めて平常いっにも變らぬ落着いた態度をとるやうにして云つた。『それどころぢやない、今に分るだらうが、私は全く羅馬が厭になつた——それから羅馬にあるものがみんな厭で堪らないのだ。』

私はジュリアナを凝視めた。すると私の心の中には驚くべき變化が起つた。その時まで私を抑へつけてゐた遣る瀬ない想ひは底の方へ沈んで、微かになつたの消えて行き、ジュリアナと弟とを一寸見たゞけでもう健全な氣持が全身に満ち溢れて來た。彼女は稍々力無げに肩を

垂れて坐つてゐた。膝には一冊の本がのせてあつた。それはトルストイの『戦争と平和』で、まぎれもなく一兩日前私が彼女に與へたものであつた。彼女は周圍に心地のよい、優しい雰圍氣をふりまいてゐるやうに思はれた。それは私の心に、若しコンスタンザが成長おはきく一人前の女になつて、この親しみのある古木の蔭にフェデリコと並んでゐるのを見たらきつと感ずるだらうと思はれるやうな感じを喚び起してくれた。

微風がそよぐ度に楡の花はひらくと散つた。白い光を浴びて、絶え間なく緩やかに散つて行つた。透通つた、殆んど觸つても分らないやうな小片が、緑がかつた金色の蝶の翅のやうに、たゆたひつゝ、ひるがへりつゝ空中を舞ひ落ちた。花はジュリアナの全身に散りかゝつた。膝にも、肩にも。彼女は時々手をあげて髪の間には挟まつたのを拂ひ落すのであつた。

『あゝ、若し兄さんがラ・パディオラに長く居るなら。』とフェデリコは彼女に向つて語をついだ。『皆なで一つ大事業を始めよう。新規に土地法を制定して、新土地制度の基礎をつくらう。こんなことを言へばをかしく聞えるだらうが、是非これには一つ御助力が願ひたいものです。——私達の守つてゐる十誠の中の二つ三つ位は實行して貰へると私は信じてゐますよ。お二人にも葡萄畑へ行つて働いて貰はなければならん、早速だが兄さん、貴方は何時から始めて呉れますか。そんな白い手では覺束ないなあ、山楡でついた疵くらゐるは數に這入らない

んですからね！』

彼はこんな風に明晰な、溫情のこもつた聲で快活に語つた。それを聞いてゐると、相手の心にはすぐに安心と信頼の念が起つて來た。彼は彼の新舊の計畫に就いて縷々と説明をつけた。それは現在の耕作法に原始基督教の規則を適用しようとするものであつた。彼の深刻な思想と感情とは、快活な洒落で和げられた。この洒落はまるで謙遜と云ふ幕のやうなもので、彼は自分からこれを彼自身と聽き手の心に起る驚異と感歎の間へ引張るのであつた。彼の態度は何から何まで質朴で、率直で、隠しだてがなかつた。この青年は生來の深切に教へられて、思はず一人で農民ムジックのチモテオ・ボンダレフがレオ・トルストイに教へたやうな社會問題に關する説を既に數年間本能的に實行して居つた。其の當時、やつと西歐羅巴の讀書界に紹介されたばかりの『戦争と平和』といふ、大著述を彼は全く知らなかつたのであつた。

『此の本にはお前によく似た性格が描いてあるよ。』と私はジュリアナの膝から本をとりながら云つた。

『さうですか？ 是非借りて讀まして貰ひませう。』

『面白かつたかえ？』と私はジュリアナに訊ねた。

『え、大層面白うございましたわ、讀んでゐると悲しくなりますけれど、また慰められるや

うにも感じますわ、妾もう、マリア・ボルコンスキーがすっかり好きになりましたの、それからベテロ・ベソウコフも。』

私は庭園の腰掛に彼女と並んで坐つた。私の心には是れといふ定かな考へも浮ばなかつたけれど、どういふものか、ちつと考へ込んで仕舞つた。此の時、此の周囲の事物が與へた感じは、フェデリコの話や、この本や、ジュリアナが好いたといつた人の名前等が與へる感じと明かな對照をなしてゐた。ピアノの音が微かに、途切れ／＼に聞えて、霧がかつた鬱陶氣の陰鬱と、ものうさを増して來た。

他の人の話聲には耳を傾けずに、私はひとり物思ひに沈んで、本を開き、ところ／＼頁を繰つて、どの頁もそのはじめの二三行を拾ひ読みして行つた。私は或る頁が折つてあることや、またあちこちの頁の欄外の餘白に爪で印のつけてあるのに氣が附いた。そこで私は好奇心に驅られて、又多少心配にもなつて読み始めた。ベソウコフと見知らぬ老人とがトルヨクの驛舎で語るところにはいろ／＼章句にアンダーラインが引いてあつた。――

「貴方の心眼は、今内心に向つてゐるのです、貴方は貴方が御覽になつたものに満足してゐるかどうか御自身に訊ねて御覽なさい。貴方は貴方の理知を唯一の案内者として此處までおいでになつたのです。貴方はまだお若い、富もあり、思慮もおありなさる。貴方はこ

れ等の天賦をもつて何をなされました？ 貴方は貴方御自身に満足してをられますか？ 貴方が今まで送つて來られたやうな生活に満足してをられますか？」

「いゝえ、決して。私はそれが厭でたまりません。」

「さうですか、ではそれを改めなさい。それを清めなさい。さうして貴方御自身を造り改へてゆくうちには叡智といふものが分つて参りませう。貴方はこれまでどのやうな生活をお送りになりました？ 飲酒や、爲たい放題の贅澤や、放蕩墮落に身をもちくづし、ありとあらゆる快樂をつくして、それに對して何も與へなかつたのでせう？ 天から授かつた立派な天賦の賜物を貴方は何に役立てました？ 貴方の隣人の爲めに何をしました？ 貴方は貴方の周囲の人々のことを思つたことがありますか？ 精神的にも物質的にも彼等を助けたことがありますか？ ありますまい。貴方は彼等の勞力を利用して怠惰な罪惡の生活のもつてを得なされたのです。そして貴方は結婚しなされた――一人の女、しかも若い女を指導してゆく責任のあるお身體になりました。それからどうしました？ 貴方は其の女の方を眞理の道に導いて行つてあげるかはりに、虚偽と汚辱の深淵へ投げこまれたのです……」

こゝまで読んで來ると、又もや堪へがたい重くるしい壓迫が襲つて來て、私は芝生の上に

押しつけられるやうに坐つた。つい眼の前にジュリアナがあるので私の苦しみは其の爲めに百倍も増して、これまでに屢々経験した苦痛のどれよりも酷い痛手を感じた。私が引用した章句には線で印がついてゐた。ジュリアナはそれをひく時に屹度私のことを思つたに相違ない。私の罪惡を思ひ出したに相違ない。然しあのアンダーラインのしてある最後の一節は、私のこと——私達のことを指してゐるのだらうか？ 私は彼女を『虚偽と汚辱の深淵へ』投げこんだか、又彼女がそこへ陥つたらうか？

私は彼女とフェデリコとに私の心臓の動悸が聞えはしないかと心配した。

もう一頁は下へ折りまげて、深くしるしがつけてあつた。それはリザ公女がリッシー・ゴリで死んだ所であつた。

死人の兩眼は固く閉ぢてゐたが、小さな美しい顔は、元のまゝであつた。そして彼女は何時までも妾をこんなにされたのは？ と訊ねてゐるやうに思はれた。アンドレー公爵は少しも涙を流さなかつたが、今では取り返すことも、搔き消して仕舞ふことも出来なくなつた惡事を自分が犯したのだと思ふと、その胸の中は張り裂けるやうであつた。そこへ老公爵も來た。そして胸の上に十字に組合はせてある彼女のかよわい蠟のやうな手に接吻した。するとこのあはれな、蒼ざめた、小さい顔は彼にも言ふやうに思はれた。——私をこ

んなにされたのは？ と。

このいぢらしい、けれど怖しい問は私の胸を劍でつき徹すやうに應へた。『妾をこんなにされたのは？』私はぢつと其の頁を讀めたまゝ、ジュリアナの方が見たくて見たくて堪らなかつたが、わざと見ないでゐた。私はジュリアナとフェデリコとが私の動悸に氣がついて此方を見て、私が苦悶してゐるのを見付けはしまいかと氣遣つた。たつた一目、私はちらつと斜かひにジュリアナを見た。彼女の横顔は私に深く印象した。だから眼の前にある本の頁の死んだ公女の『あはれな、蒼ざめた、小さい顔』と並んで見えるやうな氣さへした。それは愁はしげな横顔であつた。弟の方を凝つと讀めてゐるのが尙更愁はしさを増してゐた。弟の聲はまるで遠くから來るやうで何を話してゐるのか私には少しも聞きとれなかつた。彼女の唇は堅く結ばれて、その兩端が少し下へ垂れてゐた。ひどい疲勞と憂愁とが、そこに知らず識らずの裡に現はれてゐた。

『妾をこんなにされたのは？』と死んだ女と、現在眼の前に生きてゐる女とが、何れも唇を動かさずに繰り返して云つてゐた。『妾をこんなにされたのは？』

『何をそんなに考へこんでゐらつしやるの、ツルリオ。』と急にジュリアナが私の方を向いて云つた。そして私の手から本を取つて、それを閉ぢ、何かいら／＼するやうに、それを膝の上

へ置いた。そして一寸間を置いてから、まるで彼女の素振りに何も特別な意味はないといふことを知らせでもするやうに語を續けた。

『エディスさんのとこへ行つて、少し音楽でも聞きますか？ まあお聴きなさい、「英雄の死を弔ふ曲」のやうですわね、フェデリコさんはあの歌が大層好きね。』

三人は耳を傾けた。沈黙の中を絃の音が響いて來た。彼女の推量は適中つてゐた。

『では行きませうか。』彼女は起ち上りながら云つた。私は彼女の後から行かうと思つて最後に起ち上つた。彼女は楡の樹から落ちた、上着に散りしいてゐる花を拂はうともしなかつた。花は地上に厚い絨氈のやうに散りしいて、猶も小歎みなくひらくと降りしきつた。彼女は頭を垂れて一寸立ち停まつて、華奢な靴の尖でかき蒐めた落花の小さい塊りを凝視めた。彼女の顔は私には見えなかつた。彼女はたゞ此のたわいもない動作に氣をとられてゐたのだらうか、それとも何か苦しい思ひに沈んでゐたのだらうか？

(七)

翌朝になると、色々の人々が復活祭の贈物をラ・パディオラへ運つて來た、其の中にはカリ

ストもゐた。これはヴィルラリルラの別荘番をしてゐる老爺で、露を含んで生々した香のいゝ素的に大きなライラックの花束を持つて來た。彼はそれを手づからジュリアナに渡すのだと云ひ張つた。そして彼女に此の前二人であるの別荘を訪れた時の楽しい日を思ひ出させ、是非二三時間でもいゝから又來て貰ひたいと頼むのだと云つた。あの時分は奥様はずつと元氣がよくてゐらつしやつた、何故それからこつち、いらつしやらぬでござりますか？ 家は奥様がお歸りなかつた時と同じで、ちつとも變りはござりません、庭も今は一番見頃で、ライラックがまるで森のやうに伸びて、丁度花は今眞つ盛りでござりますだ、夕方には屹度このラ・パディオラまでも香がとゞくでござりませう、家も庭も首を伸して奥様を待つて居りますだ、軒下の古巢には燕がたかつて居りますが、奥様のお命令を守つて大切にしております、けれどもほんたうにあまり澤山巢をこしらへますで、毎週一度づつシャヴルで露臺や窓際へ掃き出して居りますが、それでも朝になると喧ましく囀りますだ。それにしても奥様はいついらつしやるだ？ すぐにかね？

私はジュリアナの方を見て云つた。『火曜日に行つてはどう？』

彼女は持ちきれない程大きな花束に顔を埋めながら暫く躊躇つてゐた。『さうですね、では——火曜日に。』

『それぢや火曜日に行くよ。』と私は老爺に云つた。私は急に元氣が湧いて来て、自分の聲があまり嬉しさに響いたので吃驚した。『午前中に行くからそのつもりでね、辨當はこちらから持つてゆくからどうぞ構はないで、分つたね？ それから家の戸は閉めて置いて貰はう。私が行つて開けるから、それから窓も。』

不思議な、全く譯の分らない嬉しさがこみあげて来て、私に馬鹿らしい子供のやうな動作をしたり言葉を使つたりさせた、それを私はどうしても抑へることが出来なかつた。私はカリストに抱きついて、彼の美しい眞白な髯を撫で、彼の腕をとつて、ヴィルラリルラや、そこで過した過去の懐しい日々について話しかけたかつた——そして直ぐにも其處へ行つて、全身に復活祭の日を浴びたかつた。『素朴な、眞面目な、忠實な老人にまた邂逅つたのだ。』と私は彼を見ながら思つた。そして此の老爺の變らぬ感情が、まるで不吉な運命から私の身を守つてくれる厄除けであるかのやうな感じがしてほつと安心した。

昨日の夜以來、再び私の氣分は周圍のあらゆるものから流れ出る歡喜と人々の眼に閃く歡喜とによつてすつかり元氣づいて來た。ラ・パディオラがその朝はまるで巡禮の集つて來る聖地のやうな氣がした。附近の農民は一人として何かの賜物とお祝ひの言葉とをもつて來ないものはなかつた。母は其の聖かな手に數へきれない程の男や女や子供の接吻を受けてゐ

た。教會堂には集りの男女が黒山のやうにたかり、中へ這入りきれないで外の廣場で青空の圓天井の下で祈禱をさしげてゐる者もあつた。銀鈴は靜かな空氣の中に響き渡つた。塔の上の時計のまはりには「時即惠ときはめぐみ」といふ文字が刻んであつた。そしてその朝の光輝の中に、幾代變らぬ恩惠の感謝が、その懐しい母家へ流れ注ぐやうに見える時、此の三字は聲高く朗らかに人々の上に歌つてゐたのである。

どうしてかういふ時に私は胸の中に不信な猜疑や、不純な想像や、濁つた記憶を蓄へてゐられよう？ 母がその唇を一度ならずジュリアナの額に押しつけ、——弟がその頑丈な、誠のこもつた手で、彼にとつてはコスタンザの再現とも言ふべきジュリアナの纖細ほそい手を握つたのを見た以上、何を今更惧れる必要があらう？

(八)

私はその翌日も、翌々日もたゞヴィルラリルラへ遠足することの外は何も考へることが出来なかつた。情婦との最初の媾曳きの時でもこれ程抑へきれないほど慄へて待たれたことはなかつたと私は思つた。

過ぎし土曜日の苦惱を私は一つの悪夢であつたと思つた。五官の激動の爲めに心中の幻は薄れて私は無感覺になつた。私は單にジュリアナの靈ばかりでなく、彼女の肉をも再び征服したいと思つた。それで私の精神の昂奮には強い肉の分子も混つてゐた。ヴィルラリルラといふ名前だけでも既にかす／＼の記憶を喚び起した——それは優しい、田園詩のやうな記憶ばかりでなく、烈しい情熱の記憶でもあつた。私は恐らく私の疑惑から生れるべくして生れて來た心像で、無意識に慾望の刃先を鋭く尖らしてゐたのであらう。此の時までは私は精神上の方面ばかりを考へてゐた。そして火曜日のことを想像するにしても、たゞ人氣の離れた場所に隠れて彼女と語り、ひたすら彼女の許しを求めたいといふだけであつた。ところが今ももうそんなあはれつぼい場面を描いてゐるのでなくなつた。彼女の恕しを得て安心しようといふやうな女々しい想像をしてゐるのではなかつた。恕すばかりでなくこちらに身を委せねばならぬ。おづ／＼額に接吻するのではなく、唇と唇とを合せて燃えるやうな接吻を交はさねばならぬ。靈を肉に代らせるのだ。

マリアとナタリアとは此の遠足に一緒に行きたいと云つてひどく強請んだ。それにジュリアナもつれて行きさうであつた。けれどそれでは私の計畫が壊れて仕舞ふ、そこで私はありつただけの智慧を絞り、雄辯を振つて私の素志どほり行くのを斷念させた。

フエデリコは火曜日にカサル・カルドーレまでどうしても行かねばならぬから、二人をヴィルラリルラ迄序に馬車に乗せて行き、そこで二人を降してそれから先は獨りで行かうと言ひ出した。そして夕方に又二人を乗せて三人で一緒にラ・パディオラへ歸らうと云ふのであつた。これにはジュリアナも私も賛成した。

私はフエデリコがヴィルラリルラ迄一緒についてゆくのは、あまり邪魔にはならぬと考へた。それが爲めに私は何となくきまりの悪い思ひをするのが助かるやうな氣がした。若し二人つきりだつたなら、二時間も三時間も馬車に乗つてゐる間に私は何を話さねばならなかつたらう？ 彼女にどのやうな態度をとつたことだらう？ 私は何もかも臺なしにして仕舞つたかも知れなかつたのだ。少くも彼地へ着いてから二人の間に起る最初の新しい情緒を味ふことは出来なかつたに相違ない。私はいつもヴィルラリルラで魔術にでもかゝつたやうに急に彼女と選つて、そこで最初の優しい、謙遜つた言葉をかけて見たいといふ風に想像してゐたのだ。

フエデリコがゐてくれれば彼地へ行き着く迄の間の退屈がまぎれるだらう、長い、氣まづい沈黙をつゞけるのが助かるだらう、御者の耳に聞えないやうに低聲で窮屈な話をするのがなくてすむだらう、——一言で言へば此のやうな場合にあり勝ちなつまらない立腹や苦し

みすべて免れることになるだらう。そして二人はヴィラリルラで馬車を降りて、そこで始めて二人きりになつて、肩を並べて失はれた樂園の入口に立つといふことにしなければならぬのだ。

(九)

午後の二時であつた。二人がヴィラリルラへ着いてから、もう彼は三時間は過ぎた。私は暫くジュリアナを一人残して置いてカリストを呼びに行つた。老人は既に一度小晝の膳を運んで来たのであつた。で今度は驚きもしないで、一種人の好い揶揄ふやうな眼附をしながら、又も直ぐ引きさがれと云ふ命令を受けて立去つた。

で、ジュリアナと私とは互に向ひ合つて、戀人同志のやうに、互の眼を見合つては微笑しながら食卓に着いてゐた。食卓の上にはいろいろの冷たい食物——糖果やビスケットや橙や白葡萄酒があつた。此部屋は、不恰好な天井と云ひ、一寸とした壁掛と云ひ、扉に描いた風景畫と云ひ何處かに一種奇異な、古風な美しさがあつて、前世紀の面影を見せてゐた。開放した露臺の扉からは柔かな薄い光線が流れ込んで来た。空には長い乳白の雲が棚引いてゐた。

そして眼の前には、古い神々しい絲杉が窓枠の中に切取られて見えてゐた。其の根許には薔薇の花壇があり、梢の方には燕の鳴く聲が聞えた。少し離れた處にはヴィラリルラの誇りである、美しく色づいた花の森が連つてゐた。三重の芳香、ヴィラリルラの四月の精は、長い規則正しい呼吸を續けて靜かな空氣の中へ擴がつてゐる。

『貴方覚えてゐらつしやる——』と、ジュリアナは云つた。二度も、三度も、『貴方覚えてゐらつしやる?』と。

二人の愛の遠い／＼記憶が一つ一つ彼女の唇に上つて来た。それは屹度何か些細な事情から喚び起されたものであらうか、さう云ふ記憶の生れた地で、そして古い馴染の事物に四圍を取りまかれてゐると、恐しくはつきりと甦つて来た。然し花園にゐた時に私を襲つたと同じ果ない欲求、生活に對する物狂ほしい渴望が、今や私を殆んどさういふ思出に堪へ難くした。そして私は近い過去の惱ましい幻想に代へるに、未來の誇張的な幻影を以てするやうにと云ふ暗示を受けた。

『明日、いや遅くも二三日の内には此處へ遣つて来ようね、逗留するのさ——それも二人だけで。御覽よ、すつかり元の儘で何一つ無くなつたものはないぢやないか。何も彼も残つてゐる。お前が好けりや、今夜は此處へ泊つてもいいのだ。お前は厭かい! 本當にお前はさ

うする気はないかえ。』

聲や身振や眼附で、私は彼女を誘はうと努めた。二人の膝は卓子の下で融合つてゐる。だが彼女はただちつと私を睨めてゐるばかりで、何とも答へなかつた。

『ヴェルラリルラに初めて泊る晩を想像して御覽！——家を出て、アヴェ・マリヤの鐘の鳴る頃迄歸らないのだよ。そして窓が明く輝き出すのを見るんだよ！ あゝ、お前には私の云ふ事が解るね。燈火が始めて此家に點く——最初の晩！ 考へても御覽よ！ 今の今迄、お前はただ昔を思出すばかりだつた。所で、其のお前の回想は一として私の今日の一瞬時にも相當するものがない。恐らく明日の一瞬間ほどの値打もあるまい。二人の前にある幸福を、お前は何うかうと疑つてゐるのかえ。私は今のやうにお前を愛したことは嘗つて無かつたことだ。ジュリアナ——断じて、断じてなかつたよ。聽いてゐるかえ？ 私は嘗つて今日程完全にお前の所有になつたことはなかつた、ジュリアナ。私はお前に話さう——私が經て來た道筋を皆んなお前に話さう。左様すれば、お前のやつた奇蹟が解るだらう。あれ程いろ／＼下司張つた事をした後で、何うして私が此様なことを望むことが出來よう。私はお前にすつかり話すよ。或る時には私は自分の青年時代、少年時代に還つたやうな気がした。私は其の頃の様に純潔で無垢で、愛情深く、單純になつたやうな気がした。過去の事などは一つも想

ひ出さなかつた。凡て——すべて私の考はお前のことばかりであつた。私の感情は能くお前のことに結び附いてゐた。花一輪、小さな木の葉一枚見ても、私の魂の盃は溢れ出ようとするやうな時があつた。それ程一杯だつたのだ。それなのにお前は何も知らずにゐた。何一つ気が附かずにゐた。私はお前に話したいことが澤山ある。いつか、土曜日に、私が山櫨の花を持つてお前の部屋へ行つた時、私は若い戀人のやうにおづ／＼して羞みがちだつた。けれど私はお前を擁きたいと死物狂ひになつた。お前はそれに気が附いてゐたかえ、おゝ、私は何も彼も言はなくちやならない——可笑しいだらうね！ お前は何も知らないのだ。烈しく動悸を打たせながら、そつとお前の部屋へ忍び入つたことも一二度あつた。お前の寢床が見たさに、それに觸はつて見たさに、枕に顔を埋めたさに私は凹間アルコフのカアテンを開けた。又時は、家中寢静まつた時に、そつとお前の部屋の扉口まで忍んで行つてお前の寢息を窺つたこともあつた——』

『しツ、ツルリオ、黙つて下さい。』彼女は、私の言葉で氣でも悪くしたのか、懇願するやうに斯う云つた。それから微笑みながら又附け加へた。『ね、貴方、そんなに私を昂奮させてはいけません——何時かも言つて置いたでせう。私は本當に弱くなつて居るんですから——こんなに憐れな、繊弱者なんですから。貴方は私をときまぎさせますわ。私、どうしていゝ

か分らなくなります。御覽なさい、本當に私は弱つてゐるんですから。』

彼女は微かな薄い微笑をもらした。彼女の眼瞼は未だ少し赤味がかつて、重さうだつたが、其の下には双眸が熱病のやうな情熱に燃えて、長い睫毛に曇つて幾らか柔いであるが、なほ堪へられないほどの力で始終私を瞞めてゐた。彼女の態度や身振には、はつきり私には分らなかつたが、何處かに取締つた所があつた。これまでに何時彼女の顔には人の心を亂すやうな變な表情が浮んだことがあらうか。それに、彼女の表情は時々入組んだ、譯の分らないものに變つて、終ひには謎のやうになつて來た。

『心は全くこつた返してゐるのだらう。』と、私は一人で考へた。『彼女はどんなことがあつたのか未だ知らないのだ。心の内は波立つてゐるに違ひない。人間といふものは一瞬間で變つて仕舞ふやうな筈はない。』此の神祕な表情は、私の心を惹いて、一層私の情熱を高めるやうになつた。燃えるやうな彼女の凝視は一切のものを焼きつくす炎のやうに、私の骨髓に流れ込んだ。

『お前は何も喰べないね。』と、私は頭に湧いてゐた情熱の煙霧を拂ひのけようと努めながら彼女に云つた。

『貴方もさうでせう。』

『まあ少しでもお飲みよ。此の酒をお前覺えてゐるかえ。』

『え、覺えてゐますわ。』

『覺えてゐる？』

二人は戀のエピソードを想ひ出して昂奮しながらお互ひに顔を見合つた。其のエピソードには彼女の好きな薄黄色の微妙な芳香が滲つてゐた。

『では一緒に飲まうよ——そして二人の幸福を祝さうね。』

二人は洋盃コップをかち合せた。私は一息に自分の盃を呑みほした。が、彼女は不意に厭氣でもさして來たのか、唇に一寸盃をあてただけであつた。

『ま、如何したんだえ。』

『ツルリオ、私駄目。』

『何故飲めない？』

『何故つて——何卒強ひて下さるな。一滴でも飲んだら頭がぐらく／＼して來さうなんですの。』さう云つた彼女の顔には、死人のやうな蒼白さが浮んで來た。

『氣分でも悪いのかえ、ジュリアナ。』

『少し。彼方へ行きませう——あの露臺の上へ行きませう。』

私は彼女を抱いた。「横になつて休んでは如何だえ。傍についてゐて上げるよ。』

『有難う、それには及びませんの、ツルリオ。もう大變快いやうですわ。』

二人は絲杉を前にした露臺の端へ歩いて行つた。彼女は片手を私の肩に載せて鐵の欄干に凭れた。軒先には燕の巢が澤山あつて、中では燕が絶えず騒がしく鳴いてゐた。でも下の庭園は深い静けさに閉されてゐた。絲杉はそよとも動かなかつた。だから凡べての此の騒ぎや翅の摺れ音や其の啼き聲やは彼女を苦しめた、いや私を不快にした。其の他のものは皆んな静かな光に包まれて段々静まつて、灰暗くなつて行つた。そして私は其の時や其の孤獨やの心地よさを飲み盡したさに、休息を、沈黙と安靜との長い時間を欲しいと思つた。

『此邊には今頃鶯が出はしないかしら？』と、私はあの夜の鳴聲の何とも云へない心地よさを思出しながら云つた。

『さうねえ、聞えませんね。』

『夕暮になると鳴き始めるんだよ。お前は又あの啼き聲が聴きたくはないかえ。』

『あの、フェデリコは何時歸つて來るのでせう？』

『なるだけ晚い方がいゝね。』

『えゝ、左様——なるだけ晚くね、晚く！』と、彼女が如何にも熱心に叫んだので、私は思

はず喜びに身顫ひした。

『楽しいかえ？』と、私は彼女の眼の中に答を求めながら、尋ねた。

『えゝ、楽しいわ。』と、彼女は眼瞼を垂れながら答へた。

『もう私がお前一人を愛してゐるといふことが解つたらうね——私はお前のものだよ。すっかりお前のものだよ。末長く。』

『えゝ、ちゃんと解つてよ。』

『で、お前は——お前は何の位私を愛してくれる？』

『貴方にはとてもお分りにならない位よ——ね、ツルリオ！』

彼女は斯う云ひながら、欄干から離れて、どうにでも自由にと云つて女が男に寄つて來る時のあの一番愛らしい心を含めてゐる、何とも云へない表情をして私の胸に凭れた。

『美人だ、美人だ。』

彼女はどんなに美しく見えたか知れない。本當に思ひ崩れるやうな、身を委ねるやうな、溶け行くかと思はれるやうな優しさ！ 彼女の顔は蒼白く光つて、解いてある髪の薄黒い流の中から浮上つてゐた。睫毛が頬の上に影を落して居るのは、一寸眼を向けられるよりもどんなにか私の心を酔はせたか知れない。

『お前だつて——お前にだつて分らないよ。私の胸に湧き上る狂へる思ひをすつかりお前に打明けられたら！ 私の楽しさは自分ながら駭かれる程大きい。私はもう死んで仕舞ひたいと思ふ位だよ。』

『死んで！』と、彼女は方なささうに微笑みながら靜かに繰返した。『あのね、ツルリオ！ 私もひよつとすると死ぬかも知れないわ——今に。』

『お、ジュリアナー』

彼女は私の顔に見入らうと思つて身體を反した。

『ねえ。』と、彼女は續けた。『私が死んで仕舞つたら——本當に急に——不意にですよ——貴方如何なさる。』

『馬鹿奴が！』

『若し、私が明日にも死んだら。』

『そんな事を云ふもんじゃないよ！』

私は兩手で彼女の顔を抑へて唇や、頬や、眼や、額や、髪やに軽く、さつさと接吻した。彼女は其儘になつてゐた。實際、私が止めると、『もつと。』と、彼女は囁いた。

『明日、明日、又來ようよ——それより晚くつちや駄目だよ。』と、私は我慢がしきれなくな

つて云つた。そして何だか分らないが、四圍のものから刺戟を受けるやうな気がしてならなかつた。

『明日！』

『私等は生活の新奇時きなほしをやらう——此の家で、此の庭園で、此の春の陽の光を受けて——今迄何も起らなかつたやうに、二人の愛を甦らさう。順次に、古い抱愛へ歸らう。そして其の一つ一つの中に二人が今迄知らなかつたやうな新しい香を見出すんだ。二人には時がある——二人の前には凡ゆる時が——』

『いえ、いえ、ツルリオ、未來のことは云つて下さるな！ あの未來は不幸だつてことを御存じなくつて。今日、今日——今日のことを考へて下さい、過ぎて行く此の瞬間を——』斯う云つて、彼女は氣違ひではないかと思はれる程に私の唇に接吻を重ねながら、烈しく私に抱きついた。

(十)

『まあ馬の鈴音が聞えて來ますわ。』

と、ジュリアナは立ち上りながら云つた。『フェデリコが歸つたんでせう。』

二人は耳を傾けたが、それは彼女の聞き違へであつた。

『もう此處へいらつしやる時分ぢやありませんの。』と、彼女は訊いた。

『左様、もう七時になるね。』

『おゝ、神様！』

二人は再び耳を傾けた。馬車の近づくやうな音は何もしなかつた。

『貴方行つて見ていらつしやる方がいゝわ。ツルリオ。』

私は部屋を出て下へ降りて行つた。眼の前には霧が立罩めてゐて、水蒸氣のせゐか、頭が茫として、私は、歩調おしどりがしつかりしなかつた。壁に入込んでゐる小さい戸を開けて、直ぐ傍の家にゐるカリストを呼んだ。そして馬車のことを尋ねて見たが、未だ見えないと云ふことであつた。

老人は私を引留めて話が出来たらしかつた。

『あのね、カリスト、私等はひとつしたら明日も此處へ来て、泊つて行かうと思つてゐるんだがね。』

彼は嬉しさの餘り両手を舉げた。

『本當に？』

『さう、本當とも。其時は澤山話せるよ。馬車が見えたら、さう云つて呉れ。ではさよなら、カリスト。』

私は訣れて家に歸つた。夕暮は次第に迫つて来て、燕の群は翅をきらきら光らせて夕日の中を翔りながら、しきりに鳴き叫んだ。

『如何でした。』と、ジュリアナは帽子を冠つたまゝ姿見鏡から振り向いて尋ねた。

『未だ何のこともないよ。』

『私の方を見て下さい——大變ふしだらには見えなくつて。』

『いゝや。』

『でも顔はどう！一寸見て下さい。』

實際、彼女の顔を見ると、今柩の中からも起き上つて來たやうであつた。大きな紫色の環が眼の縁を彩つてゐた。

『でも私は生きてゐますわ。』と、彼女は付け加へて微笑を泛べようとした。

『ひどく具合が悪いの？』

『いゝえ、ツルリオ。でも——如何いふ譯か解りませんか——身體が空洞からっぽになつた様な氣が

しますわ。頭も空虚、心臓も空虚、血管も空虚のやうですわ。私皆んな貴方に上げて仕舞つたんですわね。私は見た所生きてゐると云ふだけなのよ。』

彼女は斯う云ひながら妙な微笑をもらした。それは何となく陰氣な神巫的な微笑で、私は云ふに云はれない不安を心に感じないではゐられなかつた。然し又有頂天にもなつてゐた。心の桁ははづれ、頭の働きは鈍くなつたやうであつた。やましい疑惑は決して私の頭の中へ這入らなかつた。それなのに、どういふ譯かはつきり分らぬながら、心配さうに眼で物をさぐるやうに熟々彼女を睥めた。

彼女は復姿見鏡に向つて、帽子を冠つた。それから卓子の傍へ行つて、腕環と手套とを取り上げた。

『私支度が出来ましたわ。』と、彼女は云つた。

彼女は何か捜すやうな様子を見せながら、おたゝ身邊を見廻した。『私は蝙蝠傘バットンを持つて来た筈でしたが、如何でしたらう？』

『うむ、私もさう思ふが。』

『あゝ、——判りました。屹度庭園の腰掛の上に置き忘れて来たんだわ。』

『一緒に行つて探して来ようか？』

『私は大變疲れて居ますが。』

『ぢや、私が一人で行つて来よう。』

『いえ、カリストを遣つて下さい。』

『私が行かう。そしてお前にライラックの小枝を二三本、それから麝香薔薇の花束を採つて来て上げようと思ふが——どうだえ。』

『いえ——花なんぞいりませんわ——』

『此處へ来てお坐りよ、それまではね。多分フェデリコは思つたよりも長くかゝつたんだらう。』

私は安樂椅子を露臺に出して彼女に薦めた。すると彼女は腰を下した。

『貴方いらつしやる時。』と、彼女は言つた。『カリストが私の外套を持つてるか否か見て下さいね。馬車へ忘れて来たやうには思はれませんわ。何だか少し寒氣がするのよ。』彼女は身顫ひした。

『露臺の扉を閉めようか？』

『いえ、いえ、私は何時までも庭園を眺めてゐたいわ。今頃は本當に美しいのね！ 御覽なさい、綺麗ぢやなくつて？』

金色の光はぼんやりと庭園の彼方此方を照らしてゐた。花の咲いてゐるライラックの木々は其の梢が大方濃い紫色に浸つて、下の方の小枝は鼠色がかつた藍色に染つてゐた。密生した花朵が微風を受けて靜かに戦ぐと、まるで綾織絹のやうに色々變つた色合を見せた。枝垂柳は其の長い房を池に浸してゐた。水は虹彩陸離たる光澤ある眞珠母のやうに輝いてゐた。そしてちつとよどんでゐる光、軽く地上に曳く簇葉、暮れて行く日の光を受けて優しく色づいた花の森は、まるで空想的な魔法の幻影が出来たのかと思はれた。

二人は其の魔力に囚はれて、暫くは黙つてゐた。何やら譯の分らない憂鬱が私の魂を襲つて来た——凡ゆる人間の愛の奥底に潜んで居る朧げな不幸の感じが、私の心を掻き亂した。肉體の疲労や鈍重な感覺は、目前にかういふ理想的な光景を見てゐながら、一層重くるしく私の身の上に押し迫つて来るやうに思はれた。私は、度外れた、長過ぎた悦樂が止んだ後は屹度起つて来るあの不快と、失望と、掴み處のない悔恨とに充された。私は苦しんだ。「私かう眼を閉つて、もう二度と開けたかありませんわ。」と、ジュリアナは夢でも見てゐるやうに、話した。それから身顫ひしながら付け加へた。「私大變寒くなつたわ、ツルリオ。どうか行つて来て。」

眩掛椅子に倚りかゝりながら、彼女は自分を襲つて来た身顫ひの發作に手向ひでもするや

うに身體を縮こめた。彼女の顔、わけても鼻孔の邊は、どうやら雪花石膏のやうに透明な鉛色を帯びてゐた。彼女は惱んでゐた。

『お前氣分が悪いんだね、お前！』私は斯うした彼女を見るのが心辛かつたし、又少し物怖もしてゐたので斯う云つて見た。

『ただ寒いだけなの。外套を取つて来て頂戴、何卒——早く——』

私はカリストの處へ駈けつけて、外套を手にするや、直ぐ様歸つて来た。彼女は私が手傳つてやるまゝに急いで着た。それからもう一度椅子に腰掛けて、兩手を袖の中へ入れながら、『これで暖くなつてよ。』と、云つた。

『では、行つて蝙蝠傘を取つて来よう。何處へ置いたんだか？』

『いゝえ、いゝのよ——構ひませんわ。』

だが私は、二人が初めて立止つたあの古い石の腰掛へ、彼女が激しく泣いた處へ、彼女が『えゝ、もつと、でも。』と神々しい言葉を三つ口にした處へ、妙に還つて行きたくてたまらなかつた。それは感傷癖からであつたらうか？ あらたな感覺に對する好奇心であつたらうか？ 彼の時の神祕な光景が私の心を悩ましたからであつたらうか？

『直ぐに歸つて来るから。』と私は云つた。

私は降りて行つて、露臺の下へ差しかゝるや、

『ジュリアナ！』——と呼んで見た。

彼女は上を見上げた。自分の魂の眼の前には——ありありと——何時でも薄暮の中に立つてゐるあの黙然とした幽霊の幻影が消えないであらう。脊の高い、ほつそりした姿は、あの長い黒色の外套と、あの白い、白い顔の死人の様な蒼白さの爲めか、一層高く見えた。

旋て彼女は又引込んだ。いや、其の時受けた私の印象をもつとよく記すならば、彼女は消えたと言つた方がよい。私は急いで徑を下りた。が、心の中では何で急いでゐるのかはつきり判らなかつた。足音は私の腦の中に響いて来るやうだつた。私はすつかり眩惑されてゐたのだから歩いてゐる道を確めるのに一度か二度は立ち停まらなければならなかつた。何處から此の盲目的な譯の分らない攪亂が來たか？ さうだ、確かに、單純な肉體の原因から、神經の特殊な状態から——斯う私は自分で説明した。反省を長く續けて行くだけの氣力もなく、きちんと物事を吟味したり又考へを纏めたりする働きもなく、私はただ神經のまに／＼なつてゐた。だから何も彼もがまるで錯覺の時のやうに大げさに私の心を動かした。とは言へ、一二の考へだけがはつきりと明るく浮んで來た。そして幾つかの思ひも寄らぬ出來事の爲めに私は既に心を苦しめたが、其の苦しさが増して來た。今日のジュリアナは私の記憶に残つ

てゐる『昔のジュリアナ』と同じ人ではなかつた。それが私を驚かせた。彼女は、どうかすると私が期待してゐたやうな態度は執らなかつた。何かしら分らない要素、何か朦朧とした、法外なものが這入り込んで彼女の性質を變へるのであつた。かういふ變化は病的な状態のさせる業であつたらう？ 『私は病氣です、私はひどい病氣です。』と、まるで辯解するやうに、彼女は再三繰返して云つた。確かに、病氣は深い變化を惹起して、人間の存在をとても見分けのつかないものにするものだ。すると一體彼女は何病であつたらうか。古い元からの病氣が、多分、外科醫の手術を受けても全く癒りきらないで、今になつて入組んで來て、不治の病になつたのかも知れない。『本當に私直きに死ぬかも知れませんわ。』と、彼女は殊更力を籠めて云つた。何か豫言でもするやうに、彼女は幾度か死といふことを口にしました。さういふ場合には彼女は自分が致命的な萌芽を懷いてゐるのをはつきり知つたのかしら。死といふ考に襲はれてゐたのかしら。彼女が私に抱かれて、見せたあの深い情熱的な、あの烈しい熱情を、胸の中で燃え立たせたのは、屹度さういふ考の仕業であつたらう。幸福といふ大きな急は現はれて來た光は、疑ひもなく彼女について廻つてゐる幻影を一層はつきりと浮き立たせ、一層怖しいものに見せるのであつた。

『では、ひよつとすると死ぬのかも知れぬ、私に抱かれてゐる時、二人がありとあらゆる

幸福を味つてゐる最中に、死に襲はれるなんてことが有り得るだらうか。』と、私は獨り考へに耽つた。と氷のやうに冷たい恐怖の戦慄が全身に傳つて、私は暫し一所に立ちつくした。實際私はまるで危険が差し迫つてでもゐるやうに、又ジュリアナが『若しか、明日にも私が死んだなら。』と、云つたのがそれが本當にでもなつたかのやうに、私は感じたのであつた。夕の露がそろ／＼降りかゝつて來た。幽かな微風が、何か獸物でも急いで通つて行くやうにカサ／＼と音を忍ばせて茂みの中を吹いてゐた。時を忘れた一羽か二羽の燕が、石投で投げられた石の様に、空中をツイ／＼飛んでゐた。西の地平線には、夕日の光が、何處かの凄じい氣味の悪い大火のほとぼりか何かのやうに、未だたゆたつてゐた。

やつこのことで腰掛の所へ來て見ると、蝙蝠傘バトマンが見つかつた。此處だ、彼女が弱つて、なよ／＼になつて、負けたのは。此處で私は尊い言葉を口にしたのだ。彼女にうつとりとなるやうな告白をした——『遠くの方かと思つて捜してゐるのに、お前は私の傍にゐたのだ。』私の魂を矢庭に歡びの絶頂へ引き上げた私語を彼女の唇からもれきいたのも此處だつた。此處で私は初めて彼女の涙を飲んだ、彼女の嘔りなくのを聞いた、私は曖昧な問を發した——『もう晩過ぎる、え？ 晩過ぎる？』

未だ僅か二三時間しか経たないのに、如何してかう昔の様な氣がするのだらう！ たつた

二三時間だ、それなのに私の幸福はもう色褪せて、消えて仕舞つたやうに思はれる！ 別の、然し前と同じ様な怖しい意味で、『もう晩過ぎる——もう晩過ぎる？』といふ問が終えず心の中へ蘇つて來た。苦痛や胸騒ぎは増すばかりであつた。薄暗い光や、靜かに集つて來る夕暗の影や、暗い茂みの中の奇妙な物音など、すべて此の黄昏の無氣味さが、私の心では或る不吉な意味に解された。

若し本當にもう晩過ぎるとしたら何うだ——彼女が心から駄目であるといふ事を實際知つたなら、死が迫つてゐる事を知つたなら何うだ。生活にも疲れ、苦痛にも疲れ、此の上私から何も望むものなく、さりとして刃物や毒藥で自殺する事も出來ないで、益々病を募らせ、助長もさせて仕舞つたかも知れない。蔓延して、深く根差して、不治の病となるまで隠して置いてゐたのかも知れない。一步々々、神密の裸に、解放の方へ、臨終の方へと導かれて行かうと云ふのが彼女の考だつたのだ。彼女は病氣の症候によく氣を付けてゐたので、自分の病氣の事はよく知つてゐた。そして今は自分が死ななければならぬ事を、知つてゐる——死ぬに相違ないと思つてゐる。あゝ！ 彼女は、愛が、熱情が、私の接吻が破壊の業を早める事を知つてゐるかも知れない。私は一生彼女の許へ返る。思ひも寄らない幸福の世界が彼女の前に開ける。彼女は私を愛し、又自ら限り無く可愛がられてゐるのを知つてゐる。僅か一

日の中に、夢は二人にとつては現實となつた。だが、彼女の唇にはどんな言葉がよく浮んだか。死！ ジュリアナが手術を受けてゐた二時間、其の間私を苦しめたあの怖しい幻影が、又しても私の前をごとくと通り過ぎた。其時、私は女が病氣になると、現はれて来る恐しい醜さが、まるで解剖圖解で見るやうに、はつきりと眼の前に浮んだ様な気がした。そして更にそれよりも遠い昔の回想が、駭くべき明瞭さで返つて來た。ほの暗い影の多い部屋、開かれた窓、揺れ動くカーテン、姿見鏡の前に揺ぐ蠟燭の焰——悪い前兆——それから衣裳戸棚に凭れながら、まるで毒を仰いで苦しんでゐる様に痙攣して身悶えしてゐたジュリアナ。すると今度は責め立てる様な聲が次の様な言葉を繰返した。『お前の爲めだぞ、彼女が死なうと迄思つたのはお前の爲めだぞ。お前——お前が彼女を死に導いたのだ。』

私は譯の分らない恐怖、いや恐慌とも云つたものに襲はれて、まるでさういふ空想が凄い實在にでもなつたやうに思はれたので、家の方へ急いで行つた。

歸つて見ると、家は墓石のやうに生氣がなかつた。窓や露臺はすっかり夕闇に蔽はれてゐた。

『ジュリアナ！』と叫んで、私はもう二度と再び彼女には會へないのぢやないかと思つて、玄關の階段を跳上つて家の中へ駈込んだ。

『一體俺は何で苦しむのだ。此の様は何と云ふ狂態だ。』

私は息を切らして、暗い段梯子を駈上つて、部屋の中へ突き進んだ。

『如何なすつたの。』斯うジュリアナは吃驚して起ち上りながら尋ねた。

『何でもない、何でもない——お前が呼んだかと思つたから——走つて來たのさ。今具合は如何だえ？』

『大變寒い、ツルリオ、大變寒いわ。手を觸つて見て下さい。』彼女は私の方へ兩手を差出した。それは氷のやうに冷たかつた。

『全身がこんなに冷めたいのよ。——』

『お、まあ！ どうしてこんなに冷たくなつたんだらう。何とかして暖めてやりたいね。』御心配には及びませんわ、ツルリオ。今が初めてといふんぢやないの——何うかすると二三時間も續きますわ。何うしたつて駄目よ。ただ治るのを待つてゐるばかりですわ。でも、フェエデリコは何うしてこんなに晩いのでせう？ もう暗くなりましたのに。』

彼女はこれだけの言葉を云ふのに全身の力を費してもしたやうに、ぐつたりと椅子に凭れた。

『戸を閉めようね。』と、私は露臺を突つきりながら云つた。

『いえ、いえ、開けた儘にして置いて頂戴。冷えるのはそのためぢやないのよ。新しい空気は身體に好いわ。それよりか貴方此處へ、私の傍へいらつしやいな——あの踏臺を持つてね。』

私は彼女の傍に跪いた。すると彼女は、『ね、ツルリオ！』と囁きながら、氷のやうに冷たい手で可愛らしげに私の頭を撫でた。

『だが、可愛い〜ジュリアナ、どうか打ち明けて呉れ。』と、私はもう我慢が出来なくなつてだしぬけに云つた。『どうか本當の事を打ち明けて呉れ！ お前は何か私に隠してゐる。きつと、何か、お前の打ち明けないものが。二人が此處へ来てから、二人が——幸福だつた時から、お前の心を離れない何かきまつた觀念、何か陰影のやうなものがある。でも二人は本當に幸福なのかしら？ お前は本當に幸福なのかえ——幸福だつて云へるかえ？ どうなんだか話してお呉れ。ジュリアナ！ 何故私に隠してゐるのだえ？ 成るほど、お前は病氣をして、まだよくならない——本當にさうだ。けど、さうばかりぢやない——さうぢやない。何か外にあるんだらう——私に分らないものが、私が少しも知らないものがあるんだらう。その爲めにはよし私がすつかり押潰されてもいゝから、本當のことを云つてお呉れ。今朝お前があんなに泣いて居たから、私は、「もう晩過ぎるのかえ？」と訊いた。するとお前は、「い

え、いえ——」と答へたね、私はお前を信じた。だが、晩過ぎはしないといふのは、何か他の理由からぢやないかえ？ 今日私達二人の前へ開けて來た大きな幸福を心から味ふのを妨げるものが何かあるんぢやないかえ。私が云ふのは——お前が知つてゐることだよ、お前が既に考へてゐることなのだよ。本當の事を話してお呉れ？』

私はぢつと彼女を覗めた。彼女は何も云はなかつた。私には段々何もかもが見えなくなつて來て、仕舞ひにはただ彼女の大きな眼、皿のやうに大きく見開いた、暗い、動かない眼だけしか見えなかつた。私の周圍にある其の他のものは皆んな消えて仕舞つた。私は彼女の眼を見てゐて恐怖の感を抱いた。それを拂ひ去るには自分の眼を閉ぢなければならなかつた。沈黙はどの位續いたらうか。一時間？ 一秒？

『私病氣なの。』と、到頭彼女はやつとの思ひで云つた。

『だが何んな風にね？』と、私は其の二語三語の響の中に、私が疑つてゐたことにひつたり合ひさうな告白を聞いたやうに思つて、狂氣の如くに吃つた。『何んな風の病氣だえ。死ぬかも知れない程のもの？』

私は何んな風に、何んな調子で、何んな身振で此の最後の問を口に出したか分らない。それが皆んな私の口から出たか、彼女がそれを皆んな聞いたかそれさへ分らない。

『いえ、ツルリオ、さういふ積りぢやないのよ。いえ——いえ。私がこんなになつてるのは——少し變つてるのは何も私の過失ぢやなかつたのよ。私の過失ぢやないわ。もう少し辛抱して下さらなくつちやなりませんわ。見た通りの者と考へてゐて下さいね。本當に、何も變つたことなんかありませんわ。何も隠してはゐませんの。今に快くなりますわ。屹度快くなります。それまでは辛抱してゐて下さいね。よくして下さるでせうね、深切にして下さるでせうね。さあいらつしやい、ツルリオ。貴方も少し變ね、ねえ、少し怪しいわ。貴方は全く不意に物怖なさるのね——蒼白くなるのね——何だか一寸も分りませんわ——此方へ、もつと此方へ、接吻して頂戴——もつと——もつと——さあ續けて。暖めて下さい。あれはフェデリコぢやなくつて？』

彼女の聲は途切れ勝ちで、いくらか嘎れてもゐた。けれども外の言葉では言ひ換へることの出来ない、慈しむやうな、優しい、案ずるやうな言ひ方で、さうだ一二時間前に二人が一緒に古びた石の腰掛に坐つて私の心を鎮め、慰めようとしたあの言ひ方で話した。私は接吻した。椅子は廣くて低かつた。それに彼女はほつそりとしてゐたから、彼女は私を側へ坐らせて、顫へながら私に抱きついた。そして自分の外套の端で私を包んでくれた。斯うして二人は、ひしと身を寄せて、互に抱き合つたまゝ吐息を交へてゐた。『あゝ、若し私の息、私の接觸

で此の温味をすつかり彼女の身の中へ移すことが出来さへしたら！』と私は思つた。そこで私は此の考を實現しようといふ空想的な努力を試みた。

『今夜。』と私は囁いた。『今夜はずつとお前を抱いてゐて上げるよ。もう顫へなくつてもすむよ。』

『えゝ、えゝ。』

『私はお前の側についてゐるよ。お前がどんな夢を見てゐるか、お前の顔で判断しよう。屹度お前は夢で私の名を言ふよ——』

『えゝ、えゝ。』

『よくお前は寢言を言つたつね。本當にそりや面白かつたよ。あゝ、あの聲！とてもお前になんか分りやしない。お前が聞いたことのない聲だもの——私だけが、私一人が聞いたんだよ。それが又聞かれるんだ。お前は何と言ふだらうね？ 大方私の名を云ふだらうね。お前が私の名をツと云ひ出す時の唇の動き具合は本當に好きだよ。まるで接吻を待ち受けて居るやうなんだよ。そんなことお前には分るまい？ 私は又お前の耳の中へ夢のやうに這入つて行く言葉を囁いたんだよ。あの時分、私は時々朝になつてお前の見た夢をよく當てたつけが、お前憶えてゐるかえ？ あゝ、ね、今に解るよ。あの時分よりも屹度楽しいよ。私は

本當に情愛深い看護で今にもお前の病氣を癒して上げるよ。お前には愛と優しさが大變必要なんだね。ええ。」

『ええ、ええ。』彼女は私の幻想を何處まで撞いまくりにさせながら、何時もかう繰返した。その爲め、私は自分の聲や又その聲が何か夢見るやうな戀歌でもあるやうに彼女の心を柔らげるに相違ないといふ信念から私の胸中に湧いて來るうつとりした心地よさは、益々募つて行つた。

『お前あれを聞いたかえ。』と、よく聞かうと思つて、私は少し起ち上りながら尋ねた。

『何を？ フェデリコですか？』

『いや。よくお聴きよ。』

二人は庭園の方へ向いて、耳を傾けた。

庭園はぼつとした董色の一色に溶け込んで、ただ一ヶ所池の鈍い光だけがそれと輝いてゐるだけであつた。ずつと遠い空の彼方には、まだ餘光がたたゆたつてゐた。それは、下が血色の赤、それから橙色、それから枯葉のやうな緑と云つたやうな三色帯になつてゐた。黄昏の沈黙を破つて、笛の吹出しのやうな朗かな澄んだ聲が響き亘つた。それは夜鶯ナイティンゲールであつた。『柳の木で啼いてゐますのね。』と、ジュリアナは私の耳に囁いた。

二人は夕暮のぼつとした薄紗薄紗の彼方に、次第に褪せて行く色帯を眺みながら、耳を傾けた。私の魂は其の聲から何か愛の大きな啓示しよしを探してもするやうにその方ばかり傾いてゐた。私の傍にゐる彼女——それを聞いてゐる彼女の感情は何んなであつたらう？ 何んな苦しみしみの深みへ彼女は落ちて行つたらう？

夜鶯は鳴き出した。最初は欣ばしい諧調モロディが湧き起つた。まるで眞珠が驟雨のやうに空中を落ちて行く時の澄み切つた顫聲のやうであつた。はたと歇んだ。それから又急速な、長く引つ張るやうな燥音が、得意さうに空威張をして見えない敵に挑戦でもしてゐるかのやうな力だめしの聲が聞えた。と又はたと歇んだ。其の歌聲は悲しい調子を帯び、低い奏しらべに溶け込み、低くなつて溜息のやうになり、低い呻聲になり、一人淋しい戀人の、果ない希望をつなぎ、光明を裏切られた悲しみを現した。それから最後に一聲、苦しい急劇な、鋭い叫び聲を立てた——が間もなく消えて仕舞つた。今度は又前よりも長い、もの／＼しい沈黙があつた。そして前と同じ喉から出たとは思はれないやうな別な調子が聞えて來た。それは如何にもしとやかで、臆病で、願ひ求めるやうでもあつた。いや愛らしい巢籠つてゐる雛の啼聲や、小さい燕の囀りにも似てゐた。やがて其の無邪氣な聲は、俄かにぱつと花やかな調子に變り、高い顫音に移つて、或は澄み切つた喉音が顫動したり、或は如何にも大膽な演奏曲になつたりして、

消えるかと思へば、又最高音ソプラノになつて高く聞えて來た。小鳥は自分の歌で酔つて仕舞つた。終りの歌が罷むか罷まない内に、次の調子が始まるといふやうで、停唱の間は極く短かつた。小鳥は有頂天になつて、蜜のやうに甘い、激越した、變化極りない旋律メロディーを奏でた。或は低く、或は鋭く、嚴かと思へば、快活に。又發作的の啜泣と、戀々たる哀哭とが這入つたかと思ふと、今度は急激な抒情脈が這入り、何か願ひ求めるやうな調子が加つて來たりした。庭中息を殺してそれを聽いてゐるかと思はれた。蒼空は柳の樹に凭れてゐるやうに見えた。その枝の間で眼に見えない詩人は己が心情を旋律の流に托してゐるのであつた。花の森も身動きして歎息した。西の方の地平線には、黄色い閃光が此處彼處にたゆたうてゐた。そして此の、今日の終りの餘光は、如何にも悲しく、又如何にも愁はしげに見えた。星がたつた一つ露玉の光るやうに顫へ戦いてゐた。

『明日！』と私にとつてはいろ／＼な光明を含んでゐるこの言葉で心の切願に應へながら、半ば無意識に呟いた。

斯うして夜鶯の啼聲を聞いてゐる間に、二人は何時か半ば起上つてゐた。で暫く二人はその儘起つてゐた。すると私は不意にジュリアナの頭が私の肩に重く凭りかゝるのを感じた。

『ジュリアナ！』と、私は吃驚して叫んだ——『ジュリアナ！』そして、私が驚いて身體を動

すと、彼女の頭は、まるで生氣のないものゝやうに、後の方へぐつたりそり返つた。

『ジュリアナ！』

彼女には聞えなかつた。露臺の方から射して來る蒼白い餘光に照し出された死人のやうに蒼ざめた彼女の顔を凝視みつめてゐると、私はドシンと恐しい考へに襲はれた。吃驚して我を忘れて、私は動かぬ私女の身體を仰向けに椅子に倚せかけた。そして彼女の名を呼びながら、顫へる指で着物の胸部を開けようとした。それは心臓を觸つて見ようと思つたからであつた。

『まあ、兄さん、何處へ行つたんです。』と云ふ弟の愉快さうな聲が聞えた。

(十一)

彼女は間も無く我に歸つた。殆んど起つことさへ出來ないのに、馬車に乗つて少しも早く歸らうとしきりに言ひ張つた。

旋て、彼女は縞羅紗に身を纏つたまゝ、黙つて隅つこに凭れた。弟と私とは、心配さうに時々眼を見交した。御者は馬に鞭を加へた。馬の早い調子の揃つた足音は、穩かな四月の夜

に、朗かな空を戴いて花の咲いてゐる籬沿ひの路に高く響いた。

時々フェデリコはジュリアナにどんな気分かと尋ねた。

『有難う、大變快くなりました。』

『寒くはありませんか？』

『えゝ、少し。』

其の答は明かに努めて云つたのであつた。何かと尋ねるのは、彼女には煩ささうであつた。到頭——フェデリコは彼女に話をさせようとしたものだから——彼女は云つた。『フェデリコ。許して下さい、話をすると疲れますから。』

馬車の幌は引上げてあつたので、彼女は膝掛にくるまつたまゝ身動きもしないで、暗闇の中に身體を隠してゐた。私は幾度か彼女に靠れかゝつて、顔を覗き込んだ。そして眠つてゐるのかと思つたり、又氣絶してゐるのではないかと心配したりした。其の都度、私は彼女が眼をぱつちり睜いて、暗闇の中を凝視してゐるのに出會つては駭いた。

長い間沈黙が続いた。フェデリコも私も口をきく氣がしなかつた。馬は大層遅いやうだつた。私は御者をもつと馬を走らせて呉れば可いと思つた。

『走らせる、ジョオバンニー！』

ラバディオラへ着いたらもう十時近かつた。母は、私等が晚いのを大變氣にして待つてゐた。

母はジュリアナの乗つてゐる様子を見ると、

『私は初めから此の遠足は少し過ぎると思つてゐたのに！』と叫んだ。

『まあ、おつ母さん、何でもありませんよ。』と、ジュリアナは母が安心するやうにと思つて云つた。『あの、明日の朝になれば屹度快くなりますわ。ほんの少し疲れたばかりなんですから。』

然し母はジュリアナを燈火の下で見るなり、吃驚して両手を舉げた。『おや！ おや！ まあ何て顔だえ！ まあ、よく立つて居られるね。——エディス、クリスチナ、大急ぎで！ 駆けて行つて湯婆ゆたんぼを持つて来て寢床を暖めておやり。——さあ、ツルリオ、二階へ抱いて行かなくつちや。』

『いえ、いえ。』と、ジュリアナは遮ぎつた。『お母さん、たまげることはありませんわ。大した事ぢや無いんですから。』

『私馬車でタッシへ行つて、醫者を呼んで來ませう。』と、フェデリコは口を入れた。『三十分もかゝれば行つて來られますから。』

『いゝえ、フェデリコ、宜いのよ——醫者は要りません!』と、ジュリアナは今にも怒りさうにして云つた。『醫者なぞ何の役にも立ちませんわ。私、手當を心得てゐます。要るものは二階にすつかり揃つてゐます。お母さん、いらつして下さい。まあ! 本當に、貴方方は何でも直ぐ怖がるんですのね! いらしつて下さい、さあいらしつて下さい。』もう彼女はすつかり元氣を恢復したやうであつた。一人で二三足歩いて行つたが、梯子段の上は母と私とが支へてやつた。部屋へ這入ると、彼女は痙攣するやうな身顫ひに襲はれた。それは數分間續いた。女達は彼女の着物を脱がせにかゝつた。

『ね、ツルリオ、どうか彼方へ行つてゐて下さい。』と彼女は願つた。『後程又來て見て下さい。お母さんが其の間は附いてゐて呉れますから。別に氣を揉むことはありませんわ。』

私は次の部屋へ行つて、長椅子に腰掛けて待つてゐた。女達の急いで歩く足音を聞いてゐると、堪へ難さに身も喰ひ入るばかりであつた。『何時になつたら行つてもいゝのか知ら。何時私は彼女と二人きりになれるのかしら。私は彼女を介抱してやる。終宵私は彼女の傍を離れたくない。一二時間の内には、多分落着いてすつかり快くなるだらう。私の手で彼女の髪の毛を撫でてやつて、よく眠らせてやらう。』私は不思議にも抱擁の功德きんめを信じない譯に行かなかつた。

旋てフェデリコが入つて來た。『えーッ。』と、彼は懐しさうに云つた。『好い鹽梅で、重くはなささうです。丁度今梯子段でエディスに話してゐたんですさ。下へ降りて何かお上りになりませんか。食堂はすつかり用意がしてありますから。』

『有難う、だが、今の所何も欲しくない——もう少し過ぎたらどうか知らんが。私は隣の部屋から、何時女達が呼びに來るか、そればかり待つてゐるんだよ。』

『ぢや別に御用がなけりや、引退りますよ。』

『あゝ、さうして呉れ、フェデリコ。私も直きに降りて行くから。何うも有難う。』

私は彼の出て行くのを見送つた。又もや忠實な弟は私に頼もしい感を與へて呉れた。再び私の心はその爲めに慰められた。

三分間ばかり経つた。向うの壁に掛けてある掛時計は、振子が正しく搖れて、時を刻んでゐた。針は十一時十五分前を指してゐた。私は堪へかねてジュリアナの部屋へ入らうとして起ち上ると、其處へ母が急いで這入つて來た。

『もうよほど落着いたやうだよ。』と、母は聲をひそめて云つた。『だが、良く眠つて呉れなければいけないのだよ——可哀さうに。』

『もう行つてもいゝんですか。』と、私は訊いた。

『あゝ、行きなさいよ。でも、是非とも安静にして置かなけりやいけませんよ。』
行きかけると、母は私を呼び止めた。

『ツルリオー』

『はい、お母さん、何ですわね。』

彼女は躊躇してゐるやうだつた。『あのね——あの手術からこつち——お前さんはお醫者と話をしたことはないのかえ？』

『いえ、ありますよ。一度か二度。で？』

『ぢやお醫者様は危くないと仰有つたの——』と、彼女は又もやもぢくした——『ジュリアナは又子供が出来ても危くないと云つたのかえ。』

私は返答に困つた。醫者とは何もそんなことを話さなかつたから。そこで私はたゞきまり悪さうに『それで？』と繰返した。

『お前ジュリアナが懐胎になつてゐることを氣が附かないかえ。』

私は胸をどすと重く打たれたやうに踉蹌よろめいた。

『懐胎？』私は最初暫くは其の意味がよく分らなかつたので吃つて云つた。

母は私の手を執つた。『それで、ツルリオー？』

『私は少しも知りませんでした。——』

『でも、お前さんの顔色は變だよ。ぢやお醫者は何も仰有らなかつたんだね——』

『さうです、醫者は——』

『まあ、ツルリオ、此處へお坐り。』

彼女は私を長椅子の上に掛けさせた。そして當惑さうに私を瞞めて、私が口を開くのを待つた。ほんの僅かの間であつたが、私は直ぐ眼の前にゐる母が見えなかつた。恐しく烈しい光が私の心の中にひよつくり湧上つて、一場の戯曲をすつかり眼前に展開して呉れた。

何處から私はそれに對抗するだけの力を得たか？ 何が私の理性を狂はせず置いて呉れたか？ 恐らく苦痛や恐怖やが餘りに多過ぎたので、英雄的な力が湧いて私を支へて救けて呉れたのであらう。

私は感受性を身體に取り戻し、周圍に對する認識力を回復すると、直ぐに、心配さうに私を瞞めてゐるのに氣が附いたから、何は扱て置き、彼女の恐怖を和げることが必要であるとはつきり感じたのである。

『私は知りませんでした。』と私は云つた。『ジュリアナはそんなことは何も云ひませんでしたし私も些つとも氣が付きませんでした。今聞いて驚きました。成るほど醫者は少し危いと

云つておりました——だからそれを聞いて驚かすにはおられないんです……御存じの通りジュリアナはあんなに繊弱いかよわ身體です。ですが、醫者はそんなに重く見てはゐませんでしたよ。手術はあの通り甘く行きましたし。今に分るでせう。兎に角醫者を呼びにやつて相談しなくてはなりませんね——』

『さう、さう、それが大事だよ。』

『ですが、お母さん。それは確かなんですね？ ジュリアナが貴方にさう申しましたか、それともただ——』

『私は最初はさういふ徴候から氣が附いたのだよ。決して間違ひはないよ。一兩日前まではジュリアナはそんな事はないと云つてゐたし、兎に角未だ確かでないよと云つたがね。お前さんが彼女おれのことで苛々してゐるから、當分お前さんにそんなことを話して呉れるかと頼んだがね。然しお前さんによく話して置いた通り、ジュリアナは、あの通り、身體を構はないのだからね！ それに——快くなるどころか、此處へ來てから日増しに險悪わるなつて行くやうだよ。何時だつて一週間もかゝればすっかり丈夫になれたんだが。憶えてゐるかえ？』

『ええ、さうでした。』

たがいに。』

『ええ、直ぐに。』で、私はもう靜乎ちつとしてゐることが出来なくなつたので、ジュリアナの許へ行くと云つて起ち上つた。

『あゝ、行つておいで——でも靜にして置いて、今夜は氣を落着けさせて置かなくつちやいけないよ。私は階下したへ降りて行くが、直ぐに又上つて來るからね。』

『おつ母さん、有難う。』と、云つて私は母の額に接吻した。

『氣をお付け、ねえ！』と彼女は云つて出て行つた。私は向う側の扉の闕の上にちつと立つて、その淑かな姿の消えて行くのを賸めた——質素な黒い衣服を着た、すらつとした、如何にも氣高い姿を。

私は云ひ様のない感に襲はれた。それは家でも私の周圍に倒れて來るのを見てゐたら、或は感ぜられるかも知れないやうな感であつた。私の心はすっかり眼前で壞れ、倒れ、跡方もなく消えて仕舞つた。そして私は何としても其の心を取り止めて置くことが出来なかつた。

不幸な人はよく『あの一時間に、私は十年歳を取った。』と云ふが、さういふ文句を耳にしない人は恐らく一人もあるまい。多くの人には斯う云ふ事は分りにくいかも知れない。が私にはその意味がよく分る。見た所では如何にも平穩であつたが、私が母と會話を交はしたあの數分間は、私を十年以上も歳取らせた。私達の心の生活は急激な加速度で變化するもので實に恐しい、又不思議なものである。

私は何うしたか。私は奔放な衝動に襲はれた。私は夜の闇の中へ遠く遁れて行かうと思つた。私は部屋へ走り込んで一人其處に閉ぢ籠つて自分の不幸をよく考へて、十分に會得しようと思つた、けれども私はさういふ暗示に抵抗するだけの沈着さを持たなかつた。私の本質の一番好い部分が其夜ははつきり現はれて來た。私の魂の沈痛からは最も男らしい性質が生れて來た。『私は、自分の動作を何一つ、母にも弟にも、いや、實際、家中の誰にも異様だ變だなどと感づかれないやうにすることが避く可からざることだ。』と、獨語を云つた。

私はジュリアナの扉口の前まで來て立ち止まつた。自分の四肢の激しく顫ふのを抑へることがどうしても出来なかつた。でも廊下を此方へ近づいて來る足音が聞えたので、私は思ひ切つて這入ることにした。

エデイス嬢がそつと凹間アルコヴから出て來た。そして靜かにするように合圖をした。

『奥様は今やつとお眠りになつた所です。』と彼女は囁いた。旋てそつと戸を閉めて部屋を出て行つた。

天井の眞中には洋燈ランプが吊つてあつて、靜かな平らな光を放つてゐた。一方の椅子には紫色の外套がかけてあり、今一つの椅子には彼女が美しいライラックの花の下でいかにも雅しとやかに着慣らしてゐた鼠色の着物がかけてあつた。かういふ物を見ると、苦しさがかみ上げて來て、私は再び遁げ出したいやうな氣になつた。私は凹間アルコヴの側へ行つて、カーテンを引き上げた。寢床が見えた。枕の上には黒い髪の毛の房々してゐるのが見えた。だが顔は見えなかつた。でも夜具の中に小さくなつてゐる彼女の輪廓は見えた。所謂眞實といふものも今は私の前へ卑しい獸性を具へたものとなつて現はれた。忌しい幻影がそれからくくと、閉ぢるだけの力も無い私の魂の眼の前を通り過ぎた——それには前に起つた出來事の幻影ばかりではなかつた。これから先に起らうとする出來事、避けることの出來ない事實の幻影もあつた。斯うして私は頑として動かし難い精密さで、これから先のジュリアナを見ないではゐられなかつた。(お、あの私の夢であり、お、あの私の理想であつた女が!)私はあの心臓の下には破戒の種子を宿した、不恰好な醜い姿を思ひ見ない譯には行かなかつた。あゝ誰がこれよりも怖しい懲罰を想像し得るであらうか。然しそれは全く眞實である——疑ふにも疑ふことの出來ない

ものであつた。

人は誰でも自分の悲しみが、到底我慢の出来ないものになると屹度我知らず其の堪へ難い苦しみを少しの間でもいゝから柔げたいと思つても、しやといふことを問題にする。『俺は間違つてゐるのかも知らない。』と一人考へる。『俺の不幸は多分思つてゐるほど大きなものではないのだらう。俺の苦しみは或は全然理由のないものかも知れない。』かういふ中休みの間に混亂し途方に暮れた精神は、事件の真相に就いて一層精確な考を得る餘裕が出来て来る。だが私の場合には、もしやといふ疑念はついぞ現れなかつた。私は一瞬間だつて變だといふやうな考は持たなかつた。今になつてすつかり分つて来た、私の心に起つた現象を説明しろと云つても私には何も出来ない。私の心には何か秘密な自發的な作用が働いて、恐ろしい事件に關係のある、然し今まで氣づかれないで来た徴候が順序正しく並んで来た。それには完全な、一貫した、明白な、矛盾のない論理的な關係が出来た。其の徴候は丁度或る物が眼に見えない桎梏を放れて、水面に現れて、水に漂つて、二度と再び水の中へ沈むのを厭つてゐるやうに、私の意識の中へ押入つて来た。どんな徴候も、又どんな證據も皆んなあるべき場所にちやんと落着いてゐた。だから其の連鎖の環を集めて、整へて、結び合せるには少しも骨は折れなかつた。古い一寸した事實さへ此の新しい光に照らされると、はつきりして来ないではな

なかつた。まして近頃の出来事はその一つ／＼が駭くほど生々と甦つて来た。花や花の香を何時になく厭がることや、異常な昂奮や隠しきれないあの嘔氣や、不意に顔が蒼白めることや、様子に何となく現れる限りない疲労や、露西亞の小説の中で印のついてゐる章句や、私の手から本を奪ひ取つた時の身振や、それから又ヴィルラリラの光景——さうだ、あの涙、あの嗚咽、あの曖昧な言葉と妙な微笑、半ば狂氣じみた饒舌、死をよく口にした——凡てさういふ徴候が今や私の魂に深く刻み込まれた、母の言葉を中心にして四方から群つて来た。私の母は云つた。『決して間違ひはないよ。一兩日前まで、ジュリアナはそんな事はないと云つてゐたし、兎に角まだ、確かでない』と云つたがね。お前さんが彼女のこと苛々してゐるもんだから、當分お前さんにはそんなことを話して呉れるなと頼んだがね——』事實は元より分りきつてゐた。それは全く確實事であつた。

私は凹間^{アルコク}に這入つて寢床に近寄つた。カアテンが下りて燈火はぼんやりとしか射して來なかつた。恐しくつて私は息も出來なかつた。ジュリアナの顔は半ば蒲團の下に隠れてゐたので、もつとよく看ようと思つて枕の上へ屈むと、どうしたのか血管の血はぢつと停つて仕舞つた。若しも其の瞬間彼女が頭を擡げて私に話しかけたら、何んな事になつたらうか、それは私にも分らない。

彼女は眠つてゐたかしら。ただ額が眉毛の所までしか見えなかつた。

私は暫し其處に立つて待つてゐた。だが本當に眠つてゐたのかしら。彼女は、身動き一つしないで横になつてゐた。蒲團の下になつてゐる脣からは、吐息一つ聞えなかつた。額が眉毛の邊りまで見えるだけで、額は隠れてゐた。

若し彼女が私のゐることに氣づいたならば、私は何としたらうか。今更尋ねて見たり、話し合つて見ることも出来なかつた。私が何も彼も承知だと云ふことを感づいたら、彼女はどんな極端な真似をするか知れなかつた。そこで私は愛情に少しも變りのない風を見せ、何も知らない風を装ひ、四時間前にヴィルラリラであの優しい言葉を口にしないでゐられなかつた情感を現すことに努めるのが時宜に叶つた仕打であつた。

困つたやうな眼附で周囲を見廻すと、不圖、床の上に細かに金の刺繡のしてある上靴が見つかつた。それから傍の椅子の上には、美しい女の晴衣が一重ね置いてあつた。嫉妬の情が、むら／＼と起つて來た。手荒くジュリアナを呼び起して、烈しい激憤に驅られて狂氣染みだ残酷な言葉を彼女の顔面にたゞきつけてやりたいと思つたが、それをしないでやんだとは實に奇蹟と云つてよいか何と云つてよいか分らなかつた。

私は譯の分らない失望を感じて『この先はどうなることだらう。』と考へながら、ふら／＼

と凹間アルコブから出さうになつた。

私は出ようと思つた。『階下へ降りよう。母にはジュリアナは眠つてゐる——靜かにぐつすり眠つてゐると云はう。私も亦休息しなくつちやいけないと告げよう。自分の部屋へ引下らう——それから——明日の朝——』だが私は先へ進むことが出来なかつた。闕を越す力さへ出ないことが感ぜられた。いろ／＼な恐怖に襲はれた。誰かに瞞められてでもゐるやうに思はれたので、私は不圖、凹間アルコブの方へ顔を向けて、其處に突立つた。カアテンが動いたやうであつたが、私の思ひ違ひだつた。それなのに、尙ほ磁石の波動のやうなものがカアテンの間から出て、無理やりに私を其方へ引寄せた。身顛ひしながら、私は又々凹間アルコブへ這入つて行つた。

ジュリアナは元の通りに横になつてゐた。彼女は眠つてゐたのかしら。額がただ眉毛の邊りまでしか見えなかつた。

私は寢床の傍に坐つて待つてゐた。其の間に、私は敷布のやうに白い、大變美しい又潔らかな、如何にも妹らしい額を贈めた。それは私が敬虔な氣持になつてよく接吻した額ではなかつたか、又私の母がよく接吻した額ではなかつたか。

汚れてゐる徴候などは何處にも無かつた。一寸見には微塵も變つてゐなかつた。だが私の

魂の眼はあの白い額の上にも汚點を見た。如何なる力を以てしてもそれを拭ひ去ることは到底出来なかつた！

先頃有頂天になつて喜んだ時に云つた言葉が胸に浮んで來た。『俺はお前を看護して上げるよ。お前の顔で見てゐる夢を判断するよ。』其の度に彼女は『えゝ、えゝ。』と、繰返したつけ、そこで私は考へた。『彼女は實際どんな生活をしてゐるのだらう？ どう爲ようと思つてゐるのかしら。何を企んでゐるのであらう。』其處まで來て私は自分の心配を考へるのは止めて、彼女の心配を想像して、彼女がどの位不幸なのかを知らうと思つた。

實際、彼女の悩みは絶望的で、際しのない、柔らぐことのない、堪へられぬものに相違ない。私の罰は取りも直さず彼女の罰で、彼女にとつて見れば屹度自身の罰よりも一層怖しかつたに相違ない。ヴィルラリルラのあの庭園の小徑で、腰掛けて、家の中で彼女は少しも疑はずに私の聲を眞實そのまゝの響と聞いた。私の顔から眞實を汲取つた。彼女は私の愛が廣大無邊であることを信じきつてゐた。

『私が遠くお前を探してゐるのに、お前は始終私の傍にゐたんだね。ねえ如何だえ、それだけのことだつて、お前は心から涙を流さなくちつやならないよ。かういふ愛の證據を得るのにもつと、もつとお前は涙を流さうとは思はないのかえ。』

『えゝ、もつとでも！』

彼女は聲にあらん限りの力を罩めて、如何にも聖らかなやうな溜息を洩して答へた。『えゝ、もつとでも！』

斯ういふことの爲めには、彼女は喜んで一層烈しく涙を流した。いや一層烈しい苦しみを受けた。そして數年間男に別れて嘆き暮してゐたが、其の男が今足許にゐるの見て、夢にも見たことのない幸福な天國が眼の前に開けて來たのを見てゐながら、而かも彼女は自分が純潔でないことを知り、不純だといふ實感を持つてゐることを知り、又他人の胤を宿してゐる胸の上に私の頭が當てられるのを感じずには居られなかつたのを知つてゐたのだ。あゝ、如何して彼女の涙が私の顔の上に痕跡を残さなかつたのであらうか。どうして私は其の涙を飲んで中毒しなかつたらう？

瞬く間に愛し合つた日のことが眼の前に浮んで來た。私は又、二人がヴィルラリルラへ着いた時から、ジュアリナの顔に現はれたいろ／＼な表情、さうだ、ほんの一寸浮んだ表情をさへ眼に浮べた——今になつて見ると、其の意味がよく分つて來た。大きな光が私の上に射して來た。あゝ、私が未來の『明日』を語つた時、彼女の唇からもれた明日は、彼女にとつて何といふ怖しい言葉であつたらう。それから私は絲杉の樹に面した、露臺の上で二人が交した僅

かな對話を想ひ出した。彼女は頓死といふ考を抱いてゐた。若し彼女が直ぐに、思ひ掛けなく死んだとするなら、——例へば明日の日にでも萬一死んだとするならどうだらう、と私に尋ねたりした。それから、ずつと後になつて、彼女は私に縋り附いて、『いえ、いえ、ツルリオ、先きのことは何も云つて下さいませ。只だ今日のことを、過ぎた日のことだけを考へて下さいませ』と、叫んだつけ。さうした言葉、さうした行動は、恐しい決心、悲劇的な覺悟をすつかり語るものではなかつたか？ 彼女には他に遁路が無いので、明日を待たずに今夜にも、死なうと覺悟をしたのであつた。

目前に逼つてゐる彼女の危険を考へると、最初は恐怖に打たれないではなかつたが、直ぐ後で私は心の中で、ジュリアナの死と過失とでは、何方が恐しい結果になるかしらといふことを考へ出した。何れにしても不幸は免れ難いものとすれば、即時に大團圓の來る方が、怖ろしい戯曲のぐづぐづとながびくよりはどんなにましであるか知れなかつた。私の想像はジュリアナが新しく母となる時の面影を描き出して、私の名を冒して、後嗣となり、私の母や、弟や、小さな娘達の抱愛を擅にする闖入者を眼の前にありくと見せて呉れた。『死以外にはかういふ事件の恐しい進行を遮るものは何もない。だが彼女の自殺は秘密裡に片附くだらうか。ジュリアナはどんな風に自殺を企てたかしら。彼女の死が自發的なものであることを

否定し得ないとすれば、私の母や、弟は何んと思ふだらう。母にとつてはどんなにか恐しい打撃であらう？ そしてマリアにとつては？ ナタリアにとつては？ そして又私はこれらの生涯を何うしたらいいだらうか。』

實際、私にはジュリアナのゐない生活を考へることは出来なかつた。私は何を惜いても此の女を愛した。鋭い嫉妬を烈しく起すことはあつたが、未だ彼女に對して少しの憎悪や、嫌厭や、又侮蔑やを感じたことは露程もなかつた。怨恨や、復讐の念などは夢にも胸に浮べたことなどはなかつた。ただ、私は彼女を深く憐愍なものにのみ思つてゐた。始めから私は彼女の墮落に對する責任を一切身に引受けてゐた。自責に等しい寛大な心持になつて誇りに私は一人考へた。『彼女は私の打つまゝに優しく頭を曲げてゐた。苦しみた堪へてゐた。而かも黙してゐた。彼女は男性的な勇氣と英雄的な自己犠牲の實例を私に見せて呉れた。今度は愈々私の番なのだ。私は彼女に對して盡すべき義務がある。私は何んなにしても彼女を救はなければならぬ。』此の氣高い精神、此の好感情はすべて彼女から私が受けたものに外ならかつた。

私は更に近寄つて彼女を熟々と眺めた。彼女は身動きさへしなかつた。顔は依然として隠れた儘であつた。『本當に眠つてゐるのか知らん。』と、私は思ひ耽つた。『それとも疑念を起

させまいとして、又一人でゐたいので、わざとさういふ振りをしてゐるのではあるまいか。確かに、明日の日を待たない計畫たくみであるならば、其の實行を容易にしようとして、力に及ぶだけのことは何でもやるに相違ない。彼女は眠つた風ふうをしてゐるのだ。若しも本當に眠てゐるのならあの神経の昂奮し易い彼女があんなに穩やかに、あんなに身動きもしないで寝てゐる筈は無い。そつと揺り起して見よう——』だが、私に躊躇した。『彼女が本當に眠つてゐるなら？』どうかすると、神経の力を極度に使つた後では、どんなに激しい道徳的な苦悶の眞中にあつても、尙ほ人は氣絶したやうに、ぐつすり眠るものだ。あゝ此の睡眠が明日まで續いて呉れたら、そして其時元氣づいて、今のやうな二人の間の避け難い會見に耐へるだけの力を十分に獲て、起上ることが出來て呉れたら！』彼女の蒼ざめた額をぢつと睥めながら、私は尙ほも近寄つた。見ると額は濕つてゐた。汗が眉毛の上に溜つてゐた。麻酔劑の毒作用で現はれた冷汗であることが直ぐに分つた。疑惑がふつと胸に浮んだ——謨爾比涅！私の眼は本能的に寢床のすつと向う側にある小さな寢臺の方へ向けられた。それは誰も知つてゐるあの素素もともともの記號である、小さい黒い死人の頭の貼り附けてある瓶を捜す爲めであつた。卓子の上には水壘、洋盃、燭臺、手巾、和いだ光の中に耀いてゐる髮針があつた——ただそれだけであつた。私は恐怖に襲はれて苦しみながら、急いで凹間をすつかり檢べて見た。

『ジュリアナは注射薬として謨爾比涅を少しは何時も持つてゐた。屹度毒薬を飲んで死なうと思つたのだ。其瓶は何處に隠してあるのかしら。』私の想像は段々昂つて來た。私は椅子に凭れて顫へてゐた。そして心の中では忙しなく次のやうな事を考へた。『もうそれを飲んだのかしら。あの冷い汗。それにしても何時——何うして？』一人でゐた時はなかつた筈だ。だが小さい壘の薬を飲むには一寸の隙があればいゝのだ。さうだ。丁度今し方、家へ着いたばかりの時に顫へ出したあの瘰癧れいり！ あらかじめ自殺を計つてゐたとすれば、多分謨爾比涅を持ち廻つてゐたのであるまいか。ラバディオラへ着かない内に、馬車の中で、暗闇の中で、それを服んだのではなからうか？ フェデリコが醫者を呼んで來ようと云ふのにそれを遮つたつけ——』私は謨爾比涅がどんな作用をするものか其の徴候は大して知らなかつた。だが、不確ながらも、あの汗の滲み出してゐる白い額や、てんで身動一つしない有様は、恐しさで私は木石化するに十分だつた。私は母にやつて來られるのを氣にしながらも尙ほそれを望んでゐるやうに、ぢつと耳を傾けてゐた、それから——死人の顔から蔽物を取るんだつて是れ程は顫へはしないだらうと思はれるまでに顫へながら——私は徐々に、極めて徐々に、ジュリアナの顔から夜具を取り除けた。彼女が眼を開けた。